

『仮名手本忠臣蔵』

目次（本文）

- 大序 鶴が岡の段
 - 第二段 桃井館の段
 - 第三段 鎌倉御所の段
 - 第四段 扇ヶ谷上屋敷の段
 - 第五段 山崎街道の段
 - 第六段 与一兵衛住家の段
 - 第七段 一力の段
 - 第八段 道行旅路の嫁入り
 - 第九段 山科閑居の段
 - 第十段 天河屋の段
 - 第十一段 勢揃より引上の段
- 大序 鶴が岡の段

： 仮名手本忠臣蔵 *

L1 《地中》嘉肴有^リといへども 《ウ》食せざれば 《ウ》其味を^{しら}ずとは。

《ハル》国治てよき武士の 《ウ》忠も武勇も 《中》かくるゝに。 《ウ》たとへば星の昼見へず 《ウ》夜は乱れて 《ハル》頭はるゝ。 例を爰に 《ウ》仮名書の 《ヲロシ》 太平の代の。 政。 《ユリ地色中》 比は歴応元年 《ウ》二月下旬。 《ウ》足利將軍尊氏公新田義貞を 《色》討亡し。 《ウ》京都に御所を構 《ウ》徳風四方に普く。 《ハル》万民草のご

とくにて《フシ》靡^{なび}。従ふ御^み威勢^{いせい}。《地色中》国に羽をのす羆^{つる}が岡^{おか} 《ウ》八幡宮御造宮成就^{やうじやうじゆ}し。 《ハル》御代参として 《ウ》中 《御舎弟足利左兵衛督直義公》 《ウ》鎌倉に下着なりければ。 《ウ》在^い 《一》鎌倉の執事高武蔵守師直。 御^み膝元^{ひざもと}に人を見下^{みくだ} 《おろ》す権柄眼^{けんへいがん}。 《ウ》中 《御馳走の役人は。 桃井播磨守が弟 《ウ》若狭^{わかさ} 助安近^{すけやすか}。 《ウ》伯州の 《ウ》城主塩冶判官高定。 《ハル》馬場^{ばば} 先^まに 《ウ》幕打廻し 《フシ》威儀^{いぎ} 《ぬぎ》を正^{ただ} 《た》して相^あ詰^つ 《つむ》る。 《地色ウ》直義仰出さるゝは 《ハル》中 《いかに師直。 《詞》此唐櫃^{からび}に入^い置^おキしは。 兄尊氏に亡されし新田義貞。 後醍醐の天皇より給はつて着せし兜^{かぶと}。 敵なからも義貞は清和源氏の嫡流^{ちやくりゆう}。 着捨^{きすて} 《きすて》の兜^{かぶと}といひながら。 其儘にも打置^{うち}かれず。 《地ウ》当社^{とうしや} 《とうしや》の御蔵に 《ウ》納^おさめ 《おさめ》る条 《ハル》其心得有べしとの 《ウ》敵命^{あかぬい}なりと宣^{のたま} 《のたま》へは。 《ウ》色 《武蔵守 承^{うけたま}り。 《詞》是は思ひも寄ざる御事。 新田が清和の末なり逆着せし兜を尊^{そん}敬^{きやう}せば。 御簾下^{みすだ} 《はたした》の大小名^{おほなま} 《めう》清和源氏はいくらも有。 《地ウ》奉納^{ほうのふ} 《ほうのふ》の義然るべからず候と。 《ハル》ウ色 《遠慮なく言^い上^あす。 《詞》イヤ左様にては候まじ。 此若狭^{わがさ} 助が存るは。 是は全^ま 《まつた》く尊氏公の御計略^{けいりやく}。 新田に徒党^{とどう}の討洩^{うりやく} 《うちちもら》され御仁徳^{じんとく}を感じし。 攻^{せめ} 《せめ》ずして降参^{かうさん}さする御方便^{ごべんぽう}と存奉^{ぞんぽう}れば。 無用^{むよう}との御評義^{みひやうぎ}卒尔^{そつじ}也と。 《地ハル》いはせも果^はず。 《詞》イヤ師直にむかつて卒尔^{そつじ}とは出過^いたり。 義貞討^う死したる時は大わらは。 死骸^{しがい}の傍^{わら} 《そば》に落散^{おちち} 《おちち》たる兜^{かぶと}の数は四十七。 どれがどふ共見しらぬ兜。 そふで有^あふと思^{おも}ふのを。 奉納^{ほうのふ} 《ほうのふ》した其跡^{そのあと}でそふでなければ大きな恥。 なま若輩^{わがわら}な形^{かたち} 《なり》をしてお尋^{もと}もなき評義^{ひやうぎ} 《ひやうぎ》。 《地ハル》すつとんでお居^いやれ 《ウ》御前^{ごぜん}よきま 《ウ》出る俣^まに。 杭^か 《くゐ》共思^{とも}はぬ詞の大槌^{おうち} 《うち》。 《ウ》打^う込^これて 《ウ》せき立^{せきた}色目^{しきめ} 《ウ》色 《塩冶引^{しやじひ}取^とって。 《詞》コハ御尤成^{ごよりなる}御評義^{みひやうぎ}ながら。 桃井 《も》のぬ 《殿の申^{のま}さるゝも納^おさま 《おさま》る代の軍法^{ぐんぽう}。 《地ウ》是以^こて捨^すられず双方^{さうほう}全^{ぜん}き直義公の。 《ハル》御賢慮^{ごけんりょ}仰奉^{おほ}ると。 申^ま上^あれば 《色》

御機嫌有。《詞》ホ、さいはんと思ひし故。所存有ッて塩冶が婦妻を召シ連レよと言付ケし。是へ招けと有ければ。《地色ハル》はつと答の程も《中》なく。馬場の白砂《ウ》素足にて裾で《ハル》庭掃襦は。《長地ウ》神の御前の玉はゞき玉も欺く薄《中》化粧。塩冶が妻の《ウ》かほよ御前。《フシ》遙さがつて畏る。《地ハル》女好キの師直《ウ色》其儘声かけ。《詞》塩冶殿の御内室かほよ殿。取前より嘸待遠一とを《御太義》。《地ウ》御前のお召シ近カふ／＼と《ハル》取持顔。《ウ色》直義御らんじ。《詞》召シ出す事外ならず。往元弘の乱に。御醍醐帝都にて召サレし兜を。義貞に給はつたれば。取期の時に着つらん事疑ひはなけれ共。其兜を誰レ有ッて見しる人外になし。其比は塩冶が妻。十二の内侍の其内にて。兵庫司の女官なりと聞及ぶ。嘸見知りあらんず。覺えあらば兜の本シ阿弥。《地ハル》目利／＼と女ゴには。《ウ》嚴命さへも和らかに。《フシ》お受ケ申ヌも又なよやか。《詞》冥加に余る君の仰。夫レこそは私が。明暮て馴（なれ）し御着（ごちやく）の兜。義貞殿拝領にて。《蘭奢待》といふ名イ香を添て給はる。御取次キは則チかほよ。其時の勅答（ちよくたう）には。人は一チ代名は末代。すは討死せん時。此蘭奢待を思ふ儘。内兜に燻（たき）しめ着ルならば。《地ウ》鬢（びん）の髪に《ハル》香（か）を留（とめ）て。名イ香かほる首取しと《ウ》いふ者あらば。《ウ》義貞が取期と《ウ》思召サレよとの。詞はよもや違ふまじと《ウ》申シ上たる口元トに。《中ヒロイハル》下心有師直は。《フシ》小鼻（ばな）いからし聞居たる。《地色ハル》直義くはしく《色》聞し召落散（ちち）たる兜四十七。此唐櫃（からびつ）に入レ置イたり。《地ウ》見分ケさせよと《ハル》御上意の下侍。《中ウ》かゞむる腰のを。《ハル》明ケる間

* 「蘭奢待」は、聖武天皇の御代日本に渡来し、「黄熟香」と称したのを天皇が東大寺の三文字を籠めた「蘭奢待」と改めさせ、諸寶藏に置き、寺鎮とした。『和漢三才圖會』七三

遅（おそ）しと《中》取出すを。おめず《ウ》臆（おく）せず立寄ッて。《ハルフシ》見れば所も。《中》名にしおふ。《ウ》鎌倉山の《ハル》星兜。《ウ》とつぱい頭（がしら）《ウ》し、頭。扱指（さし）物は家々の《フシ》流義（りうぎ）に寄（よ）ぞかし。《地中キン》或（あるい）は。直平筋兜。《ウキン》鍔（しころ）のなきは。《ハル》弓の為。《中》其主々の好（このみ）逆。《ウ》数々多き其中にも。《ウ》五枚（まい）兜の竜頭（たつがしら）是ぞといはぬ其内に。ぱつとかほりし《中キン》名香は。《ハルウ》かほよが馴（なれ）し義貞の兜にて御座候と《フシ》指出せば。《地ウ》左様ならめと一決（けつ）し《ウ》塩冶桃井兩人は。《ハル》宝藏に納（おさむべ）へしこなたへ来れと御座を《中》立。《ウ》かほよにお暇給はりてだんかづらを《ウ》過（き）給へば。《ウハル》塩冶桃井兩人も《中ヲクリ》打連（て）てこそ入にける。《地色ウ》跡にかほよは《ハル》つきほなく。《ウ》師直様は今暫し。御苦勞（くらう）ながらお役目を。《ウ》お仕舞（しまひ）有ッて《色》おしづかに。《詞》お暇の出た此かほよ。長居は恐れおさらばと。《地ハル》立上る袖摺（すり）寄ッて《色》じつとひかへ。《詞》コレまあお侍（侍）待（待）給へ。けふの御用仕舞次第。其元へ推参（すいさん）してお目にかける物が有。幸（さい）のよい所召（し）出された直義公は我為（わがため）の結（むす）ぶの神。御存（ぞ）のごとく我等（我等）哥道（かどう）に心を寄。吉田の兼好（けんこう）を師範（しはん）と頼（たの）む。其元へ届（とど）くれよと問（とひ）合せの此書状。いかにもとのお返（へ）事は。口上でも苦（くる）しいない。《地ウ》袂（たもと）から袂（たもと）へいる、《ハル》結（むす）び文。顔に似合ぬ様参る《ウ》武藏（むさし）鍔（しころ）と《ウ》書（か）たるを。見るよりはつと思へ共。《ウ》はしたなう恥（かたじけ）めては却て夫（つと）の《ウ》名（な）の出る事。持（も）帰（かへ）つて《ウ》夫（つと）に見せふか。《中ウ》いや／＼夫（つと）では塩冶殿。《ハル》憎（にく）しと思ふ心から怪家（けが）《ウ》過（あやまち）にもならふかと。《フシ》物（もの）をいはず《色》投返（なげかへ）す。《ウ》人（ひと）に。見（み）せじと《ウ》手（て）に取上（と）る。《詞》戻（もど）すさへ手にふれたりと思ふにぞ。我（わが）文（ぶん）ながら捨（す）も置（お）かれず。くど

うは言ぬ。よい返事聞込は。くどいてくどき抜。天下を立ふと
ふせふ共儘な師直。塩治を生ふと殺そふ共。かほよの心たつた一トつ。
何とそふではあるまいかと。《地ウ》聞にかほよが返答も。《ハルフシ》
涙ぐみたる計なり。《地色ウ》折りから来一き一合す若狭ノ助。例の非道
と《ウ》見て取ル氣転一きてん。《詞》かほよ殿まだ退出なされぬか。お暇
出て隙どるは。《地ウ》却て上への恐れ《フシ》早お帰りと追ッ立れば。
《地ウ》きゃつ扱はけどりしと。《ノル》弱味一よはみ一をくはぬ高、
《ウ》師直。《詞》ヤア又してもいはれぬ出過。立てよければ身が立ッす。
此度の御役目。首尾よう勤一つとめ一させくれよと。塩治が内証かほ
よの頼。そふなくて叶はぬ筈。大名一めう一でさへあの通り。小身一せ
うしん一者に捨知行誰がかげで取ッする。師直が口一トつで五器一き一
提一さげ一ふも知しぬあぶない身代。夫れでも武士と思ふじやと。《地
ハル》邪ノ返報にくて口くはつとせき立ッ《ウ》若狭ノ助。《ウ》刀の
こる口碎る程《ステ》握り。詰一つめ一は《ウ》詰たれ共。《中ウ》
神前也御前也と《ハル》一旦の堪忍一かんにん一も。《ウ》今一言
が《ウ》生キ死の。《色》詞の先キて還御一くはんぎよ一ぞと。《中》御
先一みさき一を払一はら一ふ声々に《ハル》詮方なくも期一ご一を延
一のば一す。無念は《ウ中》胸に忘れぬ。《ウ》悪事悖一さかつ一
て運強一うんつよ一く《ウ》切れぬ高の《ハル》師直を。《ウ》あす
の我身の《ウ》敵共。《中キンウ》しらぬ塩治か跡押サへ。《ウ》直義公
は悠一ゆふ一々と歩御一ほぎよ一《ハル》成リ給ふ御威勢一ゐせい一。《ウ》
人の兜の竜頭御蔵に入る数々も。四十七字の《ウ》いろは分ッ《ウ》
かなの兜を和一やは一らげて。兜頭巾一づきん一の《ウ》ほころびぬ国
の。《ウ》掟一おきて一ぞ三重一《上》久かたの。*

第二段 桃井館の段

∴ 第貳 *L2 《ハルフシ》空一そら一も弥生一やよひ一の。《中》た
そかれ時。《地ウ》桃井若狭ノ助《ハル》安近カ。《ウ》館の行義一ぎ
やうぎ一《中》はき掃除一さうぢ一。《ウ》お庭の松も幾一いく一千代を
守る館の《ハル》執権職一しつけんしよく一。《ウ》加古一かこ一川本
蔵行国。《ウ》年しも五十一一いそじ一の分別盛一ふんべつざかり一。《フ
シ》上下ため付ッ書院先キ。《地ハル》あゆみくる共《色》白濁一しら
す一の下人。《詞》ナント関内。此間はお上にはでつかちないお拵へ。
都からのお客人。きのふは霧が岡の八幡へ御社参一しやさん一。おびた
しいお物入ア、其銀一かね一の入目がほしい。其銀が有たら此可一べ
く一介。名を改一あらた一めて楽一たの一しむになア。何ッじや名を改
めて楽しむとは珍一めづ一らしい。そりや又何と替一かへ一る。ハテ角
助と改メて胴一どう一を取ッて見る氣。ナニばかつつらなわりやしらない
か。きのふ霧が岡で。是の旦那若狭ノ助様。いかふぶ首尾一しゆび一で
有ッたげな。子細はしらぬか師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋一や
つこへや一の噂。定メて又無理をぬかして。お旦那をやりこめ《地色》
おつたであると《フシ》さがなき口々。《詞》ヤイ一何をざは一
とやかましいお上への取ぎた。殊に御前の御病氣。お家の恥辱に成ルと
有ラば此本蔵聞流カし置ッべきや。禍一わざはひ一は下モ部の嗜一たしなみ一。
掃除一さうぢ一の役目仕廻たら。皆いけ一《地ウ》と和一やは一ら
かに。《ハル中》女小性か持チ出る。《ウ》たばこ輪一わ一をふく雲をふ
く。《本フシ》廊下一らうか一音トなふ《ハル》衣一きぬ一の香一か一
や。《地中ウ》本蔵がほんさうの《ウ》一人ノ娘の小浪御寮一りやう一。
《ウ》母のとなせ諸共にしとやかに《色》立出れば。《詞》是は一両
人共御前のお伽は申さいで。自身の遊びかふ行義一ぎやうぎ一千万。
イエ一今日は御前様殊外の御機嫌。今すや一とお休ミ夫でナア
母様。イヤ申本蔵殿。先キ程御前の御物語。きのふ小浪が霧が岡へ御代
参の帰るさ。殿若狭ノ助様。高ノ師直殿詞諍一あらそ一ひ遊ばせしとの御

ひ)のなき様に今一^チ応御使者に参れと。主人判官申付候故右の仕合。此通若狭ノ助様へ御申上下さるべしと。《地色ノル》水を流せる口上に。《ウ》小浪はうつかり顔見とれ《フシ》とかふ。諾(いらへ)もなかりけり。《地色ウ》ヲ、聞た^ク使太義と《ウ》若狭ノ助。《ウ》一^ト間より《色》立出。《詞》昨日お別れ申てより。判官殿間違てお目にかゝらず。成^ル程正七つ時に貴意(きみ)得(え)奉らん。委細(いさい)承知(せうち)仕る。判官殿にも御苦勞(くらう)千萬と。宜しく申伝へてくれられよ。お使者太義。然らばお暇申上^ケん。ナニお取次の女中御苦勞と。《地ウ》しづ^ク立^ッて《ハル》見向もせず《フシ》衣紋繕(ゑもんつくろ)ひ立帰る。《地ハル》本蔵一^ト間より立かはり。《詞》ハア殿是に御入。弥(いよいよ)明朝は。正七つ時に御登城(とじやう)御苦勞千^ニ万^ニ。今宵(こよひ)も取早(もはや)九つ。暫く御^シ間眠(まどろみ)遊ばされよ。成^ル程^ク。イヤ何本^シ蔵。其方にちと用事有密(みつ)々の事。小浪を奥へ^ク。ハアコリヤ^ク娘。用事(ようじ)あらば手を打ふ奥へ^ク《地ウ色》と娘を追イやり。《ウ》合点の行^カぬ主人の顔色と《ハル色》御傍(そば)へ立寄^リ。《詞》先^キ程よりお伺(うか)ひ申さんと存ぜし所。委細(いさい)具(つぶさ)に御仰。《地ウ》下さるべしと指寄(さしよれ)ば《ハル色》にじり寄^リ。《詞》本蔵今此若狭ノ助が言出す^一言^シ。何に寄^ラず畏(かしこま)り奉ると一言^シと返さぬ誓言(せいごん)聞ふ。ハア是は^ク改まつた御詞。畏り入^リ奉るではござれ共。武士の誓言(せいごん)はならぬといふのか。イヤさにあらず。先^ツ委細(いさい)とつくと承はり。子細(しさい)をいはず跡(みけん)見か。イヤ夫^イは。詞を背(そむ)くか。サア何^シと。《地色ハル》ハツつと計指^シうつむき《フシ》暫く。詞なかりしが。《地ハル》胸を極^テて指添拔(そへぬき)。《ウ》片手に刀拔^キ出し。《ウ》てう^クと金打(きんてう)し。《詞》本蔵が心^シ底(てい)かくの通り。とどめも致さず他言(たごん)もせぬ。先^ツ思召^シの一通^ッおせきなされずと。本

蔵めが胃(ゐ)の腑(ふ)に。落付^ッ様にとつくりと承はらんと相述る。ム、一^ト通り語(かた)つて聞せん此度官領足利左兵衛督直義(くはんれいあしかぎさひやうへのかみたゞよし)公。鶴が岡造宮(さうゑい)故。此鎌倉へ御下向(げかう)。御馳走(ちさう)の役は塩治判官。某兩人承はる所に。高氏將軍(たかうぢしやうぐん)よりの仰にて。高^ノ師直を御添人^ト。万^シ事彼が下知に任せ御馳走申上^ッよ。年^シばいといひ諸事物馴(なれ)たる侍と。御意(み)に従ひ勝^ッに乗^ッて日比の我儘(ま)十倍増(ばいまし)。都の諸武士並(なみ)居る中。若年(じやくねん)の某を見込^ミ雑言過言(ざうこんくはこん)真^ツ二つにと思へ共。お上の仰を憚(はぶか)り。堪忍(かんにん)の胸を押^サへしは幾度(いくたび)。明日は取早了簡(もはやれうけん)ならず。御前にて恥面(はぢつら)かせる武士の意路(いぢ)。其上にて討^ッて捨る必留^ルるな。日比某を短慮(たんれ)なりよ。成と奥を始^メ其方が異見(いけん)。幾度(いくたび)か胸にとつくと合点なれ共。無念^シ重(かさな)る武士の性根(しやうね)。家の断絶(だんぜつ)奥が嘆(なげ)。思はんにてはなけれ共。刀の役目弓矢神への恐れ。《地ウ》戦場(せんじやう)にて討死はせず共。《ハル》師直一^チ人^シ討^ッて捨れば《ウ》天下の為。《ウ》家の恥辱(ちじやく)には《中》かへられぬ。《ウ》必々短氣(たんき)故に《ハル》身を果す若狭ノ助。《ウ》猪(いのし)武者よろたへ者と。《ウ》世の人口(しんこう)を《中》思ふ故。《ウ》汝にとつくと《ウ》打明すと。《ハル》思ひ込^シたる無念の涙。《スエ》五蔵(ござう)を貫(つらぬ)く《中》思ひなる。《地色ウハル》横手を打てしたり^ク。《詞》ム、よう訳(わけ)をおつしやつた。よう御了簡(れうけん)なされた。此本蔵なら今迄了簡はならぬ所。ヤイ本蔵ナ、何^シと言った。今迄はよう了簡した堪忍(かんにん)したとは。わりや此若狭ノ助をさみするか。是はお詞共覚(おぼ)へず。冬は日かげ夏は日面(おもて)。よけて通れば門^ト中にて。行違(ちかひ)の喧嘩(けんくは)口論(こうろん)ないと申^スは町人の譬(たとへ)。武士の家では杓子(し

やくし一 定期（ぢやうぎ）。除（よけ）て通せばほうずがないと申すのが本蔵めが誤りか。御詞さみ致さぬ心（こころ）底（そこ）《地色ハル》御覽に入んと御傍（そば）の。ちいさ刀《ウ》拔（ひ）きより早く《中》書院（しよいん）成（な）る。召（よ）しがへ草履（くさうり）《ハル》かたし片手の早ねたば。《ウ》とつくと合せ椽（ゑん）先（ま）の松の片枝。《ウ》すつばと切て手ばしかく。《ウフシ》靴（くつ）《さや》に納め。《詞》サア殿。まつ此通りにさつぱりと遊ばせ。いふにや及ぶ。《地ウ》人や聞（き）くと《ウ》辺（あた）りに気を付（つ）け。《ウ》今夜はまだ九つくつたりと一（ひと）休み。《ハル》枕時計（とけい）の目覚（さ）まし《ウ》本蔵めが《色》しかけ置（お）き早く。《詞》ヲ、聞入有（あ）つて満足（まんぞく）せり。奥にも逢て余所（よそ）ながらの暇（ひま）乞（い）とまこひ。モウ逢ぬぞよ本蔵。《地ハル》さらば《言捨て》《ウ》奥の一間に入給ふ《フシ》武士の。いきぢは是非（ぜいひ）もなし《地ハル》御後（うしろ）かげ見送（みおく）り《勝（かち）手口（てぐち）》《色》走り出。《詞》本蔵が家来共馬引（うまひ）早くといふ間もなく。《地ハル》もどちしやんと《ウ》りしげに《フシ》御庭（ごてい）には《色》に引（ひ）き出せば。《地ハル》椽（ゑん）よりひらりと《ウ》打乗（うちり）つて《ウ》師直（しぢく）の。館造（たねぞう）つゞけやつと《色》乗（の）り出す。《詞ノリ》響（ひび）くつわに縫（ぬ）すかつてとなせ小浪（こなみ）コレ《ど》へ。始終（しじう）の様子（ようす）は聞（き）ました年にこそよれ本蔵殿。主人（しゆじん）に御異見（おんいけん）も申（ま）さず。合点（あてん）行（な）ぬ留（とど）ますと。《地ハル》母（はは）と娘（むすめ）がぶらぶら。《ウ》響（ひび）にすぎり《色》留（とど）むれば。《詞ノリ》ヤア小差（こさ）出（い）だ。主人（しゆじん）のお命（いのち）お家の為（ため）思（おも）ふ故（ゆゑ）に此時宜（いま）し。必（かな）らず事（こと）殿（どの）へ御（ご）さた致（いた）すな。お耳（みみ）へ入（い）たら娘（むすめ）は堪（た）ま当（あた）り。となせは夫婦（ふうふ）の縁（ゆかり）を切（き）れ。《地ハル》家来（けらい）共（ども）道（みち）にて諸事（しよじ）を言（い）付（つ）けん。《ウ》そこ退（の）け二人（ふたり）《色》イヤイヤ《ハル》シヤ面倒（めんどう）だう《色》当（あた）られて。《ハル》うんと計（はかり）のつけに反（さか）るを見（み）向（む）もせず。《ウ》家来（けらい）統（と）と馬煙（ばえん）（けふり）追（お）立（た）立（た）力（ちから）足（あ）る《ウ》ふみ立（た）てこそ。《三重》かかけり行 *

- 11 -

第三段 鎌倉御所の段

・第三 * L3 《地ハル》足利左兵衛（あしか）督（とく）（かみ）直義公（しぢぎ）公（こう）《ウ》関八洲（せきはつしう）の官領（くわんりやう）と新（あらた）に建（た）てし御殿（ごてん）の《ウ》結構（けつこう）《ウ》大名（だいみょう）小名（せうな）美麗（びれい）（ひれい）を飭（おと）る公装束（こうさうそく）はれしやうそく。《ハル》鎌倉山（かまくら）の星月夜（ほしづき）と《ウ》袖（そで）を烈（はげ）しつらぬる《ウ》御馳走（ごちそう）に。《ウ》お能（のう）（のう）役者（やくしや）は裏門（うらもん）口（くち）。《ハル》表（おもて）御門（ごもん）はお客人（きやくじん）《ウ》御饗応（ごきやうおう）（もてなし）の役人（やくじん）衆（しゆ）。《ウ》正七（せいしち）時の御登城（ごとうじやう）（とじやう）《フシ》武家（ぶけ）の。威光（いこう）（あつ）るはうぞ耀（あ）るかゝやきける。《地色ハル》西の御門（ごもん）の《中》見付（みづ）けの方（かた）。《色》ハイ《と》《ウハル》いかめしく。挑灯（ちやうてい）（あ）らし入（い）来るは。《ウ》武蔵（ぶさし）守（まも）り（かみ）《中》高（たか）師直（しぢく）。《ウ》權威（けんい）（けんい）を頭（あたま）（あら）はす鼻高（はなたか）々々。《ウ》花色（はないろ）模様（もよう）（もやう）の大紋（おほいもん）。《ハル》胸（むね）に我慢（がまん）の立（た）て烏帽子（くわぼうし）。《中ウ》家来（けらい）共（ども）役所（やくじよ）に残（のこ）し置（お）き。《ウ》下（しも）部（ぶ）纒（むす）に先（ま）を払（は）ら（は）せ。《ウ》主（しゆ）の威光（いこう）（あつ）るはうの召（よ）おろし。靄（あ）の真似（まね）する鷲坂（しゆさか）（さきさか）（は）内（うち）（は）んない。《ハル》肩臂（かたひぢ）（かたひぢ）（い）からし《色》申（ま）お旦（たま）。《詞》今日（けふ）の御前（ごぜん）表（おもて）も上（うへ）首尾（くびび）（しゆび）《と》塩治（しぢぢ）で候（まを）の。イヤ桃（もも）（もも）井（い）で候（まを）の。日比（ひぢ）はとつばさつばとどしめけど。行義（ぎやうぎ）作法（さくぱ）（さ）ほうは狗（いぬ）（ぬ）のころを。家根（けこん）へ上（あ）げた様（よう）で。去（い）るとは《腹（はら）のかは。イヤ夫（お）に付（つ）き兼（か）な塩治（しぢぢ）が妻（つま）かほよ御前（ごぜん）。いまだ殿（どの）へ御返（ごへん）事（こと）致（いた）さぬ由（よし）。お気（き）にはさへられな。器量（きりやう）（きりやう）はよけれど気が叶（あ）はぬ。何（なに）の塩治（しぢぢ）づれと。当時（たうじ）出頭（しゅつとう）の師直（しぢく）様（よう）と。ヤイ《声（こゑ）は》高（たか）に口利（くちり）（きく）な。主（しゆ）有（あ）るかほよ。度々（たたく）哥（うた）の師範（しはん）（しはん）に事（こと）寄（よ）せ。くどけ共（とも）今（いま）に叶（あ）ぬ。則（すな）は彼（か）が召使（めいし）（めいし）かるといふ。娼（しやう）新（しん）参（さん）と聞（き）きやつをこま付（こまづ）頼（たの）んで見（み）ん。扱（あ）まだん（とり）へが有（あ）る。かほよが誠（まこと）にいやならば。夫（お）塩治（しぢぢ）に子細（こさい）（こさい）をぐはらり打明（うちあ）る。所（ところ）を言（い）はぬは楽（たの）しみと。《地ハル》四（よ）つ足門（あしもん）（か）たか

- 1 -

げに主従点頭(うなづき)咄し合《フシ》折もあれ。《地ハル》見付に扣へし侍あはたしく《色》走り出。《詞》我々見付のお腰かけに扣へし所へ。桃ノ井若狭ノ助家来加古川本蔵。師直様へ直に御目にかゝらん為。早馬にてお屋敷へ参つたれ共早御登城(とじやう)。是非御意得(多)奉らんと。家来も大勢召連(つれ)たる体。《地色ハル》いかゞ計(は)からひ申さんやと《ウ》聞より伴内《中》騒(さはぎ)出し。《詞》今日御用の有ル師直様へ。直に対面とは推参(すいさん)也。《地色ウ》某直談(だん)と走り行を。《詞》待(て)伴内子細は知れた。一昨日霧が岡にての意趣(いしゆ)ばらし。我手を出さず本蔵めに言付。此師直が威光(ゐくはう)の鼻をひしがん為。ハ、ハ、ハ、伴内ぬかるな。《地色ウ》セツにはまだ間もあらん。《ウ》是へ呼出せ仕廻てくれん。《ウ》成程(せいじやう)家来共《ハル》気をくばれと。《ウ》主従(しゆ)刀の《ウ》目釘(めぐぎ)をしめし。《ウ》手ぐすね引いて《フシ》待かけ居る。《地ウ》詞に随ひ《ハル中ウ》加古川本蔵。衣紋(えもん)繕(つく)くろひ悠々と《ウ》打通り。下(もと)部に持せし《ハル》進物(しんもつ)共。《ウ》師直が目通りならせ《フシ》遥(はるか)さがつて蹲(うづくま)り。《詞》ハア憚(はげ)りながら師直様へ申上奉る。此度主人若狭ノ助。高氏將軍より御大役仰付られ下さる段。武士の面目(めんぼく)に余る仕合。若輩(じやくはい)の若狭ノ助。何の作法(さほう)も覚束(おぼつか)なく。いかゞあらんと存る所に。師直様万(ま)事御師範(しはん)を遊ばされ。諸事を御引(ひ)廻し下され候故。首尾能(しゆびよく)御用相勤(ごようさうきん)とめ(る)も全(まこと)主人(しゆじん)が手柄(てがら)にあらず。皆師直様の御執成(ごしやくじやう)とりなしと。主人を始(は)メ奥方(おくかた)一(いつ)家中。我々(われ)迄も大慶(たいけい)此上(この上)や候べき。去(き)るにつて近(か)比左少(ひさせう)の至(いた)り候へ共。右御礼(ごれい)の為一(いつ)家中よりの送り物。お受(う)け遊ばされ下さらば。生前(せんぜん)の面目(めんぼく)一(いつ)入(い)し願(ねが)ふ奉る。《地色ウ》則(すなは)ち目録御取次(めいよろくごとりじ)と伴内に指出せば。《ハル》ふしぎそふにそつと《色》取押(と)開(ひら)き。《詞》目録(めいよろく)一つ巻(ま)き

- 1 -

物州本黄金(わうこん)三十枚(まい)若狭助奥方(わかたけおくかた)一(いつ)黄金廿枚家老(わうこんにじまいけさう)からう加古川本蔵。同十枚番頭(ばんがしら)。同十枚侍中(じちゆう)。《地ハル》右の通(と)り読(よ)み上(あ)げば。《ウ》師直は明(あ)れた口ふさがれもせず《ウ》うつと。《ウ》主従顔(しゆじんがほ)を見合せて。気ぬけの様にきよろつと。《ウ》祭(まつり)の延(ひ)れた六月(むつき)の晦日(くわいじつ)見(み)るが如(ごと)くにて。《フシ中》手持(て)ぶさたに見(み)へにける。《地ハル》俄(いつ)にはか(か)に詞(ことば)《色》改(か)めて。《詞》是(こゝ)へ悼(いた)み入(い)たる仕合。伴内(ばんない)こりやどふした物。ハテ扱(あ)つたハアお辞宜(じぎ)申(ま)さばお志(こころ)背(そむ)くといひ。第一(だいいち)は大きなぶ礼(れい)。エ、式作法(しきさほう)を教(おし)ゆるも。こんな折(ま)にはとんとこまる。ナニものじやは。イヤハヤ本蔵殿(ほんぞうだん)。何(なん)の師範致(しはんぢ)す程(ほど)の事も(こと)ないが。兎角(とくかく)マア若狭ノ助殿(わかたけだん)は器用(きよう)者(もの)。師範(しはん)の拙者(せつしや)及(およ)ばぬ。コリヤ伴内進(ばんないしん)物共(もの)皆取納(おさ)め。エ、ふ行義(ぎやうぎ)な。途中(ちゆうちゆう)で(で)お茶(ちや)さへ得進(とくしん)せぬと。《地色ウ》手(て)の裏返(うらへ)す挨拶(あいさつ)に《ハル》本蔵(ほんぞう)が胸算用(むなざんよう)《ウ》してやつたりと《色》猶(なほ)も手(て)をつき。《詞》取早(とくはや)七(なな)つの刻限(くわくげん)早(はや)お暇(いとま)。殊(こと)に今日(けふ)は猶公(なほこう)の御座敷(ござしき)。弥(や)主人(しゆじん)の義御引廻(ぎごりまわ)し頼(たの)存(ぞん)と。《地ハル》立(た)んとする《色》袂(たもと)をひかへ。《詞》ハテぬいわいの。貴殿(きだん)も今日(けふ)の御座敷(ござしき)並(なら)び。拜見(はいけん)なされぬか。イヤ倍臣(ばいしん)の(の)某御前(まがごぜん)の恐(おそ)れ。大事な(だいじな)い。此師直(こゝしぢ)が同道(どうだう)するに。誰(たれ)がくつといふ者(もの)ない。殊(こと)に又若狭ノ助殿(わかたけだん)も。何(なん)ぞれかぞれ小用(せうよう)の有(あ)る物。ひらに(と)すめられ。《地ウ》然(しか)らば御供仕(ごこうじ)らん。《詞》御意(ごい)を背(そむ)くは却(かへ)て無礼(むれい)。《地ウ》先(ま)におさきへと跡(あと)に付(つ)き。《ウ》金(かね)て類(たぐひ)はる算用(さんよう)に。《ウハル》主人(しゆじん)の命(いのち)も買(か)ふて取(と)れ。《ウ》二(に)天作(てんさく)《中》そろばんの。《ウ》けたを違(ちが)へぬ《ハル》白鼠(しろねづみ)。忠義(ちゆうぎ)《ウ》忠臣(ちゆうしん)《ウ》忠考(ちゆうかう)の。道(みち)は一(いつ)筋真直(しんぢき)に《フシ》打連(うちづれ)御門(ごもん)に入(い)にける。

- 1 -

《ハルフシ》程もあらず《色》入来るは。《ウ》塩冶判官高定。《ウ》是も家来を残し置キ。《ハル》乗り物道に《中》立テさせ。《ウ》譜代《ふだい》の侍早の勘平。朽葉《くちば》《ウ》小紋の《ハル》新袴《さらばかま》。《ウ》さは《く》さはつく御門前。《詞》塩冶判官高定登城《とじやう》成リと音トなひける。門番罷出。先キ程桃ノ井様御登城遊ばされ御尋。只今又師直様御越ニて御尋。早御入と相述《のふ》る。ナニ勘平取早皆々御入とや。《地色ウ》遅《おそ》なはりし残念ト。《ウハル》勘平一人御供にて《フシ》御前へこそは急行《地ハル》奥の御殿は御馳走の。連謡《ちうたひ》の《色》声播《はり》一《ま》がた。《謡》高砂の浦に着にけり。《ナラス地ハル》うたふ声々《中》門外《もんぐはい》へ。《ハルフシ》風か持テくる《色》柳かげ。《ウ》其柳より風俗《ふうぞく》は。《ハル》まけぬ所体《しよてい》の十八九《小ヲクリ》松の。緑《みどり》の細眉《ほそまゆ》も《ウ》かたいやしきに《ハル》物馴《なれ》し。きどく帽子《ぼうし》の後帯《うしろおび》。《ウ》供の奴が挑灯は《フシ》塩冶が家の紋所。《地ハル》御門前に《色》立休らひ。《詞》コレ奴殿。やがてもふ夜も明ケる。こなた衆は門内へは叶はぬ。爰からいんで休んでやと。《地ハル》詞に従ひ《色》ナイ《と》《フシ》供の下部は帰りける。《地ウ》内を覗《のぞい》て《ハル》勘平殿は何してぞ。《ウ》どふぞ逢たい用が有ルト。《中ハル》見廻す折から後かげ。《ウ》ちらと見付ケ。《詞》おかるじやないか。勘平様逢たかつたにようこそ。ム、合点の行ぬ夜中といひ。供をも連ず只一人。さいなあ。爰迄送りし供の奴《やつこ》は先キへ帰した。わし独《ひとり》残りしは。奥様からのお使。どふぞ勘平に逢《あふ》て此文箱。判官様のお手に渡し。お慮外《りよくはい》ながら此返哥をお前のお手から直ニ師直様へ。お渡しなされ下さりませと伝へよ。しかし。お取込の中間違《まちが》ふまい物でなし。マア今宵はよしにせうとのお詞《地色ウ》わたしはお前に逢たい望《のぞみ》。

- 1 -

《ハル》何の此哥の一ッ首《しゆ》や二首。《ウ》お届けなさるゝ程の間のない事は有ルまいと。《ウ》つゝ一ト走りに走つてきた。《フシ》ア、しんどやと吐息《といき》つく。《詞》然らば此文箱旦那の手から師直様へ渡せばよいしや迄。《地色ウ》どりや渡してこふ《ウハル》待て居いといふ中ニ《色》門内より。《詞》勘平《く》判官様が召します。勘平《く》ハイハイ《く》只今それへ。《地ハル》エ、せはしないと《フシ》袖ふり切て行跡へ。《地ハル》鯨《どぢやう》ふむ足付キ《色》驚坂伴内。《詞》何とおかる恋の知恵《ちゑ》は又格別。勘平めとせ、くつて居る所を。勘平《く》旦那がお召と呼んだはきついか。師直様がそもしに頼たい事が有とおつしやる。我等はそさまにたつた一度。《地ウ》君よ《く》と《ハル》抱《だき》付を《色》突飛《つきとば》し。《詞》コレみだらな事遊ばすな式作法《さほう》のお家に居ながら狼籍千《らうげき》万。あたふ作法なあたふ行義と。《地色ウ》突退《つきのく》れば夫レは難面《つれない》。《ウ》くらがり紛《まぎ》れにつゝあちよこ《く》と。《ウ》手を取諍《あらし》ふ其中ニ。《詞》伴内様《く》師直様の急《きう》御用。伴内様《く》と。《地ハル》奴二人がうろ《く》眼玉《めだま》でははしたり《色》伴内様。《詞》取前から師直様が御尋。式作法のお家に居ながら。女を捕《とら》へあたふ行義な。あたふ作法と。《地色ウ》下部がロ々エ、同じ様に《ハル》何ぬかすと。《フシ》類《つら》ふくらしで連立行。《地ウ》勘平跡へ《色》入かはり。《詞》何と今の働《はたらき》見たか。伴内めが一ぱいくらふてうせおつた。おれが来て旦那が呼《よば》しやるといふと。おけ古いとぬかすが面倒《めんどう》さに。奴共に酒呑《のま》せ。古いと言さぬ此術《てだて》。ハ、《く》まんまと首尾《しゆび》は仕深《ほせ》た。サア其首尾序にな。《地ハル》ちよつと《く》と《色》手を取れば。《詞》ハハテ扱はづんだマアまちやいの。何いはんすやら。何の待事《まちごと》が有ぞいなア。もふ頓《やが》て夜が明けるわいな。《地ハル》ぜひに

- 1 -

く《ウ》ぜひなくも《中》下地は好《すき》也《ウ》御意はよし。
《詞》夫レでも爰は人出入。《地ウ》奥《おく》は謡《うたひ》の《ハ
ル》声高砂。《謡》せうこんによつてこしをすれば。《ナヲス詞》アノ
謡《うたひ》で思ひ付いた。《地色ウ》イサ腰かけてと《ハル》手を《ト
ル》引合打連して行。《地ハル》協能《わきのう》過《て》御樂屋に鼓《つ
ぶみ》の調《しらべ》《中》太鼓の音。《ウ》天下泰平《たいへい》繁
昌《はんじやう》の寿《ことぶき》祝《いは》ふ《ハル》直義公。《ウ》
御機嫌《きけん》なゝめ《フシ》ならざりける。《地色ウ》若狭ノ助は
兼ねて待師直遅《おそ》しと御殿の内。《ハル》奥を窺《うかが》ふ長袴《はかま》の紐《ひ
も》しめくゝり気配《くばり》し。《ウハル》己レ師直真ツ二つと刀のこ
の息を詰《つめ》。《フシ》待共しらぬ。《地色ウ》師直主従《ハル
色》遠目に見付。《詞》是はく若狭助殿。扱々お早い御登城《とじ
やう》。イヤハヤ我折《がおり》ました。我等閉口《へいこう》く。
イヤ閉口序に貴殿に言訳《いひわけ》致し。お詫《わひ》申事有と。
《地ハル》両腰くはらりと《色》投出し。《詞》若狭助殿。改めて申さ
ねばならぬ一ト通。日外《いつぞや》羈が岡で。拙者《せつしや》が申
た過言《くはごん》。ヲ、お腹が立ったで有ふ尤じや。がそこをお詫。
其時はどふやらした詞の間違《ちがひ》でつる申した。我等一ツ生《しやう》の僂忽
《そこつ》武士がコレ手をさげるまつびらく。仮令《けれど》其元
が物馴《なれ》たお人なりやこそ。外々のうろたへ者で見さつしやれ。
此師直真ツ二つこはやく。有やうが其節《せつ》貴殿の後《うしろ》かけ。手
を合して拝《おかみ》ましたアハ、。ア、年寄《とやくたい》く。
年々にめんじて御免く。是さく武士が刀を投出し手を合す。是程
に申のを聞入ぬ貴公でもないはさ。兎角幾重《とかくいくぢ》にも誤
りく。伴内俱々に《地色ウ》お詫《わび》くと。《ウ》金がいはい
する追従《ついしやう》とは夢にも《ハル》しらぬ若狭ノ助。《ウ》力
みし腕《うで》も拍子《ひやうし》拔。《ウ》今更《さら》拔に《ウ》

- 1 -

ぬかれもせず。《ウ》ねたば合せし刀の手前《中》喜《うつむき》し《ウ》思案
顔。《ハル》小柴《しば》のかけに本蔵が。臉《またき》もせず《ウ
フシ》守りある。《詞》ナニ伴内此塩冶はなぜ遅《おそ》い。若狭ノ助
殿とはきつい違ひ。扱々奉行義《きやうぎ》者。今において頼出しせぬ。
主が主なれば家老《からう》で候とて。諸事に細《こま》心の付つやつ
が独《ひとり》もない。いざく若狭殿御前へ御供致そ。サアお立
なされ。サアサア師直め誤《あやま》つておるぞ。コリヤ爰な睥《すべ》様
め。イヤ若狭ノ助取前《とれまへ》から。ちと心悪《わる》うござる。マア先へ。
何としたく腹痛《ふくつう》か。コレサ伴内お背《せなか》く。
お薬しんじよかな。イヤく夫イ程にもござらぬ。然らば少の内おく
つろぎ。御前《まへ》の首尾《しゆび》は我等がよい様に申上る。伴内一ト間
へ御供申せと《ハル》主従寄つてお輦《てくるま》に迷惑《めいわく》ながら若狭助。
《ウ》是はと思へどぜひなくも《中》奥の一ト間へ《ハル》入ければ。
ア、《ウ》もふ楽《らく》じやと。本蔵は。天を《ウ》拜し地を拜し《フ
シ》お次の間にそ扣《ひか》居る。《地ウ》程もあらさず《ハル》塩冶判官。
御前《まへ》へ通る長廊下《らうか》《ウ色》師直呼かけ遅《おそ》し。《詞》
何と心得てござる。今日は正七つ時と。先刻《せんこく》から申渡した
でないか。成程遅《おそ》なはりしは不調法《ぶてうほう》去ながら。
御前《まへ》へ出るはまだ間もあらんと。《地ハル》袂より《色》文箱取出し。
《詞》取前《とれまへ》手前の家来が。貴公へお渡し申くれよ。則チ奥かほよ方より
参りしと。《地ハル》渡せば受取《うけと》成程く。《詞》イヤ其元の御
内宝は扱々心がけがござるは。手前が和哥の道に心を寄るを聞。添削《そん
せんく》を頼と有。《地ハル》定めて其事ならんと《色》押しひらき。《詞》
さなきだに。おもきが上のさよ衣。わがつまならぬつまな重《かさ》ね
そ。ハア是は新古今《しんこきん》の哥。此古哥《こか》に添削とは。ム、
く《地ウ》と思案の内。《ウ》我カ恋の叶はぬ験《しるし》。《ウ》扱
は夫トに打明《うちあき》しと《ハル》思ふ怒《いかり》を《色》さあらぬ顔。《詞》判官殿。

- 1 -

て下され。《詞》こりやうろたへてか勘平殿。ヲ、うろたへた。是がうろたへずに居られふか。主人一生（しやう）懸命（けんめい）の場にも有合さず剩（あまつさへ）。囚人（めしうと）同前（どうぜん）の網（あみ）乗物お屋敷（き）は閉門（へいもん）。其家来は色にふけり御供にはづれしと人中へ。両腰（りょうよう）さして出られふか爰を放せマ、待（まち）て下さんせ。尤じや道理じやが。其うろたへ武士には誰がした。皆（みな）わしが心から死る道ならおまへよりわたしが先（ま）へ死ねばならぬ。今お前が死（し）たらばたが待（まち）じやと誉（ほめ）ます。爰をとつくりと聞分（きこ）て。わたしが親里（おやし）へ一先（いちせん）来て下さんせ。と、様もか、様も在所（いしよ）でこそ有たのもしい人。もふかう成（な）りた《地ハル》因果（いんぐわ）じやと思ふて《ウ》女房のいふ事も。《ウ》聞（き）て下され勘平殿と《ウ》わつと《スエ》計に。《中》泣（な）しむ。《詞》そふじや尤。そちは新参（しんさん）なれば委細（ゐさい）の事は得（え）しるまい。お家の執権（しつけん）一（いつ）つけん。大星（おほしほし）由良（ゆら）助殿。いまだ本（ほん）国より帰（かへ）られず。帰国（きこく）を待（まち）てお詫（わび）せん。サア《地色ハル》一（いつ）時成共急（ときなりとも）がんと身拵（みしよ）へする所へ。《地ハル》驚坂（おどろきざか）伴内（ばんない）家来（けらい）引連（ひきだん）《色》かけ出。《詞ノル》ヤア勘平（かんへい）うぬが主人判官（しゆじんはんくわん）師直（しぢく）様へ慮（りよ）外（がい）を働（はたら）かす（はたら）きかすり疵負（きずおほせ）し科（か）によつて屋敷（やしき）は閉門（へいもん）。追付（おしづ）首（くび）か飛（と）ぶ。は知（し）れた事。サア腕（うで）廻（ま）せ。《地ウ》連（れん）帰（かへ）つてなぶり切（き）《ハル》覚悟（かくご）ひろげと《色》ひしめけば。ヤア《詞ノリ》よい所へ驚坂（おどろきざか）伴内（ばんない）。己（おのれ）一（いち）羽（は）はで喰（く）たらねど。勘平（かんへい）が腕（うで）の細（ほそ）ねぶか。料理（りやうり）塩梅（しんばい）あんばい。くふて見よ。《地色ウ》イヤ物（もの）ないはずな家来（けらい）共（ども）《ハル》畏（かしこま）つたと両方（りょうほう）より。《ウ》捕（と）つたとかゝるをまつかせとかいくゞり。《ウ》両手（りょうて）に両腕（りょううで）捻（ねぢ）上（あ）はつしと《フシ》蹴返（けりかへ）せば。《地ウ》替（か）つて切込（きりこ）切（き）先（ま）を《ハル》刀（た）の鞘（さや）にて丁（てい）ど受（う）ケ。《ウ》廻（ま）つてくるを鑑（かみ）（こじり）と柄（つか）にてのつけにそらし。《ウ》四人（よにん）一（いつ）所に切（き）かゝるを《ハルカ、リ》右（みぎ）と左（ひだり）へ《ウ》一（いつ）時に。《ウ》でん

がく返しにばた／＼と打すへられ。《ウ》皆（みな）ちり／＼に《色》行跡（ぎやうせき）へ。《ウ》伴内（ばんない）いらつて切（き）かくる引（ひ）づしそつ首握（くびにぎ）り。《ウ》ハル《大地（だいち）》どうどもんどり打（う）せしつかと《色》踏（ふみ）付（つ）ケ。《詞》サアどふせうとこつちの儘（まま）。突（つ）つかふか切（き）ふか《地色ウ》なぶり殺（ころ）しと《ハル色》ふり上（あ）る刀（た）に縊（す）がつて。《詞》コレ／＼そいつ殺（ころ）すとお詫（わび）の邪（よこしま）片（かた）（じやま）。《地色ウ》もふよいわいなと《ハル》留（とど）まる間に足（あし）の下（した）をばこそ／＼と。《ウ》尻（しり）に尾（お）のない驚坂（おどろきざか）は。命（いのち）から／＼《フシ》逃（に）げて行（い）く。《地ハル》エ、残念（ざんねん）／＼去（い）ながら。《ウ》きやつをばらさばふ忠（ちゆう）の《色》ふ忠。《ウ》一（いち）先（せん）夫婦（ふうふ）が身を隠（かく）し《ハル》時節（じせつ）を。《ウ》待（まち）て願（ねが）ふて見（み）ん。《ウ》取（と）り早（はや）（もはや）明（あ）六（む）つ東（あづま）がしらむ横雲（よこぐも）に。《上》ねぐらを離（はな）れ《ハルウ》飛（と）ぶからす《ウキン》かはい／＼の女夫連（によぶだん）道（みち）は。《ウ》急（いそ）げど跡（あと）へ引（ひ）く。《ウ》主人（しゆじん）の御身（ごみ）いかゞぞとあんじ。行（い）こそ。《三重（さんじゆう）上（じゆう）》浮世（うきよ）なれ*

第四段 扇ヶ谷上屋敷の段

・第四 *L4 《地色ハル》塩冶判官（しんじゆはんくわん）閉居（へいきよ）（へいきよ）によつて《ウ》扇（あふ）が谷（や）（やつ）の《中》上屋敷（かみやしき）。《ウ》大竹（おほたけ）にて門戸（かど）（もんこ）を閉（と）ぢ。《ハル》家中（ぢやうちゆう）の外（が）は出入（でいしゆ）をとゞめ。《フシ》事敵重（ことていぢゆう）（げんぢゆう）に見（み）へにけり。《ハルフシ》かゝる折（せ）にも。《中》花（はな）やかに《小ヲクリ》奥（おく）は。媚（めい）（なまめ）く《ハル》女中（によぢゆう）の遊び。《ウ》みだい所（ところ）かほよ《中》御前（ごぜん）。《ウ》お傍（そば）には大星（おほしほし）力（ちから）弥（や）。《ウ》ハル《殿（どの）》のお氣（いき）を慰（なぐさ）めんと。《ウ》鎌倉山（かまくらやま）の八重（やえ）《中ハル》九重（ここのへ）の《色々（いろいろ）》桜（さくら）籠（かご）（かご）に。生（な）るる花（はな）よりも。《フシ中》生（な）る人（ひと）こそ《ハル》花紅葉（はなこうは）（もみぢ）。《地ウ》柳（やなぎ）の間の廊下（らうか）を伝（た）ひ《ウ》諸士頭（しよしぢゆう）（しよしがしら）原郷（はらがう）右衛門（ゑもん）。《ハル》跡（あと）に続（つ）いて《中》斧（おの）九太夫（くたふ）。《詞》是（こゝ）は力（ちから）弥（や）殿（どの）早（はや）御出仕（ごでし）（しゆつし）。イ

ヤ某も国本トより親共が参る迄。昼夜(ちうや)相話(つめ)罷有ル。《地色ウ》それは御奇特(きどく)一千万と《ハル色》郷右衛門両手をつき。《詞》今(レ)日殿の御機嫌(きげん)は。いかゞお渡り遊はさるゝと。《地色ハル》申上れば《中》かほよ御前。《詞》ヲ、二人共太義(く)。此度は判官様お氣話(づま)りに思しめし。おしつらひでも出よふかと案じたとは格別(かくべつ)。明暮(あき)築(つき)山の花ざかり御らうじて。御機嫌のよいお顔ばせ。《地色中》それ故に自(みづ)から「もお慰(なぐさみ)に《ハル》指上(さ)ふと。《ウ》名有(ル)桜を取寄(て)て《ウ》見やる通りの《中》花拵(こしら)へ。《詞》ア、いか様にも仰(おほせ)の通り。花は開(ひら)く物なれば御門(ごもん)も開き。閉門(へいもん)「へいもん」を御赦(ゆる)さるゝ吉事の御趣向(しゆかう)。「拙者(せつしや)も何がたと存ずれど。かやうな事の思ひ付(おもひ)は。無調法(ぶてうほう)成郷右衛門。ヤア肝心(かんじん)の事申上(ま)せん。今(レ)日御上使のお出と承はりしが。定(ま)めて殿の御閉門(ごへいもん)を御赦(ゆる)さるゝ御上使ならん。何と九太夫殿。そふは思召(おも)れぬか。ハ、ハ、ハ、コレ郷右衛門殿。此花といふ物も。当分(たうぶん)人の目を悦ばす計(はかり)。風がふけば散失(さんじつ)「ちりうせ)る。こなたの詞もまづ其(その)ごとく。人の心を悦はさふ逆(さか)武士に似合ぬ。ぬらりくらりと跡から兀(はげ)る正月詞。なぜとおいやれ。此度殿の御(ご)越度(おちど)は。饗応(きやうおう)「もてなし」の御役義を蒙(まか)「かうむ)りながら。執事(しつじ)たる人に手を負(おほ)せ館を騒(さわ)「さはが)せし科(とが)科。軽(かろ)うて流罪(るざい)。重(おも)うて切腹(きりばら)たい又師直公に。敵対(てきたふ)は殿の御(ご)ふ覚と。《地色ハル》聞もあへず《色》郷右衛門。《詞》扱(は)は其方殿の流罪切腹を願はるゝか。イヤ願ひは致さねど。詞を鏝(かざら)ず真実(しんじつ)を申(ま)すのじや。もとをいへば郷右衛門殿。こなたの悋惜(りんしやく)「しはざから発(おこつ)た事。金銀を以(も)つて類(つら)をはりめさるれば。ケ様(かやう)な事は出来申さぬと。《地ハル》己(おの)が心に引(ひ)キ当(あ)て。欲(よ)くつら)打(う)けす《色》郷右衛門。《詞》人に媚諂(こび)へつら)

ふは侍(侍)でない。武士でないなふ力弥殿。《地ウ》何(と)そふでは有まいかと。《ハル》詞の角(かど)をなだむる御台(みだい)。《ウ》二人共(とも)に争(あらそ)ひ《色》無用。《詞》今度夫の御難義(なんぎ)なさる。元(もと)の発(おこり)は此(こ)かほよ。日外(いつぞや)「霧(きり)に無体(むてなし)の折(を)りかけ。様々(さまざま)どきしが。恥(はづ)をあたへ懲(こり)させんと。判官様にもしらす。《地色中》哥(うた)の点(てん)に《ハル》事寄(せよ)。《ウ》さよ衣の哥(うた)を書(か)き恥(はづ)しめて《色》やつたれば。《詞》恋の叶(は)ぬ意趣(いそ)「ぬしゆ)ばらしに判官様に悪(わる)口。元来短氣(もとよりたんき)「なお生れ付(つき)。《地ハル》得堪忍(たかんじん)「かんじん)なされぬは《ウ》お道理でないかいと。《ウ》語り給(たま)へば郷右衛門《ウ》力(ちから)も俱(とも)に御主君の。御(ご)憤(い)きどをり)を察(さ)し入(い)る。《フシ》心(こゝろ)外面(おもて)に頭(かぶ)はせり。《地ウ》早御上使のお出と玄関(げん)広間(ひろま)「けんくはんひろま)《中》ひしめけば。《ウ》奥(おく)へかくと通(と)じさせ《ウ》御台所(ごだいどころ)座(ざ)をさがり《ウ》三人出向(し)間(ま)もなく。《ウ》入(い)来る上使(じやうし)は《ハル中》石堂右馬之丞(いしだううまのぢやう)。《ウ》師直(しぢく)が昵近(ねいじん)葉師寺(はせり)「ちつきんやくしじ)次郎左衛門。《ウ》役目(やくも)なれば罷通(か)ると《ウ》会(あ)ひ積(つ)り「あひやく)もなく《ハル》上座(じやうざ)に著(つ)け)ば。《ウ》一間(いっけん)の内(うち)より塩冶判官(しづ)と《中》立出(たてい)る。《詞》是(こゝろ)御上使(ごじやうし)と有(あ)つて石堂殿御苦勞(いしだうごくろう)「くろう)一千万。先(ま)にお盃(さか)の用意(ようい)せよ。《地色ウ》御上使の趣(おもむき)「承(うけ)はり。《ハルウ》いづれもと一献(いっけん)「こん)汲(く)もふ)積(つ)り「せきうつ)を《中》はらし申(ま)さん。《詞》ヲ、それようござろ。葉師寺(はせり)もお聞(き)致(いた)さふ。したが上意(じやうい)を聞(き)れたら。酒(さけ)も咽(のど)へ通(と)るまいと。《地ハル》あざ笑(あざわら)へば《色》右馬之丞(うまのぢやう)。《詞》我(われ)々(々)今日(けふ)日(ひ)。上使(じやうし)に立(た)つたる其趣(きそ)。具(ぐ)「つぶさ)に承知(しやうち)「せられよと。《地ウ》懷(くわい)中(ちゆう)より御書取(ごしよとり)出し。《ハル》押開(おしひ)けば判官(はん)も《スエ》席(せき)を。改(あらた)め承(う)かる其文(そのぶん)。《詞》此(こゝろ)度(ど)塩冶判官(しづ)高定(たかぢやう)。私(わたくし)の宿意(しゆくい)を以(も)つて。執事(しつじ)「しつじ)高(たか)師

直を刃傷（にんじやう）に及び。館を騒（さはが）せし科（とが）によつて。国郡（こほり）を没収（もつしゆ）し。切腹申付（きりはら）る者也。《地ハル》聞よりはつと驚（おどろ）く御台。《ウ》並（なみ）居る諸士（しよし）も顔見合せ《フシ》鞞（あきれ）。果たる計也。《地ハル》判官動（うづる気色（けしき）もなく。《ウ》御上意の趣（き）《色》委細承知（さいせうち）仕る。《詞》扱（あ）はからは。各（おの）の御苦勞（くらう）休めに。打（う）つるいで御酒（みさけ）。コレ（こ）判官（はん）だまりめされ。其方が今（いま）度の科（とが）は。縛（しばり）首（くび）にも及（およ）ぶべき所。お上（かみ）の慈悲（じひ）を以（も）つて。切（き）腹（はら）付（け）らるゝを有（あ）がたう思（おも）ひ。早速（さつそく）用意（ようい）もすべき筈（はず）。殊（こと）に以（も）つて切（き）腹（はら）には定（さだ）ま（つ）た法の有（あ）り物。夫（こ）に何（なに）ぞや。当（あた）り様の長羽織（ながは）を（ば）をり。ぞべら（と）しらるゝは。酒興（しゆけう）か但（た）血迷（ちま）ひ（ちまよ）ふたか。《地色ハル》上使（じやうし）に立（た）つたる石堂殿（いしどう）。《ウ》此（こ）薬師寺（やくしじ）へぶ作法（さほう）と。きめ付（つ）ければ《色》につこと笑（わら）ひ。《詞》此（こ）判官（はん）。酒興（しゆけう）もせず血迷（ちま）ひもせぬ。今日（けふ）上使（じやうし）と聞（き）よりも。斯（かく）あらんと期（ご）したる故（ゆゑ）。兼（か）ての覚悟（かくご）見（み）すべしと。《地ハル》大小（たうせう）羽織（は）を脱（ぬ）ぎ《ウ》中（ちゆう）捨（す）れば。《ウ》下（した）には用意（ようい）の白（しろ）小袖（こそで）無（な）紋（もん）の上下（じやうげ）を脱（ぬ）ぎ《ウ》死（し）装束（さうさく）しやうぞく。皆（みな）々（ごと）是（こ）はと《ハル》驚（おどろ）けば。《ウ》薬師（やくし）寺（じ）は言（い）句（ご）《ごんく》も出（で）ず《フシ》顔（かほ）ふくらして閉（し）口（くち）へい（こう）す。《地ハル》右馬之丞（みぎうまのぢゆう）《色》指（さ）寄（よ）て。《詞》御心（ごしん）底（ぞこ）察（さ）し入（い）則（すなは）拙（ちやく）者（しや）検使（けんし）へけんし（の役（やく）。心（こゝろ）静（しず）か《しづか》に御（ご）覚悟（かくご）。ア、御（ご）深（ふか）切（き）忝（はづ）し。刃（や）傷（が）にんじやうに及（およ）びしより。斯（かく）あらんとは兼（か）ての覚悟（かくご）。うらむらくは館（くわん）にて。加古川（かこがわ）本蔵（ほんざう）に抱留（だくりゆう）（とめ）られ。《地ウ》師直（しぢく）を討（う）ちもらし無念（むねん）《ハル》骨髓（こつぞう）《こつぞう》に通（と）つて《色》忘（わす）れがたし。《詞》湊（みな）み（み）なと《川（が）にて楠（くすの）正（ただ）成（なり）。取（と）期（ご）の一念（いっぴん）によつて生（な）しやう》を引（ひ）つといひしごとく。生（な）かはり死（し）かはり。鬱憤（うつぷん）を晴（は）さんと。《地ハル》怒（いか）りの声（こゑ）と諸（しよ）共（ども）に。《ウ》お次の襖（ふすま）《中》打（う）たゝき。《詞》一（いっ）家（か）中（ちゆう）の者（もの）共（ども）。殿（との）御（ご）存（ぞん）生（せい）に御（ご）尊（そん）顔（げん）《そんがん》を拝（はい）したき願（ねが）ひ。御（ご）前（まへ）へ推（お）し参（まゐ）り《すいさん》致（いた）さん

や。郷右衛門殿（ごうゑもん）お取次（とけだ）きと。《地色ウ》家中（じやうちゆう）の声（こゑ）々々（しんしん）聞（き）ゆれば。《ハル色》郷右衛門（ごうゑもん）御前（ごぜん）に向（む）ひ。《詞》い（い）かゞ計（はかり）《はから》ひ候（まを）はん。フウ尤（な）成（なり）願（ねが）ひなれ共（ども）。由良（ゆら）助（すけ）が参（まゐ）る迄（いた）無（な）用（よう）《地ハル》はつと計（はかり）一（いっ）間（ま）に《中》向（む）ひ。《詞》聞（き）るゝ通（と）り（の）御（ご）意（い）なれば。一（いっ）人（ひと）も叶（かな）はぬ《地ハル》諸（しよ）士（し）は返（かへ）す詞（ことば）もなく。《中ウ》一（いっ）間（ま）もひつそと。《フシ》しづまりける。《地ハル》力（ちから）弥（よ）御（ご）意（い）を承（うけたま）はり。《ウ》兼（か）て用意（ようい）の腹（はら）切（き）《ウ》刀（た）御（ご）前（まへ）に《中》直（ただ）すれば。心（こゝろ）静（しず）か《しづか》に肩（かた）衣（ぎぬ）《かたぎぬ》取（と）退（たい）座（ざ）を《色》くつるげ。《詞》コレ（こ）御（ご）検使（けんし）《けんし》。御（ご）見（み）届（とど）け下（くだ）さるべしと。《地ウ》三方（さんぱう）引（ひ）寄（よ）せ《ハル》九（く）寸（すん）五（ご）分（ぶん）押（お）し戴（たい）き。力（ちから）弥（よ）。ハア。由良（ゆら）助（すけ）は。いまだ参（まゐ）り上（じやう）仕（し）りませぬ。フウ。エ、存（ぞん）生（せい）に對（たい）面（めん）せで残（のこ）念（ねん）。ハテ残（のこ）り多（おほ）やな。是（こ）非（ひ）に及（およ）ばぬ是（こ）是（こ）と。《地色ウ》刀（た）逆（さか）手（て）に取（と）直（ただ）し。《ウ》弓（ゆみ）手（て）に突（つ）き《ハル》立（た）引（ひ）廻（まわ）す。《上》御（ご）台（たい）二（に）目（め）と見（み）もやらず《ウ》口（くち）に称（な）名（な）《せうめ》う《中》目（め）に涙（なみだ）。《ウ》廊（らう）下（した）の襖（ふすま）踏（ふ）みひらき。《ウ》か（か）け込（こ）む大（おほ）星（ほし）由良（ゆら）助（すけ）。《ハル》主（しゆ）君（きみ）の有（あ）り様（さま）見（み）るよりも。《上ウ》はつと計（はかり）にどうど《中》ふす。《ウ》跡（あと）に続（つ）いて千（ち）崎（さき）矢（や）間（ま）《せんざ》きやさま。《ハル》其（そ）の外（ほか）の一（いっ）家（か）中（ちゆう）フシばら（と）かけ入（い）たり。《詞》ヤレ由良（ゆら）助（すけ）待（まち）兼（か）たはやい。ハア御（ご）存（ぞん）生（せい）《そんじやう》の御（ご）尊（そん）顔（げん）《そんかん》を拜（はい）し。身（み）に取（と）つて何（なに）程（ほど）か。フ、我（われ）も満（み）足（ぞく）《まんぞく》。定（さだ）めて子（こ）細（こ）聞（き）たである。エ、無（む）念（ねん）口（くち）惜（し）《おし》いはやい。委（わ）細（こ）承（じやう）知（ち）へんさいせうち仕（し）る。此（こ）期（ご）に及（およ）び。申（まを）上（あ）る詞（ことば）もなし。只（ただ）御（ご）取（と）期（ご）の尋（しん）常（じやう）を願（ねが）ひ《ねが》はしう存（ぞん）まする。《地色ウ》ヲ、い（い）ふにや及（およ）ぶと諸（しよ）手（て）《もろて》を（か）け。《ウ》ぐつ（と）引（ひ）廻（まわ）し。《ハル》く（く）るしき息（いき）を《色》ほつとつき。《詞》由良（ゆら）助（すけ）。此（こ）九（く）寸（すん）五（ご）分（ぶん）は汝（なんぢ）へ筐（かたみ）。我（われ）鬱（うつ）憤（ぷん）《うつぷん》を晴（は）させよと。《地ウ》切（き）先（せん）にてふゑ勿（な）はね《はね》切（き）。《ハル》血（ち）刀（た）投（な）出（で）しうつぶせに。《ウ》どうどまろび《色》息（いき）絶（た）《いきたゆ》れば。《ハル》御（ご）台（たい）を始（は）り並（なら）ぶる家（か）中（ちゆう）。眼（め）を閉（し）（とぢ）《ウ》息（いき）を詰（つ）め《歯（は）は》を喰（く）しばり《中》叩（ひ）かれば。《ウ》由良（ゆら）助（すけ）にじり寄（よ）り寄（よ）り刀（た）取（と）上（あ）げ押（お）し戴（たい）き。《ハ

しめんといふ間も《中》あらせず。《ハル》次郎左衛門一ト間を《色》立出。《詞》ハテペン〜と長詮義。死骸（からだ）一片付たら。早く屋敷キを明テ渡せと。《地ハル》いがみかゝれば《中》郷右衛門。《詞》ア、成程お待チ兼。亡君所持（ぼうれん）（しよち）の御道具。其外の武具馬具（ぶぐ）（ばぐ）（ばぐ）（ばぐ）改（あらた）め請ケとられよ。サア由良、助殿退散（たいさん）あれ。《地色ウ》ヲ、心得たりとしづ〜と《ハル》立上り。《詞》御先祖（せんぞ）代々。我々も代々。《地ハル》昼夜（ちゆうや）つめたる館の内《ウ》けふを限（かぎ）りと思ふにぞ。《中》名残惜（おし）げに《上》見返り。〜《ウフシ》御門外へ立出れば。《地ハル》御から送リ奉り。《ウ》力弥矢間堀小寺《ウ》追イ々に馳（はせ）帰り。《詞》扱は屋敷キをお渡し有たか。此上は直義の。《地ハル》討ッ手を引受ケ討死せんと。《ウ》はやり立テば《中》由良、助。《詞》イヤ〜今死べき所にあらず。是を見よ旁（かたわ）と。《地ハル》亡君の御篋（かたみ）を抜キ放し。《詞》此鋒（かみ）には。我君の御血をあやし。御無念の魂（たま）を残されし九寸五分。此刀にて師直が。首かき切て本意をとげん。《地ウ》実尤と《ウハル》諸武士の勇（いさみ）《ウ》やしきの内には薬師寺次郎。《ウ》門の貫（くはん）の木はつしと《色》立テさせ。《詞》師直公の罰（ばち）が当（あた）り。扱（あ）よいさま〜と。《地色ウ》家来《ウ》一度に《ハル》手をたゞき。《ウ》どつと笑ふ《フシ》ときの声。《地ハル》アレ聞れよと《ウ》若侍（わかさむらひ）取て返すを《中》由良、助。《詞》先君の御憤（いきど）をり。晴（はら）さんと思ふ所存（しよん）はないか。《地ハル》はつと一度に《中》立出しが。《ウ》思へば無念と館の《コハリ》内を。ふり返り〜。はつたと《色》睨（にら）んで《三重上》へ立出る*

第五段 山崎街道の段

∴ 第五 * L5 《地色ハル》鷹（たか）は死（し）ても穂（ほ）はつまずと《ウ》譬（たと）へ洩（あ）れず

《中》入ル月や。《ウ》日数も積（つ）る山崎（やまざき）の邊（へ）に近（ちか）かき侘住居（わぢぢい）《ハル》早の勘平（わかへい）若氣（わかけ）の誤（あや）り《ウ》世渡る望（もち）望（もち）望（もち）《中》細（ほそ）道（みち）伝（つ）た〜ひ。《ウ》此山中（このやま）の鹿（しか）を《ウ》打（う）って商（あきな）ふ種（たね）《たね》が嶋（しま）も。《ウ》用意（ようい）に持（も）つや《ハル》袂（たもと）込（こ）鉄（てつ）砲（ぱう）雨（あま）のしだらでん。《中》誰（たれ）カ水（みづ）無（な）〜月（つき）と《ハル》白（ゆ）雨（あま）の。《ウ》晴（はれ）間（ま）を《フシ》爰（こゝ）に松（まつ）のかげ。《地ウ》向（むか）ふより来る小挑（せうてん）灯（とう）（ちやうちん）《ハル》是（こゝ）も昔（むかし）は弓（ゆみ）張（は）り〜の《ウヲクリ》灯（とう）火（か）（とも）しび。けさじ濡（ぬ）ら〜さじと。《ウ》合羽（あひら）の裾（すそ）《すそ》に大雨（おほい）を《ハル》凌（しの）ぎ〜て急（いそ）く《色》夜（よ）の道（みち）。《詞》イヤ申（ま）し〜。卒（そつ）尔（じ）ながら火（か）を一つ《地色ハル》御無（ご）心（しん）（むしん）と立（た）寄（よ）らば。《ウ》旅（り）人（にん）もちやくと《色》身（み）構（がま）〜し。《詞》ム、〜此（こゝ）街（まち）道（みち）（かい）だう〜は無（む）用（よう）心（しん）（ふようじん）としつて合（あ）点（てん）の一人（ひとり）旅（り）。見（み）れば飛（と）道（みち）具（ぐ）の一（いつ）口（くち）商（あきな）い。《地色ウ》忽（たち）こそはかさじ出（い）なをせと。《ハル》びくと動（うご）か〜ば一（いつ）討（う）ちと。《フシ》眼（め）をくばれば。《詞》イヤア成（な）程（ほど）。盜（とう）賊（ぞく）とのお目（め）違（ちが）いたが〜ひ御（ご）尤（よし）千万（せんまん）。我（われ）等（ら）は此（こゝ）邊（へ）（あたり）の狩（か）人（にん）（かりうと）なるが。先（ま）程（ほど）の大雨（おほい）にほくちもしめり難（がた）義（ぎ）（なんぎ）〜至（いた）極（ごく）〜しこく。サア鉄（てつ）砲（ぱう）夫（う）へお渡（わた）し申（ま）す。《地ウ》自（じ）身（しん）に火（か）を付（つ）御（ご）借（か）（かし）と。《ウ》他（た）事（じ）（たじ）なき《ハル》詞（し）顔（が）付（つ）キを。《ウ》きつと眺（なが）め〜て。《詞》和（わ）殿（でん）は早（はや）の勘（かん）平（へい）ならずや。さいふ貴（き）殿（でん）は千（ち）崎（さき）弥（や）五（ご）郎（らう）。是（こゝ）は堅（か）固（こ）（けんご）で御（ご）無（む）事（じ）でと。《地ウ》絶（た）〜て久（く）敷（し）《ハル》對（たい）面（めん）。《ウ》主（しゆ）人（にん）のお家（いへ）没（ぼつ）落（らく）（ぼつらく）の。《ウ》胸（むね）に忘（わす）れぬ無（む）念（ねん）の思（おも）ひ《スエ》互（たが）に。拳（こぶし）〜を《中》握（にぎ）り合（あ）つ。《地中》勘（かん）平（へい）は《ウ》指（さ）うつむき。《ハル》暫（しば）し詞（し）も《中》なかりしが。《詞》エ、面（めん）目（め）もなき我（われ）身（み）の上（う）。古（こ）朋（ぽん）輩（ばい）（こほうばい）の貴（き）殿（でん）にも。《地色ウ》顔（が）も得（え）上（じやう）ぬ此（こゝ）仕（し）合（あ）。《ハルウ》武（ぶ）士（し）の冥（めい）加（か）（めが）に尽（つ）き〜たるか。《詞》殿（でん）判（はん）官（くわん）公（こう）の御（ご）供（く）先（せん）。お家（いへ）の大（だい）事（じ）おこりしは是（こゝ）非（ひ）に及（およ）ばぬ我（われ）カ運（うん）（うん）〜。其（こゝ）場（ば）にも有（あ）合（あ）せず。御（ご）屋（や）敷（し）へは帰（か）れず所（しよ）詮（せん）（しよせん）。時（じ）節（せつ）を待（まち）つて御（ご）詫（わ）び〜と。思（おも）ひの

外の御切ッ腹なむ三宝。皆師直めがなす業（わざ）。せめて冥途（めいど）の御供と刀に手はかけたれど。《地中》何を手柄（がら）に御供と。《ハル》どの類（つら）さげていひ訳（わけ）せんと《キン》心を碎（くだ）く《色》折（よ）から。《詞》密（ひそか）に様子を承（うけ）はれば。由良殿御親（ゆりまのしん）子郷右衛門殿を始めとして。故殿（こと）の鬱憤散（うつぶん）（さん）せん為。寄リ々の思召（しめ）立有との噂（うはさ）我等逆も御勘当（ごかんどう）の身といふでもなし。手がり求（もと）め由良殿に對面（たいめん）とげ。御企（ごけい）はだての連判に御加（くは）へ下さらば。《地ウ》生々世々の《ハル》面目（めんぼく）。《ウ》貴殿に逢も優曇華（うどうんげ）の。《ウ》花を咲（さ）かせて侍（し）の。《ウ》一分立て給はれかし。《ウ》古傍輩（こほうばい）のよしみ武士の情。《ウ》お頼申（たのま）すと両手をつき。先非（せんび）を悔（く）いし男泣（おとな）フシ中ノル。《ハル》理（こと）り。《ハル》せめて方便（びんぱん）なる。《地ウ》弥五郎も傍輩（ほうばい）の悔（く）やみ。《ウ》道理と思へ共。《ハル》大事をむさと《色》明（あ）かさじと。《詞》コレサレ。勘平（かんへい）。はて扱。お手前は身の言訳（いひわけ）に取ませて。御企（ごけい）はたてのイヤ連判などは何（なに）の諛言（うそ）（たは）こと。左様の噂（うはさ）かつてなし。某は由良殿より郷右衛門殿へ急（きう）の使。先（せん）君（きみ）の御廟（ごべう）（びやう）所へ。御石牌（せきひ）を建立（けんりやう）せんとの催（もよほ）し。併（ひ）我々逆も浪人の身の上。是こそ塩冶判官殿の御石塔（ごせきとう）（たう）と。末の世道も人の口のはにかゝる物故。御用金を集（あつ）むる其御使。先（せん）君（きみ）の御恩（ごおん）を思ふ人を撰（えり）出す為。わざと大事を明（あ）されず。先（せん）君（きみ）の御恩（ごおん）を思はばナ。合点（あて）かゝと。《地色ウ》石牌（せきひ）になぞらへ《ハル》大星（おほほし）の。工（たくみ）を余所（よそ）にしらせしは。《フシ》げに傍輩（ほうばい）のよしみなり。《詞》ハア、忝（かたじけ）な弥五郎殿。成（なり）程（ほど）石牌（せきひ）（ひ）といひ立。御用金の御拵（ごこしら）有事（うじ）とつくに承（うけ）はり及び。某も何とぞして用金を調（ととの）へ。それを力に御詫（ごわ）（わび）と心は千々（ちぢぢ）に碎（くだ）け共弥五郎殿。恥（はづ）しや主人の御罰（ごばち）で今（いま）此（こ）さま。誰にかうとの便（べん）もなし。され共（とも）かるが

- 1 -

親。与市兵衛と申はたのもしい百姓。我々夫婦が判官公へ。不奉公を悔（く）やみ。嘆（なげ）き。何とぞして元の武士に立返れと。《地色ウ》おちうば共に嘆（なげ）悲（かな）しむ。《ウ》是幸（い）御邊（ごへん）に逢（あ）し《ハル》物語。《ウ》段々の子細（こま）を語り。《ウ》元の武士に立かへると言聞（い）さば。《ウ》纒（むす）の田地（でんち）も我（われ）《中》子の為（ため）何しにいなは《ハル》ゑもいはじ。《ウ》御用金を手がりに郷右衛門殿迄《中》お取り次。《ウ》一入頼存ると《ウ》余義（よぎ）なき詞（ことば）にム、成（なり）程（ほど）。《詞》然らば是より郷右衛門殿迄右の訳（わけ）をも咄（は）し。由良殿へ願（ねが）ふて見ん。明（あ）日は必（かな）らず。急度（きつど）御返（ごへん）事。則（すなは）ち郷右衛門殿の旅宿（りょしゆく）所書（しよ）と。《地ハル》渡（わた）せは取（と）り押（お）し。《ウ》重（おも）々の御（ご）《色》世話（せわ）忝（かたじけ）し。《詞》何とぞ急（きう）に御用金を拵（こしら）へ。明（あ）々（あ）日（に）お目（め）にかゝらん。某（ま）か有家（い）お尋（たず）めあらば。此（こ）山崎（やまざき）の涉場（せつば）（わた）しばを左（ひだり）へ取。与市兵衛とお尋（たず）めれば。早速（さつそく）相（あ）い申（ま）すべし。夜（よ）ふけぬ内に早くも御出（ごで）出。コレ此行（こゝろ）先（せん）は猶物騒（なまものさわ）（ぶつさう）。随分（ずいぶん）ぬかるな合点（あて）かゝ。石牌（せきひ）（ひ）成就（じやうじゆ）する迄（いた）は。蚤（は）（のみ）にもくはさぬ此（こ）体（たい）（からだ）。御邊（ごへん）も堅固（けんこ）（けんご）で。御用金の便（べん）を待（まち）ぞ。《地色中》さらば。《ウ》と両方（りやうほう）へ《ヲクリ》立別（たてわ）け。へてぞ急（き）行。《地ハル》又もふりくる《ウ》雨（あま）の足（あし）の足音（あしな）《中》とぼく。《ウ》道（みち）は闇路（やみぢ）（やみぢ）に迷（まよ）はねど《ハル》子故（こご）の闇（やみ）につく杖（つゑ）（つゑ）も。《ウ》すぐ成（なり）心堅（かた）親（おや）仁（に）一（ひと）筋道（すぢみち）の《色》後（うしろ）から。《詞》ヨ、イ、親（おや）仁（に）殿。《地ウ》よい道連（みちづれ）。と《ハル》呼（よ）はつて。斧（き）九（く）太（た）夫（ふ）が駈（か）（が）定（じやう）九（く）郎（らう）。《ウ》身（み）の置（お）き所（ところ）白（しろ）浪（なみ）や《ウ》此（こ）街道（かいだう）の夜働（よら）（ばたら）き。《ウ》だん平（へい）物を落（お）し指（さ）。《詞》さつきにから呼（よ）声（こゑ）が。貴（き）様（さま）の耳（みみ）ははいらぬか。此（こ）物騒（ものさわ）（ぶつさう）な街道（かいだう）を。よい年（とし）をして太胆（だいたん）（だいたん）。《地色ウ》連（つれ）にならふと向（む）ふへ廻（まわ）り。《ウ》きよる付（つ）目玉（めいやく）《ハル》ぞつとせしが道（みち）は《色》老人（らうじん）。《詞》是（こゝ）は。お若（わか）いに似（に）ぬ御奇特（ごきとく）（きどく）な。私（わが）もよい年（とし）をして。一人（ひとり）旅（たび）はいやなれど。サアいづくの浦（うら）でも金程（かねほど）太切（たいせつ）な物（もの）はな

い。去年の年貢に詰り。此中から一家「け」中の在所へ無心にいたれば。是もびたひらな才覚「さいかく」ならず。埒の明ぬ所に長居はならず。すごとく一人「リ」戻る道と。《地ハル》半分いはさず《色》ヤイやかましい。《詞》有様が年貢「ぐ」の納「おさま」らぬ其相談を聞にはこぬ。コレ親仁殿。おれがいふ事とくと聞しやれや。マアかうじやは。こなたの懐に金なら四五両のかさ。嶋の財布に有ルのを。とつくりと見付て来たのじや。借「かし」て下され。男が手を合す。定めて貴様も何ぞ詰「つま」らぬ事か。子が難義「なんぎ」に及ぶによつてといふ様な。有ル格「かく」な事じやあるけれど。おれが見込「みこ」だらハテしよとがないと諦「あきらめ」て。借「て」下され《地色ウ》と懐「ふと」へ手を指入。《ハル》引ずり出す嶋の財布「さいふ」。ア、《色》申夫「しんぶ」それは。《詞》夫「は」とは。是程爰に有ル物と《地ハル》引たくる手に《色》縫「すが」り付「き」。《詞》イエ、此財布は跡の在所で草鞋「はらち」を買「かふ」連「とて」。端「はした」錢を出しましたが。跡に残るは昼食「ちゆうじき」の握飯「はくらん」せん様にと娘がくれた和中散「わちゆうさん」。反魂丹「はんこんたん」でござります。お赦しなされ下さりませと。《地ハル》ひつたくり《ウ》遊行先「へ」《色》立廻り。《詞》エ、聞分「き」のな。むごい料理「りやうり」するがいやさに。手ぬるういへば付上る。サア其金爰へ蒔「まき」出せ。遅「おそ」いとたつた「討」と。《地ハル》二尺八寸押「おがみ」打なふ《ウ》悲しやといふ間もなく《ウ》から竹わりと《ハル》切付「ける」。《ウ》刀の廻りか手の《色》廻りか。《ウ》はづれる抜「き」身を《ハル色》両手にしつかと挿付。《詞》どふでもこなた殺さしやるの。ヲ、知「した」事。金の有「ル」のを見てするしごと。小言「こごと」こごとはかずと《地色ハル》くたばれと。肝「きも」先「き」へ指付れば。《詞》マ、マ、まあ待て下さりませ。ハア是非「せひ」に及ぬ。成「程」は。是は金でござります。けれ共此金は。私がたつた一人「リ」の娘がござる。其娘が命にもかへぬ。大事の男がござります。其男の為

に入「ル」金。ちと訳「わけ」有「ル」事故浪人して居ます。娘が申ますは。あのお人の浪人も元「は」はわし故。何とぞして元の武士にしてしんぜたいと。嘯「かひ」と毎夜「まいよ」さ頼「たの」み。ア身貧「ひん」にはござります。どうもしがくの仕様もなく。ばといろ／＼談合「だんかう」して。娘にも吞込「くみ」せ。聾「かみ」へは必「かならず」さたなしとしめし合せ。本「し」に／＼親子三人が血の涙の流れる金。夫「れ」をお前に取「ら」れて娘は何と成りませう。コレ押「おがみ」ます助「て」下されませ。お前もお「侍」の果そふなが。武士は相身「あひみ」たがい。此金がなければ。娘も聾も人様に顔が出されぬ。たつた一人「リ」の娘に連「れ」そふ聾じや物。不便「べん」にござるかはいござる。了「れ」簡「かん」れうけん「して」お助「な」されて下さりませ。エ、お前はお若いによつてまだお子もござるまいが。やんがてお子を持って御らうじませ。親仁「しん」がいひおつたは尤「よし」と思召「し」て。此場を助「たす」さしやつて下さりませ。マア一里行「いちりぎやう」ば私「わが」在所。金を聾に渡「わ」してから殺されましよ。申「まを」娘が悦「よろこ」ぶ顔見てから死「し」たうござります。これ申「まを」。あれ。／＼と《地色ハル》呼「よ」はれど跡先「あと」をく《フシノル》山彦「やまひこ」の笥「こたま」に。《中ハル》哀催「あはれ」もよほ「せり」。《詞》ヲ、悲しいこちやは。まつととこぼへ。ヤイ老毛「おほぼれ」め。其金でおれが出「で」世すりや。其恵「めぐみ」でうぬが聾「め」も出「で」世するはやい。人に慈悲「じひ」すりや悪「わる」うは報「むく」はぬ。ア、かはいやと。《地色ウ》ぐつとつく。《ウ》うんと手足の《ハル》七転八倒「しちてんぱつたう」。《ウ》のたくり廻るを《色》脚「すね」にて蹴「け」返し。《詞》ヲ、いとしや。いたかるけれどおれに恨「にくしみ」はないぞや。金がありやこそ殺せ。金がなけりや何「なん」のいの。金が敵「たて」じやいとしばや。南無阿弥陀「なむあみだ」。南無妙法蓮華「なむめうほうれんげきやう」経。《地ハル》どちらへ成「なり」とうせおると。《ウ》刀もぬかぬ芋「いも」ざしゑぐり。《ウ》草葉も朱「あけ」に置露「しず」や。《ウ》年「とし」も六十四苦「く」八苦《フシ》あへなく息「いき」は絶「たへ」にけり。《地色ウ》すましたりと件「くだん」の財布「さいふ」。《ハル》くらがり耳の《色》挿「つま」読「よみ」。《詞》ヒヤ五十両。エ、久しぶりの御対面。《地

色ウシ忝しと首にひつかけ死骸しかい「しかい」を直すに《ハル》谷底そこへ。《ウ》はね込蹴込け泥どろ「どろ」まぶれ。《ウ》はねは我身にかゝる共ともしらず立たる後うしろより。《ウ》逸散いつさんにくる《ハル》手負猪てひじ「おひじ」是こゝはならぬと身をよぎる。《ウ》かけくる猪は「もんじ」。《コハリ》木の根岩角踏立いわかどけたて《下》鼻はな「はな」いからして泥どろも《ナヲス》草木も《ハル》一トまくりリに飛行ば。《ウ》あはやと見送みおくる定九郎が。背骨せほねをかけてどつさりとあばらへ抜ぬける二つ玉。《ウ》うん共ぎやつ共《ハル》いふ間なく。《ウ》ふすほり返りて《ハツミフシ》死たるは心地よくこそ見へにけれ。《地色ウ》猪し「し」打とめしと《ハル》勘平は。鉄砲てっぽう提ひ「ひつさげ」爰こゝかしこさぐり廻りて扱とそと。《ウ》引ひ立れば《色》猪にはあらず。《詞》ヤア／＼こりや人じやなむ三宝。《地ウ》仕損しそんしたりと思へどくらき真ま「しん」の闇やみ。《ハル》誰たれ人成ぞと問と「とは」れもせず。まだ《ウ》息いきあらんと抱起たきおこ「たきおこ」せば《ウ》手に当ある金財布きんさいふ「さいふ」。掴つかで見れば《色》四五十両。《ウ》天のあたへと押お戴いた／＼。《ハル》猪より先さきへ《ウ》逸散いつさんに《ウ》飛いがごとくに。《三重上》へ急いきける*

第六段 与一兵衛住家の段

∴第六 *L6 《三下り哥ハル》みさき踊おどりがしゆんだる程に。《ウ中》親仁おきな出て見やばばんつ。《ハル》ばばんつれて親仁《中ハル》出て見やばばんつ。《ナヲスウ》麦むぎ「むぎ」かつ《フシ》音ねの在郷ざいご「ざいご」哥。《地ウ》所も名におふ山崎の《ハル》小百姓。《ウ》与市兵衛が植生せい「はにふ」の住家すみか「すみか」。《中ウ》今は《ハル》早の勘平が。《ウ中》浪々の身の隠かく「かく」れ里。《ウ》女房おかるは《スエ》寐乱ねみだれ「ねみだれ」し。《ハル》髪取かみとり上あげんと《中》櫛箱くしばこ「くしばこ」の。あかつきかけて戻らぬ《ハル》夫と。《ウ中》待まち間もとけし投な嶋田。《ウキン》

ゆふにいはれぬ《ウ》身の上を《ウ》誰たれにか。《上》つげの《中キン》水櫛みづくしに。《ハルウ》髪の色艶つや「つや」すきかへし。品よく《ウ中》しやんと結むす「ゆひ」立たしは。《フシ》在所に惜おし「おし」き《ハル》姿なり。《地中》母の齡よはひ「よはひ」も《ハル》杖つえ「つえ」つきの。《ウ》野道とぼ／＼《色》立たり。《詞》ヲ、娘髪結むす「むす」つたか。美うつくしうよう出来た。イヤもふ在所はどこもかも麦むぎ「むぎ」秋時分あきときでいそがしい。今も敷際ふきぎは「ふきぎは」で若い衆が麦むぎ「むぎ」に。親仁出て見やばばんつれてとうたふを聞。親父殿の遅おそ「おそ」いが気にかゝり。在口まいたれどようなふ影かげ「かげ」も形かたち「かたち」も見へぬ。サイナこりやまあどふして遅おそ「おそ」い事じや。わし一は走はし「はし」見て来やんしよ。イヤなふ若い女メの一人ひとりあるくはいらぬ事。殊ことにそなたはちいさい時から。在所をあるく事さへ嫌きら「きら」ひで。塩治様へ御奉公にやつたれど。どふでも草深い所に縁ゆかりが有あり戻りやつたが。勘平殿と二人居いればおとましい顔も出ぬ。ヲ、かゝ様のそりや知した事。すいた男と添そ「そ」ふのじや物。在所はおるか貧まづ「まづ」しい暮くら「くら」しても苦く「く」ならぬ。やんがて盆ぼん「ぼん」に成なつて。と様出て見やかんつ。《地ハル》かんつられてといふ哥の通と。《詞》勘平殿とたつた二人に。踊おどり見みにいきやんしよ。《地色中》お前も若い時覚ときわめがあると《ハル》指さ指さ合あくらぬぐはら娘。《フシ》気もわさ／＼と見へにける。《詞》何なにぼ其様に面白おもしろ「おもしろ」いやつても。心の中はの。イエ／＼濟すん「すん」でござんす。主しゅの為に祇園ぎおん「ぎおん」町へ。勤つとめ「つとめ」奉公に行いは兼かて覚悟かくご「かくご」のまへなれど。《地色ウ》年寄としより「としより」様の世話せわ《ハル》やかしやんすが《色》そりやいなな。《詞》少身せうしん「せうしん」者なれど兄も塩治様の御家来なれば。外の世話する様にもないと。《地ウ》親子咄はなしの《ハルフシ》中道伝ちゆうだえんひ。《地ハル》駕かご「かご」をかかせて急いくるは祇園ぎおん「ぎおん」町の一文字や。《ウ》爰こゝしや／＼と門と口から。与市兵衛殿内いにかと《色》言いつはいはれば。《詞》是はマア／＼遠と「とを」い所を。ソレ娘たばこ盆ぼ

ん。《地ハル》お茶上ケましやと親子して。植で《ウ》おいへを姉はく。人シヤの《色》亭主。《詞》扱夕部は是の親父殿もいかゝ太義。別条一へつでうなう戻られましたか。エ、扱は親仁殿と連立ッて来はなされませぬか。是はしたり。お前へいてから今において。ヤア戻られぬか。ハテめんよふな。ハア若一もし一稻荷前をぶら付いて彼一かの一玉殿につまゝりやせぬかの。コレ此中爰へ見にきて極一きはめ一た通り。お娘の年も丸五年切。給銀一きうぎん一は金百両。さらりと手を打た。是の親仁がいはるゝには。今夜中に渡さねばならぬ金有れば。今晚一こんばん一証文を認め。百両の金子お借一かし一なされて下されと。涙をこぼしての頼故。証文の上で半金渡し。残りは奉公人シと引かへの契約。何が其五十両渡すと悦んで戴。ほた一いふて戻られたはもふ四つでも有ふかい。夜道を一人リ金持ていらぬ物と留ても聞ず戻られたが。但シは道に。イエ一寄しやる所はなふか一様。ない共一。殊に一時も早うそなたやわしに金見せて。悦ばさふ迪いきせきと戻らしやる一管一はづ一じやに合点がいかぬ。イヤこれ合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。こちはさがりの金渡しして。奉公人連していのと。《地色ハル》懐より金取出し跡金の五十両。《ウ》是で都合一つがう一《色》百両。《詞》サア渡す受ケ取しやれ。お前夫でも親仁殿の戻られぬ中チはなふかる。わがみはやられぬ。ハテぐず一と埒の明ぬ。コレぐつ共すつ共いはれぬ与市兵衛の印シ形。証文が物いふ。けふから金で買切た体一からだ一。一チ日違へばれ一宛一づ一違ふ。《地色ウ》どふでかうせざ濟一すむ一まいと手を取て《ハル》引立る。マア一《ウ》待ッてと取付母親突退一つきのけ一はね退ケ。無体一むたい一に駕一かこ一へ押シ込一鼻一かき一上る中門トの口。《ウ》鉄鉋一てつほう一に蓑一みの一笠打かけ戻りかゝつて見る《ハル》勘平。《ウ》つか一と《色》内に入。《詞》駕の内なは女房共こりやマアどこへ。ヲ、勘平殿よい所へよう戻つて下さつたと。《地ハル》母の悦び其意を《色》得ず。《詞》どふでも深い

訳一わけ一がある。母者人女房共。《地ハル》様子聞ふとおいゑの真中。《ウ》どつかとすはれば《色》文字の亭主。《詞》ヲウ扱はこなたが奉公人の御亭一てい一じやの。譬夫一おとこ一でも何シでも。号一なづけ一の夫トなど、脇より違乱妨一みらんさまたげ一申ス者無之一これな一候と。親仁の印シ形有からはこちには構はぬ。早う奉公人を受ケ取ふ。ヲ、智殿合点が行まい。兼てこなたに金の入ル様子娘の咄して聞た故。《地ハル》どふぞ調へて進一しん一ぜたいと。《ウ》いふた計ッで一銭の《色》宛一あて一もなし。《詞》そこで親父殿のいはしやるには。ひよつとこなたの氣に女房売一うつ一て金調ようと。よもや思ふては有まいけれど。若一もし一ニ親の手前を遠慮一ゑんりよ一して居やしやるまいものでもない。いつそ此与市兵衛が智殿にしらす娘を売ふ。まさかの時は切取るも侍のならひ。女房売ても恥にはならぬ。お主の益一やく一に立る金。調へておましたらまんざら腹も立まいと。きのふから祇園一ぎおん一町へおり極めにいて今に戻らしやれぬ故。親子案ッして居る中へ親方殿が見へて。夕部親仁殿に半金渡し。跡金の五十両と引かへに。娘を連ていのふといふてなれど。親仁殿に逢一あふ一ての上と訳一わけ一をいふても聞入レず。今連ていなしやる所どふせうぞ勘平殿。是は一先ッ以ッて舅殿の心づかひ忝い。したがこちにもちつとよい事がある共夫レは追ッて。親父殿も戻られぬに女房共は渡されまい。とはなぜに。ハテいはゞ親也判がゝり。尤一もつとも一夕部半金の五十両渡されたでも有ふけれど。イヤこれ京大坂を保一また一にかけ。女護嶋一によוגめしま一程奉公人を拘一かゝ一る一文字や。渡さぬ金を渡したといふて濟一すむ一物かいの。まだ其上に慥一たしか一な事が有てや。是の親仁が彼一かの一五十両といふ金を。手拭一てぬぐ一ひにぐる一と巻して懐一ふところ一に入らるゝ。そりやあぶない是に入て首にかけさつしやれと。おれがきて居る此一ト重一ゑ一物の嶋のきれで拵へた金財布借一かし一たれば。やんがて首にかけて戻られう。ヤア何と。こなたが着て居る此嶋の切レの金財布か。ヲ、てや。あの此嶋でや。何と

慥（たしか）な証拠（しやうこ）で有（あ）るが。《地ハル》聞（き）よりはつと勘平（かんへい）が肝先（かんせん）一（ひと）きも一（ひと）先（ま）きにひしとこたへ。傍（たが）辺（へ）一（ひと）そばあたり一（ひと）に目を配（く）はり一（ひと）袂（たもと）の財布（さいふ）《中》見（み）合（あ）せば。《ウ》寸（すん）分（ぶん）違（ちが）はぬ糸（いと）入（い）嶋（じま）《ハル》なむ三（さん）宝（ほう）。《ウ》扱（あ）は夕（ゆ）部（ぶ）鉄（てつ）鉋（か）一（ひと）でつほう一（ひと）で打（う）殺（ころ）したは舅（しゅうと）で有（あ）るか。ハア《ウ》はつと我（わ）胸（むね）板（いた）を《ウ》一（ひと）つ玉（たま）で打（う）ぬかるゝよりせつなき思（おも）ひ。《ウ》とはしらずして《色》女（に）房（ぼう）。《詞》コレこちの人（ひと）そは《色》せすと。やる物（もの）かやらぬ物（もの）か。分（ぶん）別（べつ）一（ひと）ふんべつ一（ひと）して下（くだ）さんせ。ヲ、成（なり）程（ほど）。ハテもふあの様（よう）に慥（たしか）一（ひと）にい（い）はるゝからはいきやらざれば成（なり）まいか。アノとつ様（よう）に逢（あ）は一（ひと）いでもかへ。イヤ《色》親（おや）父（ちち）殿（だん）にもけさちよつと逢（あ）たが戻（もど）りは知（し）まい。フウそんなりやとつ様（よう）に逢（あ）ふてかへ。《地（ち）色（し）中（ちゅう）》夫（つま）ならそふと言（い）もせで《ハル》かゝ様（よう）にもわしにも。《ウ》案（あん）一（ひと）あん一（ひと）じさしてばつかりといふに文字（もじ）も《色》図（ず）一（ひと）づ一（ひと）に乗（の）って。《詞》七（しち）度（ど）尋（たず）て人（ひと）疑（うたが）うたが一（ひと）へじや。親（おや）仁（に）の有（あ）り所（ところ）の知（し）たのでそつちもこつちも心（こころ）がよい。まだ此（こゝ）上（じやう）にも四（よ）の五（ご）の有（あ）ればい（い）や共（とも）にでんどぎた。マア《色》さりと濟（い）すん一（ひと）でめでたい。お袋（ふくろ）一（ひと）ふくろ一（ひと）も御（ご）亭（てい）一（ひと）てい一（ひと）も六（む）条（じょう）参（ま）りしてちと寄（よ）しやれ。サア《色》駕（か）一（ひと）かご一（ひと）に早（はや）うのりや。アイ《色》これ勘（かん）平（へい）殿（だん）もふ今（いま）あつちへ行（い）ぞへ。年（とし）寄（よ）一（ひと）よつ一（ひと）た二人（ふたり）の親（おや）達（たち）。どふでこな様の（よう）みんな世（よ）話（わ）。取（と）わけてとつ様（よう）はきつい持（も）病（びやう）一（ひと）ぢびやう一（ひと）。氣（き）を付（つ）て下（くだ）さんせと。《地（ち）ハル》親（おや）の死（し）目（め）を露（ら）しらず。《ウ》頼（たの）むふびんさ《ウ》いぢらしさ。《中（ちゅう）ウ（う）》いつそ打（う）明（めい）有（あ）の俣（ま）い。《ハル》咄（はな）さんにも他人（たに）一（ひと）にん一（ひと）有（あ）と《スエテ》心（こころ）を。《中（ちゅう）》いためこたへ居（い）る。《詞（し）》ヲ、智（ち）殿（だん）。夫（つま）婦（ふ）の別（べつ）れ暇（ひま）乞（こ）一（ひと）いとまごひ一（ひと）がしたかろけれど。そなたに未（み）練（れん）な氣（き）も出（い）よかと思（おも）ふての事（こと）である。イエ《色》なんぼ別（べつ）れても。ぬしの為（ため）に身（み）を売（う）れば悲（かな）しうも何（なん）共（とも）ない。わしやいさんで行（い）かゝ様（よう）。したがとつ様（よう）に逢（あ）たが行（い）のが。ヲ、夫（つま）も戻（もど）らしやつたらつみ逢（あ）たがいかしやろぞいの。煩（わづ）一（ひと）わづ一（ひと）はぬ様（よう）に灸（き）一（ひと）きう一（ひと）すへて。息（いき）才（さい）一（ひと）そくさい一（ひと）な顔（かほ）見（み）せにきてたも。鼻（はな）紙（し）一（ひと）はながみ一（ひと）扇（あふ）もなけりやふ自由（じゆう）な。何（なん）にもしよいか。とばつて怪（あや）我（わ）仕（し）一（ひと）けがし一（ひと）やんなど。《地（ち）ハル》駕（か）一（ひと）かご一（ひと）に

乗（の）り込（こ）み心（こころ）を付（つ）てさらばや。《色》さらば。《上（じやう）》何（なん）の因（いん）果（くわ）で《ウ》人（ひと）並（なら）なみ一（ひと）な娘（むすめ）を持（も）つ。此（こゝ）《ウ》悲（かな）しいめを見る（み）事（こと）じやと。《ウ》齒（は）一（ひと）を喰（く）しぱり泣（な）ければ《ウ》娘（むすめ）は駕（か）にしがみ付（く）き。《ウ》泣（な）をしらすじ《キン》フシ中（ちゅう）ハル（はる）聞（き）さじと声（こゑ）をも。《ハル》立（た）ずむせかへる。《地（ち）ウ》情（なさけ）なくも《ハル》駕（か）昇（のぼ）一（ひと）かき一（ひと）上（あ）げ《フシ》道（みち）をはやめて急（いそ）ぎ行（い）く。《地（ち）ハル》母（はは）は跡（あと）を見（み）送り《中（ちゅう）》ア、《ウ》よしな事（こと）いふて娘（むすめ）も《ハル》嘸（な）悲（かな）しがる。《詞（し）》ヲ、こな人（ひと）わいの。親（おや）の身（み）でさへ思（おも）ひ切（き）がよいに。女（に）房（ぼう）の事（こと）ぐづ《色》思（おも）ふて。煩（わづ）ら一（ひと）ふて下（くだ）さんな。此（こゝ）親（おや）父（ちち）殿（だん）はまた戻（もど）らしやれぬ事（こと）かいのふ。こなた逢（あ）たがといはしやつたの。ア、成（なり）程（ほど）。そりやマアどこらで逢（あ）は一（ひと）しやつて。どこへ別（べつ）れていかしやつた。されば別（べつ）れた其所（ところ）は。鳥（とり）羽（は）一（ひと）とば一（ひと）か伏（ひ）見（み）か淀（い）一（ひと）よど一（ひと）竹（たけ）田（で）と。《地（ち）ウ》口（くち）から出（い）次（じ）第（だい）めつぼう弥（や）人（ひと）。《ハル》種（たね）一（ひと）たね一（ひと）が嶋（じま）の六（む）狸（り）一（ひと）たぬき一（ひと）の《色》角（かく）兵（へい）衛（ゑ）。《ウ》所（ところ）の狩（か）人（ひと）一（ひと）かりうど一（ひと）三人（さんにん）連（れん）。《ウ》親（おや）父（ちち）の死（し）骸（がい）一（ひと）しがいい一（ひと）に簀（すい）一（ひと）みの一（ひと）打（う）きせて《ハル》戸（かど）板（いた）に乗（の）る。《ウ》どや《色》内（うち）に入（い）る。《詞（し）》夜（よ）山（さん）仕（し）舞（ま）い一（ひと）しまふ一（ひと）て戻（もど）りがけ是（こゝ）の親（おや）父（ちち）が殺（ころ）されて居（い）られた故（ゆゑ）。狩（か）人（ひと）一（ひと）かりうど一（ひと）仲（な）間（ま）が連（れん）てきたと。《地（ち）ハル》聞（き）よりかはつと驚（おどろ）く母（はは）。《ウ》何（なん）者の（もの）所（ところ）為（ため）一（ひと）しはざ一（ひと）。コレ《ウ》智（ち）殿（だん）殺（ころ）したやつは何（なん）者（もの）じや敵（てき）を取（と）つて下（くだ）されのふ。《詞（し）》コレ親（おや）父（ちち）殿（だん）《地（ち）ハル》よべど《上（じやう）》さけべど其（その）かひも《キン》フシ中（ちゅう）ハル（はる）泣（な）より。《ハル》外（ほか）の事（こと）ぞなき。《地（ち）ウ》狩（か）人（ひと）共（とも）《色》口（くち）々に。《詞（し）》ヲ、お袋（ふくろ）悲（かな）しがる。代（だい）官（くわん）所（ところ）へ願（ねが）ふて詮（せん）義（ぎ）して貫（ぬ）はしやれ。《地（ち）ハル》笑（わら）止（と）せうし《色》と打（う）連（れん）して《フシ》皆（みな）々（々）我家（わがや）へ立（た）帰（かへ）る。《ハル》フシ母（はは）は涙（なみだ）の。《ウ》隙（ひま）よりも《ウ》勘（かん）平（へい）が傍（たが）一（ひと）そば一（ひと）へ《中（ちゅう）》指（さし）寄（よ）一（ひと）しよつて。《詞（し）》コレ智（ち）殿（だん）。よもや《色》とは思（おも）へ共（とも）合（あ）点（てん）がいかぬ。なんぼ以前（いぜん）一（ひと）が武（ぶ）士（し）じや迎（むか）ひ。舅（しゅうと）の死（し）目（め）見（み）やしやつたら。恸（なげ）一（ひと）びつく一（ひと）りも仕（し）一（ひと）やる筈（はず）一（ひと）はず一（ひと）。こなた道（みち）で逢（あ）たが時（とき）。金（かね）受（う）取（と）はさつしやれぬか。親（おや）父（ちち）殿（だん）が何（なん）といはれた。サアいはつしやれ。サア何（なん）と。どふも返（かへ）事（こと）は有（あ）るまいがの。ない証（しやう）拠（こ）は。《地（ち）ハル》コレ爰（こゝ）にと勘（かん）平（へい）が懐（なつか）し一（ひと）手を《ウ》

指入^レて引^キ出すは。《ウ》さつきにちらりと《ウ》見て置た《色》此財布^{（さいふ）}。《詞》コレ血^{（ち）}の付^レて有^ルからは。こなたが親父を殺したの。イヤ夫^{（は）}は。夫^{（は）}とは。エ、わごりよはなふ。隠しても隠されぬ天道^{（たう）}様^{（様）}が明^{（あ）}らかな。親父殿を殺して取^{（と）}つた。其金にや誰^{（た）}にやる金じや。ムウ聞^{（き）}へた。身貧^{（ひん）}な舅^{（しゅう）}。娘を売^{（う）}つた其金を。中で半分^{（はんぶん）}くすねて置^{（お）}いて。皆やるまいかと思^{（おも）}ふて。コリヤ殺して取^{（と）}つたのじやな。今といふ今^{（いま）}迄も。律義^{（りちぎ）}な人じやと思^{（おも）}ふて。欺^{（だま）}されたが腹が立^{（た）}つはいやいやい。エ、愛^{（あい）}な人^{（ひと）}でなし。あんまり軻^{（あき）}れて涙^{（なみだ）}さへ出^{（で）}ぬはいやいやい。《地上》なふ《ウ》いとしや与^{（よ）}市兵衛殿。《ウ》蓄生^{（ちくしやう）}の様^{（やう）}な聾^{（ろう）}とはしらず。《ウ》どふぞ元^{（もと）}の侍^{（侍）}にしてやりたいと。年^{（とし）}寄^{（よ）}つて夜もねずに京三界^{（けいさんがい）}（がい）を^{（を）}かけあるき。珍財^{（ちんさい）}（さい）んざい^{（んざい）}を^{（を）}投^{（な）}て打^{（う）}て世話^{（せわ）}さしやつたも。《ウ》却^{（かへ）}てこなたの身^{（み）}の怨^{（うら）}と成^{（な）}たるか。《詞》飼^{（かひ）}（かひ）か^{（か）}ふ犬^{（いぬ）}に手^{（て）}をくはるゝと。ようも^{（ようも）}此^{（こ）}様に^{（に）}む^{（む）}ごたらしう殺^{（ころ）}された事^{（こと）}じや^{（や）}迄。コリヤ愛^{（あい）}な鬼^{（おに）}（おに）よ^{（よ）}蛇^{（へび）}（じや）よ。と^{（と）}さまをか^{（か）}へせ。親父殿を生^{（な）}けて戻^{（も）}せやいと。《地色ハル》遠慮^{（えんりょ）}会^{（かい）}積^{（せき）}（えん）り^{（り）}よ^{（よ）}多^{（た）}しやく^{（やく）}も^{（も）}あ^{（あ）}ら^{（ら）}男^{（おとこ）}の。《ウ》髭^{（ひげ）}（た^{（た）}ふ^{（ふ）}さ）を^{（を）}掴^{（つか）}で引^{（ひ）}寄^{（よ）}せ^{（せ）}／＼擲^{（な）}付^{（つけ）}ケ。《ウ》づだ^{（づだ）}／＼に切^{（き）}さい^{（さい）}なんだ^{（なんだ）}逆^{（さか）}《ウ》是^{（こゝ）}で何^{（なに）}の腹^{（はら）}が^{（が）}あ^{（あ）}よ^{（よ）}と。《上》恨^{（うら）}の数^{（かず）}々^{（々）}く^{（く）}ど^{（ど）}き^{（き）}立^{（た）}《スエ》か^{（か）}つ^{（つ）}ば^{（ば）}と^{（と）}ふ^{（ふ）}して《中》泣^{（な）}居^{（い）}たる。《地ハル》身^{（み）}の誤^{（あや）}りに勘^{（かん）}平^{（へい）}も。《ウ》五^{（ご）}体^{（たい）}に熱^{（あつ）}湯^{（たう）}（ね^{（ね）}つ^{（つ）}た^{（た）}う）の汗^{（あせ）}（あ^{（あ）}せ）を^{（を）}流^{（なが）}（な）が^{（が）}し。《ウ》畳^{（たたみ）}に喰^{（く）}（くら^{（ら）}ひ）付^{（つけ）}天^{（てん）}罰^{（ばつ）}（ば^{（ば）}つ）と。《フシ》思^{（おも）}ひ知^{（ち）}つたる折^{（せ）}こそ有^{（あ）}る。《地ウ》深^{（ふか）}編^{（ひ）}笠^{（かさ）}（ふ^{（ふ）}か^{（か）}あ^{（あ）}み^{（み）}が^{（が）}さ）の侍^{（侍）}《ウ》二^{（に）}人^{（ひと）}早^{（はや）}の勘^{（かん）}平^{（へい）}《ハル》在^{（あ）}宿^{（しゆく）}（ざ^{（ざ）}い^{（い）}し^{（し）}ゆ^{（ゆ）}く）を^{（を）}し^{（し）}め^{（め）}さ^{（さ）}るか。《ウ》原^{（はら）}郷^{（ごう）}右^{（ご）}衛^{（ゑ）}門^{（もん）}千^{（ち）}崎^{（さき）}弥^{（や）}五^{（ご）}郎^{（らう）}御^{（ご）}意^{（い）}得^{（とく）}た^{（た）}しと《色》音^{（ね）}な^{（な）}へ^{（へ）}ば。《ウ》折^{（せ）}悪^{（あく）}（け^{（け）}れ^{（れ）}共^{（とも）}勘^{（かん）}平^{（へい）}は。《ウ》腰^{（こし）}ふ^{（ふ）}さ^{（さ）}ぎ《ハル》脇^{（わき）}挟^{（さ）}（わ^{（わ）}き^{（き）}ば^{（ば）}さん）で《色》出^{（で）}迎^{（むか）}（む^{（む）}か）ひ。《詞》コレハ^{（は）}御^{（ご）}両^{（りやう）}所^{（じよ）}共^{（とも）}に。見^{（み）}苦^{（くる）}（く^{（く）}る）し^{（し）}き^{（き）}殖^{（しょく）}生^{（せい）}（あ^{（あ）}ば^{（ば）}ら^{（ら）}や）へ御^{（ご）}出^{（で）}忝^{（かたじけ）}しと。《ハル卒^{（そと）}頭^{（とう）}を^{（を）}さ^{（さ）}ぐ^{（ぐ）}れば《色》郷^{（ごう）}右^{（ご）}衛^{（ゑ）}門^{（もん）}。《詞》見^{（み）}れば家^{（か）}内^{（ない）}に取^{（と）}込^{（こ）}も有^{（あ）}そ^{（そ）}ふ^{（ふ）}な。イヤも^{（も）}ふ^{（ふ）}瑣^{（さ）}細^{（さい）}（さ^{（さ）}さい）な^{（な）}内^{（ない）}証^{（しやう）}事^{（じ）}。お^{（お）}構^{（かま）}（か^{（か）}ま^{（ま）}ひ）なく共

いざ先^{（ま）}ッ^{（つ）}あれ^{（れ）}へ。《地ウ》然^{（しか）}らば左^{（ひだり）}様^{（さま）}（さ^{（さ）}やう）に致^{（いた）}さんと^{（と）}ず^{（ず）}つと通^{（とほ）}り《ハル》座^{（ざ）}につ^{（つ）}け^{（け）}ば。《ウ》一^{（ひと）}人^{（ひと）}が^{（が）}前^{（まへ）}に両^{（りやう）}手^{（て）}をつ^{（つ）}き。《詞》此^{（こゝ）}度^{（ど）}殿^{（どの）}の御^{（ご）}大事^{（だいじ）}には^{（は）}づ^{（づ）}れた^{（た）}る^{（る）}は。拙^{（ちつ）}者^{（しや）}が^{（が）}重^{（おも）}々^{（々）}の誤^{（あや）}り。申^{（ま）}ひ^{（ひ）}ら^{（ら）}かん^{（かん）}詞^{（し）}も^{（も）}なし。何^{（なに）}卒^{（そと）}某^{（たが）}が^{（が）}科^{（か）}御^{（ご）}赦^{（しや）}（ゆる）し^{（し）}を^{（を）}蒙^{（まう）}（か^{（か）}う^{（う）}む）り。亡^{（ぼう）}君^{（くん）}の御^{（ご）}年^{（ねん）}忌^{（き）}（き）諸^{（しよ）}家^{（か）}中^{（ちゆう）}諸^{（しよ）}共^{（とも）}相^{（あ）}勤^{（きん）}（つと^{（と）}む）る^{（る）}様^{（さま）}に御^{（ご）}両^{（りやう）}所^{（じよ）}の御^{（ご）}執^{（しつ）}成^{（じやう）}（と^{（と）}り^{（り）}なし）《地ハル》偏^{（へん）}に《ウ》頼^{（たの）}奉^{（ほう）}（と^{（と）}む）る^{（る）}様^{（さま）}に御^{（ご）}両^{（りやう）}所^{（じよ）}の御^{（ご）}執^{（しつ）}成^{（じやう）}（と^{（と）}り^{（り）}なし）《地ハル》郷^{（ごう）}右^{（ご）}衛^{（ゑ）}門^{（もん）}《色》取^{（と）}あ^{（あ）}へ^{（へ）}ず。《詞》先^{（ま）}ッ^{（つ）}以^{（も）}つ^{（つ）}其^{（その）}方^{（かた）}貯^{（ちゆう）}（た^{（た）}く^{（く）}は^{（は）}へ）なき浪^{（なみ）}人^{（ひと）}の身^{（み）}として。多^{（た）}くの金^{（かね）}子^{（こ）}御^{（ご）}石^{（いし）}牌^{（はい）}料^{（りょう）}（ひ^{（ひ）}れ^{（れ）}う）に調^{（てう）}進^{（しん）}（て^{（て）}う^{（う）}しん）せ^{（せ）}られし段^{（だん）}。由^{（よし）}良^{（ら）}助^{（すけ）}殿^{（どの）}甚^{（はな）}か^{（か）}ん^{（ん）}じ^{（じ）}入^{（い）}れ^{（れ）}し^{（し）}が。石^{（いし）}牌^{（はい）}を^{（を）}営^{（いとなむ）}（は^{（は）}亡^{（わう）}君^{（くん）}の御^{（ご）}菩^{（ぼ）}提^{（だい）}（ぼ^{（ぼ）}だ^{（だ）}い）殿^{（どの）}に^{（に）}ふ^{（ふ）}忠^{（ちゆう）}ふ^{（ふ）}義^{（ぎ）}を^{（を）}せ^{（せ）}し其^{（その）}方^{（かた）}の金^{（かね）}子^{（こ）}を^{（を）}以^{（も）}つて。御^{（ご）}石^{（いし）}碑^{（はい）}料^{（りょう）}に用^{（もち）}（も^{（も）}ち）ひ^{（ひ）}られ^{（れ）}ん^{（ん）}は。御^{（ご）}尊^{（そん）}戻^{（れい）}（そ^{（そ）}ん^{（ん）}れ^{（れ）}い）の御^{（ご）}心^{（こゝろ）}にも^{（も）}叶^{（は）}ふ^{（ふ）}ま^{（ま）}じ^{（じ）}と^{（と）}有^{（あ）}つて。金^{（かね）}子^{（こ）}は封^{（ふう）}（ふう）の儘^{（まま）}（ま^{（ま）}）相^{（あ）}戻^{（れい）}（さ^{（さ）}ると。《地ウ》詞^{（し）}の中^{（ちゆう）}より弥^{（や）}五^{（ご）}郎^{（らう）}懐^{（くは）}中^{（ちゆう）}より金^{（かね）}取^{（と）}出^{（で）}し。《ウ》勘^{（かん）}平^{（へい）}が^{（が）}前^{（まへ）}に指^{（さ）}置^{（お）}け^{（け）}ば。は^{（は）}つと《ウ》計^{（けい）}りに気^{（き）}も^{（も）}転^{（てん）}動^{（どう）}（て^{（て）}ん^{（ん）}どう）母^{（はは）}は^{（は）}涙^{（なみだ）}と《ウ》諸^{（しよ）}共^{（とも）}に。《詞》コリヤ愛^{（あい）}な悪^{（あく）}人^{（ひと）}づ^{（ず）}ら。今^{（いま）}とい^{（い）}ふ^{（ふ）}今^{（いま）}親^{（おや）}の罰^{（ばち）}思^{（おも）}ひ^{（ひ）}し^{（し）}つ^{（つ）}た^{（た）}か。皆^{（みな）}様^{（さま）}も^{（も）}聞^{（き）}いて^{（て）}下^{（くだ）}され。親^{（おや）}父^{（ふ）}殿^{（どの）}が^{（が）}年^{（ねん）}寄^{（よ）}つて^{（て）}後^{（ご）}生^{（せい）}（ご^{（ご）}し^{（し）}やう）の事^{（こと）}は^{（は）}思^{（おも）}はず。聾^{（ろう）}の^{（の）}為^{（ため）}に娘^{（むすめ）}を^{（を）}売^{（う）}り。金^{（かね）}調^{（てう）}（て^{（て）}戻^{（も）}らし^{（し）}やる^{（る）}を^{（を）}待^{（まち）}ぶ^{（ぶ）}せ^{（せ）}して。あ^{（あ）}の^{（の）}様^{（さま）}に^{（に）}殺^{（ころ）}して^{（て）}取^{（と）}つた^{（た）}金^{（かね）}じ^{（じ）}や^{（や）}物^{（もの）}。天^{（てん）}道^{（だう）}（た^{（た）}う）様^{（さま）}が^{（が）}な^{（な）}く^{（く）}は^{（は）}し^{（し）}ら^{（ら）}ず。なん^{（なん）}で^{（で）}御^{（ご）}用^{（よう）}に^{（に）}立^{（た）}つ^{（つ）}物^{（もの）}ぞ。《地ハル》親^{（おや）}殺^{（ころ）}し^{（し）}の^{（の）}い^{（い）}き^{（き）}盗^{（たう）}人^{（にん）}に。《ウ》罰^{（ばち）}を^{（を）}当^{（あた）}て^{（て）}下^{（くだ）}され^{（れ）}ぬ^{（ぬ）}は。《ウ》神^{（かみ）}や^{（や）}仏^{（ぶつ）}も^{（も）}聞^{（き）}へ^{（へ）}ぬ。《詞》あ^{（あ）}の^{（の）}ふ^{（ふ）}孝^{（かう）}（か^{（か）}う）者^{（しや）}お^{（お）}ま^{（ま）}へ^{（へ）}方^{（かた）}の^{（の）}手^{（て）}に^{（に）}か^{（か）}けて。な^{（な）}ぶ^{（ぶ）}り^{（り）}殺^{（ころ）}し^{（し）}に^{（に）}して^{（て）}下^{（くだ）}され。《地ハル》わ^{（わ）}し^{（し）}や^{（や）}腹^{（はら）}が^{（が）}立^{（た）}つ^{（つ）}は^{（は）}い^{（い）}の^{（の）}と^{（と）}身^{（み）}を^{（を）}《スエ》投^{（な）}（な）して《中》泣^{（な）}居^{（い）}たる。《地ウ》聞^{（き）}に^{（に）}驚^{（おど）}き^{（き）}両^{（りやう）}人^{（にん）}刀^{（たう）}追^{（お）}ッ^{（つ）}取^{（と）}。《ウ》弓^{（きう）}手^{（て）}馬^{（ば）}手^{（て）}に《ハル》詰^{（つ）}（つ^{（つ）}め）^{（め）}かけ^{（け）}／＼。《ウ》弥^{（や）}五^{（ご）}郎^{（らう）}声^{（こゑ）}を^{（を）}《色》あ^{（あ）}ら^{（ら）}／＼^{（げ）}。《詞》ヤ^{（や）}イ^{（い）}勘^{（かん）}平^{（へい）}。非^{（ひ）}義^{（ぎ）}（ひ^{（ひ）}ぎ）非^{（ひ）}道^{（だう）}（ひ^{（ひ）}だう）の^{（の）}金^{（かね）}取^{（と）}つて。身^{（み）}の^{（の）}科^{（か）}の^{（の）}詫^{（わ）}（わ^{（わ）}び）せ^{（せ）}よ^{（よ）}と^{（と）}は^{（は）}言^{（い）}ぬ^{（ぬ）}ぞ^{（ぞ）}よ。わ^{（わ）}が^{（が）}や^{（や）}う^{（う）}な^{（な）}人^{（ひと）}非^{（ひ）}人^{（にん）}（に^{（に）}ん^{（ん）}び^{（び）}に^{（に）}ん）武^{（ぶ）}士^{（し）}の^{（の）}道^{（だう）}は^{（は）}耳^{（みみ）}に^{（に）}入^{（い）}ま^{（ま）}い。親^{（おや）}同^{（どう）}然^{（ぜん）}の^{（の）}舅^{（しゅう）}（しゅう）を^{（を）}殺^{（ころ）}し^{（し）}金^{（かね）}を^{（を）}盗^{（たう）}（ぬす）^{（ぬ）}す^{（す）}んだ^{（だ）}重^{（じゆう）}罪^{（ざい）}（ぢゆう^{（じゆう）}ざい）人^{（にん）}は。大^{（だい）}身^{（みん）}鎧^{（よろい）}（や^{（や）}り）の^{（の）}田^{（でん）}楽^{（らく）}（で^{（で）}ん^{（ん）}が^{（が）}く）ざ^{（ざ）}し。拙^{（ちつ）}者^{（しや）}が^{（が）}手^{（て）}料^{（りょう）}理^{（り）}（れ^{（れ）}う^{（う）}り）ふ^{（ふ）}る^{（る）}ま^{（ま）}は^{（は）}んと。《地ハル》は^{（は）}つ^{（つ）}た^{（た）}と^{（と）}に^{（に）}ら^{（ら）}め^{（め）}ば《色》郷^{（ごう）}右^{（ご）}衛^{（ゑ）}門^{（もん）}。《詞》か^{（か）}つ^{（つ）}し^{（し）}ても^{（も）}盗^{（たう）}泉^{（せん）}（たう^{（たう）}せん）の^{（の）}水^{（みづ）}を^{（を）}吞^{（の）}（の）

ま)ずとは義者のいましめ。舅を殺し取たる金。亡君の御用金に成べきか。生得(しやうとく)一汝がふ忠義の根性(こんじやう)にて。調へたる金と推察(すいさつ)一有て。つき戻されたる由良助の眼力(がんりき)一天晴(あつぱれ)一。去ながら。ハア情なきは此事世上に流布(るふ)一有て。塩冶判官の家来早の勘平。非義非道を行(おこな)ひしといはゞ。汝計が恥ならず。亡君の御恥辱(ちじよく)としらざるか。睦者。左程の事の弁(わきま)一へなき汝にてはなかりしが。いかなる天魔(ま)一が見入(れ)しと。《地ハル》するどき眼(まなこ)に《ウ》涙をうかめ事をわけ理を《中》せむれば。《ウ》たまり兼て勘平。《ハル》諸肌(もろはだ)一押しぬぎ脇指を。《ウ》ぬくより早く腹にぐつと《色》突(つき)一立(た)テ。《詞》ア、いづれもの手前面目(めんぼく)一もなき仕合。拙(ち)者が望(のぞ)み叶はぬ時は切(き)腹と兼ての覚悟(かくご)。我舅を殺せし事亡君の御恥辱(ちじよく)とあれば一ト通り申ひらかん。兩人共に聞てたべ。夜前(よ)彌五郎殿の御目にかゝり。別れて帰るくら紛(まぎ)一れ山越猪(こすし)一に出合。二つ玉にて打留(とど)め。かけ寄(よ)りてさぐり見れば。猪にはあらで旅人。なむ三宝過(あやまつ)たり。葉はなきかと懐(くは)中(ちゆう)をさがし見れば。財布に入たる此金。道ならぬ事なれ共天より我にあたふる金と。直(ただ)にはせ行(い)彌五郎殿に彼(かの)一金を渡し。立帰(た)つて様子を聞(き)ば。打留(とど)めたるは我(わ)舅。金は女房(にようばう)を売(う)つた金。《地上》かほど迫(お)する事なす事。《ウ》鵜(う)の嘴(くちばし)一程違(ちが)ふといふも。《ウ》武運(ぶうん)一に尽(つ)き一たる勘平が。《ウ》身の成(なり)行推(いり)量有(りやう)と《スエ》血走(ちまは)しる。眼に《中》無念の涙。《地ウ》子細(こさい)を聞(き)より《ハル》弥五郎(やごろう)と《中》立(た)上(あ)り。《ウ》死骸(しかい)一しがい一《中》引上(ひきあ)げ打返(うちかへ)しムウ一と疵(きず)一《色》口改(くちかへ)一あらため。《詞》郷右衛門殿(ごえもん)は見られよ。鉄砲(てつぱう)一てつほう一疵(きず)一に似たれ共。是は刀(た)で多(おほ)ぐつた疵(きず)。エ、勘平(かんへい)早(はや)まりしと。《地ハル》いふに手負(ておひ)一も見て恠(あは)れ一びつく一り。《フシ》母も驚(おど)く計(けい)也。《地ハル色》郷右衛門心付(ごえもんこころづ)一。《詞》イヤコレ千(ち)崎殿(さき)ア、是(こゝ)にて思(おも)ひ当(あた)つたり。御自分(ごじぶん)一も見られし通(と)り。是(こゝ)へ来る道端(みちばた)一に。鉄砲(てつぱう)受(う)けたる旅人

の死骸(しかい)一しがい一。立寄(た)り見れば斧(おの)一定九郎(じゆうらう)。強欲(ごうよく)一な親九太夫(おんな)さへ。見限(かぎ)一つて勘当(かんどう)一したる悪党(あくどう)一者。身のイ(た)ゞずみ一なき故に。山賊(さんぞく)一すると聞(き)たるが疑(うたが)ひもなく勘平(かんへい)が。舅(お)を討(う)たはきやつが業(わざ)。エ、そんなりや。あの親父殿(おや)を殺(ころ)したは。外の者(ほか)でござりまするか。ハアはつと。《地ハル》母は手負(ておひ)一に縫(ぬ)一すか一り。《詞》コレ手を合(あ)はして押(お)がみ一ます。年寄(としより)の愚智(ぐち)一な心(こゝろ)から恨(うら)みふたは皆誤(あや)り。《地ハル》こらへて下(くだ)され勘平(かんへい)殿。必(かならず)《ウ》死(し)んで下(くだ)さるなと。《ウ》泣(な)詫(わ)一わぶ一れば顔(かほ)《中》ふり上(あ)り。《詞》只今(ただいま)母(はは)の疑(うたが)ひも。我(わ)カ悪(あく)名(な)も晴(は)れば。是(こゝ)を冥途(めいどう)の思(おも)ひ出(い)とし。跡(あと)より追(お)ひ付(つ)き舅(お)殿(だん)。死(し)出(い)三途(さんず)一を伴(とも)一ともな一はんと。《地ハル》突(つ)込(こ)み刀(や)引(ひ)き廻(ま)せばア、《色》暫(しばらく)一。《詞》思(おも)はずも某(た)れが舅(お)の敵(てき)討(う)つたるは。いまだ武運(ぶうん)一に尽(つ)き一ざる所。《地ウ》弓(ゆみ)矢(や)神(かみ)の御恵(ごゑ)一めぐみ一にて。一ト劫(ごう)一立(た)たる《ハル》勘平(かんへい)。《ウ》息(いき)の有(あ)り中(ちゆう)郷右衛門(ごえもん)が密(ひそ)一ひそか一に見(み)する《ウ》物有(もの)と。《ウ》懐(くは)中(ちゆう)より一巻(まき)一を取出(と)り。《ウ》さら一と《色》押(お)しひらき。《詞》此度(こゝろ)亡(な)君(きみ)の敵(てき)。高(たか)師(し)直(ただ)を討(う)ち取(と)らんと神(かみ)文(ぶん)を取(と)りかはし。一味(いまい)一徒党(とどう)の連判(れんぱん)かくのごとしと。《地色ウ》読(よ)み一も終(お)は一らず《ハル》苦痛(くるう)の勘平(かんへい)。《ウ》其(その)姓名(せいめい)一は誰(た)れ《色》成(なり)ぞや。《詞》ヲ、徒党(とどう)の人数(にんずう)は四十五(しじゅうご)人。汝(なんぢ)が心(こゝろ)底(そこ)見(み)届(とど)け一たれば。其方(そのかた)を指(さ)加(か)一くは一一味(いまい)一の義士(ぎし)四十六(しじゅうろく)人。是(こゝ)を冥途(めいどう)の土産(みやげ)にせよと。《地ハル》懐(くは)中の矢立(やたて)取(と)り出し《ウ》姓名(せいめい)を《色》書(か)記(き)一するし。《詞》勘平(かんへい)血判(ちけん)《地ハル》心得(こころえ)たりと腹(はら)十(じゅう)もんじにかき切(き)切(き)臍(せ)一(ざうふ)一を掴(つか)んで《色》しつかと押(お)し。《詞》サア血判(ちけん)仕(し)つた。ア、忝(かたじけ)なや有(あ)りたや。我(わ)望(のぞ)み達(た)つ一したり。母(はは)人(ひと)歎(なげ)いて下(くだ)さるな。舅(お)のさいごも。女房(にようばう)の奉公(ほうこう)も。反古(はんこ)一にはならぬ此(こ)金(かね)。一味(いまい)徒党(とどう)の御用金(ごようぎん)と。《地ハル》いふに母(はは)も涙(なみだ)ながら。《ウ》財布(さいふ)と俱(とも)に二包(ふたひ)二人(ふたり)が前に《色》指(さ)し出(い)し。《詞》勘平(かんへい)殿(だん)の魂(たま)の入(い)りた此(こ)財布(さいふ)。《地ハル》鞆(たば)殿(だん)じやと思(おも)ふて。《ウ》敵(てき)討(う)つ御供(ごこう)に連(つ)れて《フシ》ござつて下(くだ)さりませ。《詞》

ヲ、成ル程尤也と郷右衛門金取納（おさ）め。《地ウ》思へば／＼は此金は嶋の財布の《ハル》紫摩黄金仏果（しまわうごんふつくは）を《ウ》得よと《色》言ければ。《詞》ア、仏果とは穢（けがら）はし。死（な）ぬ／＼。魂魄（こんぱく）此士（こんぱく）にどまつて。敵討の御供すると。《地ハル》言声も早四苦（く）八苦。《ウ》母は涙にかきくれないながらナフ《ウ》勘平殿。此事を娘にしらし。《ウ》せめて死目に逢して《色》やりたい。《詞》イヤ／＼親のさいごは格別（かくべつ）。勘平が死んだ事必し下さるな。お主の為に売ったる女房。此事聞てぶほうこうせば。お主にふ忠するも同然。只其儘に指置（さ）れよ。サア思ひ置事なしと。《地ハル》刀の鈍（ぬ）咽（の）のんどに／＼指貫（さし）つらぬき《フシ》かつばとふして息絶（いき）きたへたり。《詞》ヤアもふ智殿は死しやつたか。《地ハル》扱も《ウ》世の中に《ウ》おれが様な《上》因果（いんぐは）な者が又と一人（ひとり）有（あ）るか。《ウ》親父殿は死しやる頼に思ふ智を先（ま）立（た）て。《ウ》いとしかはいの娘には生（な）別（べ）れ。《色》年寄（としよ）つた此母が《ウ》一人（ひとり）残（のこ）つて《ハル》是（こ）れがマア。《ウ》何（なに）と生（な）きて居（ゐ）られふぞ。コレ《詞》親父殿与市兵衛殿。《地ハル》おれも一所に連れて下されと。《ウ》取付（と）ては泣（な）きさび。《ウ》又立上（た）つてコレ《色》智殿。《上》母も俱（とも）には泣（な）すがり／＼付（つ）ては伏（ふ）ししづみ。《ウ》あちらでは泣（な）こちらでは泣（な）。わつと《ウ》計（は）に《ウ》どぶど伏（ふ）。《上》声（こゑ）をはかりに《フシノル中》歎（な）きは目も当（あ）て。《ハル》られぬ次第（しだい）なり。《地ハル》郷右衛門《色》つつ立上（た）り。《詞》ヤアこれ／＼老母（らうぼ）。歎（な）かるは理（こと）りなれ共。勘平がさいごの様子。大星殿に委（ま）はしく語り。入用金手渡しせば満足（まんぞく）あらん。《地ウ》首（くび）にかけたる《ハル》此金（こゝね）は。《ウ》智（ち）と舅（しよ）の七（な）々（つ）日（ひ）（な）ななぬか。《ウ》四十九日（しじゅうくにち）や《ハル》五十両（ごじゅうりょう）。《ウ》合（あ）せて《ウ》百両百（ひゃくりょうひゃく）日（ひ）の追善供養（しぜんくやう）（ついでんくやう）。跡（あと）／＼懇（こ）ねんころ／＼に吊（た）るとむら／＼はれよ《色》さらば／＼。《ハル》おさらばと見送（みおく）る《中》涙（なみだ）見返（みかへ）る《ハル》涙（なみだ）／＼涙（なみだ）の浪（なみだ）の《ウ》立返（た）る人も。《上》はかなき《三重》*

第七段 一方の段

・第七 * 17 《哥ハル》花に遊ばゞ祇園（ぎおん）あたりの色揃（いろぞろ）へ。《中ウ》東方南方北方西方。《ハル》みだの浄土（じやうど）か《中》ぬりに塗（ぬ）り立（た）びつかりぴか／＼。《ハル》光（ひかり）か／＼やくはくや芸子（げいこ）にかなすいめも。現（うつ）ぬかして。《下》ぐどん《ウ》どろつく《ウ》どろつくや《ハル》ワイワイノワイトサ《ナラス詞》誰（た）そ／＼頼（た）ふ。亭主（ていしゆ）は居（ゐ）ぬか。亭主（ていしゆ）／＼。友（とも）ははいそがしいは。どいつ様（さま）じや。どなた様（さま）じや。エ斧（い）おの／＼九（く）太（た）様（さま）。御案内（ご案内）（あんない）とはけうとい／＼。《色》イヤ初（は）めてのお方を同道（どうだう）（どう）／＼申（ま）した。きつう取（と）り込（こ）そふに見（み）へるが。一（い）つ上（か）ます座敷（ざしき）が有（あ）るか。友（とも）ござります共（ども）。今晚（こんばん）（こんばん）は彼（かの）／＼由（よし）良（ら）大（だい）尺（せき）（じん）の御趣向（ごしゆかう）（しゆかう）で。名（な）有（あ）る色（いろ）達（たち）を掴（つか）み込（こ）みます。友（とも）そりや又（また）蜘蛛（くも）の巢（す）／＼だらけで有（あ）る。友（とも）又（また）悪（あく）口（くち）を。友（とも）イヤサよい年（とし）をして。女郎（ぢやうらう）の蜘蛛（くも）の巢（す）にか／＼まい用心（ようしん）（ようしん）。友（とも）コリヤきつい。下に置（お）かれぬ二階（にかい）（かい）座敷（ざしき）。ソレ灯（ひ）をともせ中居（ちゆうぐゐ）共（ども）。お盃（さかづき）おたばこ盆（ぼん）（ぼん）と。高い調（てう）子（こ）にかせかけて《ウ》奥（おく）は騒（さわ）の太鼓（たいこ）三味（さんまい）《詞下》伴内殿（ばんないでん）。由（よし）良（ら）助（すけ）が体（てい）御（ご）らうしたか。《信》九（く）太（た）夫（ふ）殿（だん）。ありやいつそ気違（ちが）ひでござる。段々（だんだん）貴様（きさま）より御内通（ごないつう）（ないつう）有（あ）るも。あれ程（ほど）に有（あ）るとは。主人師直（しじゆく）も存（ぞん）ぜず。拙（せつ）者（もの）に罷登（ばいとう）（のぼ）つて見届（みと）け。心得（こころえ）事（こと）あらば。早速（さつそく）にしらせよと申（ま）付（つ）ましたが。扱（あ）／＼我（わ）がもへんしも折（お）折（お）れましてござる。友（とも）力（ちから）弥（や）めは何（なに）と致（いた）したな。《色》こいつも折（お）節（せつ）此（こ）所（ところ）へ参（ま）り俱（とも）に放埒（ほうらち）（ほうらち）。指（さ）指（さ）くらぬがふしぎの一（い）つ。今（こん）晩（ばん）（ばん）は底（そこ）／＼の底（そこ）を捜（た）さ（さが）し見（み）んと。心工（こころたくみ）を致（いた）して参（ま）つた。密（ひそ）／＼みつ／＼にお咄（おど）し申（ま）そふ。いざ二階（にかい）（かい）へ。《信》先（ま）ッ々（つ）々（つ）々（つ）。《色》然（しか）らばかうお出（い）で。《三下り哥ハル》じつは心に。《ウ》思（おも）ひはせいで《中》

敵の首を斗升（とます）ではかる程取つても釣（つり）合ぬ（あは）ぬ。所でやめた。ナ聞へたか。兎角（とかく）浮世は《ランドハル》かうした物じや。《中》つゝてん／＼。《ナラス詞》なぞと引つかけた所はたまらぬ／＼。《政》是は由良ノ助様のお詞共覚ませぬ。僅（わずか）三人扶持取拙（さ）者めでも。千五百石の御自分（じぶん）様でも。繫（つなぎ）ました命は一つ。御恩（おん）に高下（たか）はござりませぬ。押（お）に押（お）サれぬはお家の筋目。殿の御名代もなされまする。歴（れき）々様方の中へ。見るかげもない私めが。指加（さし）くはへてとお願ひ申（ま）すは。憚（は）り共慮（り）外（がい）共（ご）ほんの猿（さる）が人真（ま）似（ね）似（ね）。お草履（ぞうり）を掴（つか）んで成共（な）共（ご）。お荷持（に）もつ（も）つをかづいて成（な）り共（ご）さんじませう。お供（とも）に召（め）連（れ）られて。ナ申（ま）す。コレ申（ま）す。／＼。是はしたり寐（ね）てござるそふな。《回》コレサ平右エ門。あつたら口に風（か）ひかすまい。由良助（ゆら）は死人（しにん）も同然（どうぜん）。矢間（やま）殿（だん）。千（ち）崎（さ）殿（だん）。モウ本（もと）心（こ）は見（み）へましたか。申（ま）合せた通（と）り計（けい）（は）から／＼ひませうか。《文》いか様。一味（い）連（れ）判（はん）の者（もの）共（ご）への見（み）せしめ。いさいづれもと立（た）寄（よ）るを。《政》ヤレ《地色（ぢしき）ハル》しばらくと平右エ門《ウ》押（お）シなだめ《色（しき）》傍（そば）に寄（よ）る。《詞（ことば）》つく／＼、思（おも）ひ廻（ま）しますれば。主君（しゅきん）にお別（わか）れなされてより。怨（あ）たを報（む）はんと様（さま）々の艱難（げんなん）（かん）なん。木（き）にも萱（う）／＼（か）や／＼にも心（こ）を置（お）き。人（ひと）の譏（そ）り無（む）念（ねん）をば。じつとこたへてござるからは。酒（さけ）でもむりに参（ま）らさば。是（こゝ）迄（まで）も統（と）つゞき／＼ますまい。《地（ぢ）中（ちゅう）ハル》醒（さ）め／＼ての上（の）の御（ご）分（ぶん）別（べつ）（ふん）べつと《ウ》無（む）理（り）に押（お）サへて三人（さんにん）を。《三（さん）人（にん）中（ちゅう）ウハル》伴（ばん）ふ／＼間（ま）は善（ぜん）悪（あく）の。《ウ》明（あ）かりを照（て）ら／＼す障子（しょうし）の内（うち）《中（ちゅう）トル》かぎを隠（かく）すや。《上（かみ）》八月（はつげつ）の入（いり）。《地（ぢ）色（しき）ハル》山科（やまの）（しな）よりは一里（いちり）半（はん）息（いき）を切（き）たる嫡子（ちやくし）力（ちから）弥（や）。《中（ちゅう）ウ》内（うち）をすかして正（ただ）体（たい）なき父（ちち）が寐（ね）姿（すがた）（ね）すがた。《ウ》起（お）こすも人（ひと）の耳（みみ）近（ちか）／＼しと《ウキン》枕（まくら）元に《ウ》立（た）寄（よ）つて。《ハル》轡（しん）くつわ／＼にかはる刀（た）の鐙（やぶ）音（ね）（つばおと）。《ウ》鯉（こい）（こい）口（くち）ちやんと《色（しき）》打（う）鳴（な）（なら）／＼せば。《此（こゝ）》《ハル》むつくと起（お）き／＼て《色（しき）》ヤア力（ちから）弥（や）か。《詞（ことば）》こい口（くち）の音（ね）響（ひび）か／＼せしは急（い）用（よう）（きう）よう／＼有（あ）つてか密（ひそ）か／＼に

／＼。《回》只今（ただいま）御（ご）台（だい）かほよ様（さま）より。急（い）のお飛（ひ）脚（かく）密（みつ）事（じ）の御（ご）状（じょう）。《此（こゝ）》外（が）に御（ご）口（くち）上（じやう）はなかつたか。《友（とも）》敵（てき）高（たか）ノ師（し）直（ち）帰（かへ）国（くに）（きこく）の願（ねが）ひ叶（かな）ひ。近（ちか）々（々）本（ほん）国（こく）へ歸（かへ）る。委（あ）細（こ）（あ）さいの義（ぎ）はお文（ぶん）との御（ご）口（くち）上（じやう）。《此（こゝ）》よし／＼。其（その）方（かた）は宿（しゆく）へ歸（かへ）り。夜（よ）の内（うち）に迎（むか）ひの駕（か）（か）こいけ／＼。《友（とも）》《地（ぢ）ハル》はつとためらふ隙（ひま）もなく《フシ》山科（やまの）さして引返（ひきかへ）す。《此（こゝ）》《地（ぢ）ウ》先（ま）づ様（さま）子（こ）氣（き）遣（は）と《ハル》状（じょう）の封（ふう）（ふう）じを《中（ちゅう）》切（き）所（じよ）へ。《回》《詞（ことば）》大（だい）星（せい）殿（だん）。由（ゆ）良（ら）殿（だん）。斧（お）の一九（いちじゅう）太（た）夫（ふ）でござる。《地（ぢ）ハル》御（ご）意（い）得（え）ませふと《色（しき）》声（こゑ）かけられ。《此（こゝ）》《詞（ことば）》是（こゝ）は久（く）しや／＼。一（いち）年（ねん）も逢（あ）いぬ内（うち）。寄（よ）つたぞや／＼。額（ひたい）（ひたい）に其（その）皺（しわ）のぼしにお出（い）出（で）か。アノ爰（こゝ）な筵（しん）（むしろ）破（やぶ）（やぶ）り／＼めが。《回》イヤ由（ゆ）良（ら）殿（だん）。大（だい）功（こう）（こう）は細（こ）瑾（ぎん）（さい）きん／＼を顧（か）へりみ／＼ずと申（ま）す。人（ひと）の譏（そ）りも構（かま）はず遊（あそ）里（り）（ゆう）り／＼の遊（あそ）び。大（だい）功（こう）（こう）を立（た）る基（もと）（もと）とひ。連（れん）（あ）つはれ／＼の大（だい）丈（ぢやう）夫（ふ）（ぢやう）ぶ／＼末（すえ）頼（たの）もしう存（ぞん）る。《此（こゝ）》ホラ、是（こゝ）は堅（か）たいは／＼。石（い）火（くわ）矢（や）と出（い）でかけた。去（い）り／＼はおかれい。《回》イヤア由（ゆ）良（ら）ノ助（すけ）殿（だん）とぼけまい。誠（まこと）（まこと）貴（き）殿（だん）の放（は）埒（らち）は。《此（こゝ）》敵（てき）を討（う）つ術（じゆつ）（て）だて／＼と見（み）へるか。《回》おんでもない事（こと）。《此（こゝ）》忝（かたじけ）ない。四十（よんじゅう）に余（あま）／＼つて色（しき）狂（くる）（くる）ひ。馬（うま）鹿（か）（ば）か／＼者（もの）よ。氣（き）違（ちが）ひ（ちが）ひ／＼よと。笑（わら）はれふかと思（おも）ふたに。敵（てき）を討（う）つ術（じゆつ）とは九（く）太（た）夫（ふ）殿（だん）。ホ、ウ嬉（うれ）しい／＼。《回》スリヤ其（その）元（もと）は。主（しゅ）人（にん）塩（しん）治（ぢ）の怨（あ）たを報（む）ずる所（ところ）存（ぞん）はないか。《此（こゝ）》けもない事（こと）／＼。家（か）国（こく）を渡（わた）す折（せ）から。城（じやう）を枕（まくら）に討（う）つ死（し）といふたのは。御（ご）台（だい）様（さま）への追（お）従（じゆう）（ついで）しやう。時（とき）に貴（き）様（さま）が。上（かみ）へ対（たい）／＼して朝（あ）敵（てき）同（どう）然（ぜん）（どう）ぜん／＼と。其（その）場（ば）（ば）をついと立（た）つた。我（われ）等（ら）は跡（あと）に。しやちばつて居（い）た。いかゐたわけの。所（ところ）で仕（し）廻（まわ）は付（か）ず。御（ご）墓（はか）へ参（ま）つて切（き）腹（はら）と。裏（うら）門（かど）からこそ／＼。今（いま）此（こゝ）安（あん）楽（らく）（あん）らく／＼なたのしみするも貴（き）殿（だん）のおかげ。昔（むかし）のよしみは忘れぬ／＼。堅（か）みをやめて碎（くだ）（くだ）だけ／＼おれ／＼。《回》いか様（さま）此（こゝ）九（く）太（た）夫（ふ）も。昔（むかし）思（おも）へば信（しん）太（た）（しの）だの狐（きつ）（きつ）ね。ばけ頭（かぶ）はして一（いっ）献（けん）（こん）くもふか。サア由（ゆ）良（ら）殿（だん）。久（く）しぶりだお盃（さかづき）。《此（こゝ）》又（また）頂（ちやう）戴（たい）（てう）だい／＼と会（あ）所（ところ）（く）わいしよ／＼めくのか。《回》さしおれ香（か）は。《此（こゝ）》香（か）おれさすは。《回》てうど受（う）おれ《地（ぢ）色（しき）ウ》肴（さかな）をするはと傍（そば）／＼に有（あ）合（あ）つて《ハル》鮓（すし）肴（さかな）（た

《ハル》椽（ゑん）の下には猶多つぽ。文《ウ》上には鏡（かざみ）の《色》かげ隠し。《詞》由良さんか。此おかるか。そもじはそこに何してぞ。文わたしやおまへにもりつぶされ。あんまりつらさに酔（ゑひ）さまし。風にふかれて居るはいな。此ムウ。ハテなふ。よう風にふかれてじやの。イヤかる。ちと咄したい事が有。屋根越（こし）の天の川で爰からはいはれぬ。ちよつとおりてたもらぬか。文咄したいとは頼た事かへ。此まあそんな物。文廻つて来（き）やんしよ。此いや／＼。段梯子（だんばしご）へおりたらば。中居が見付て酒にせう。ア、どふせうな。ア、コレ／＼幸（さい）愛に九つ梯子。《地ハル》是をふまへておりてたもと。《フシ》小屋根にかければ。文《詞》此梯子は勝手が違ふて。ヲ、こは。どふやら是はあぶない物。此大事ない／＼。あぶないこはいは昔の事。三間（さんげん）づゝまたげても。赤かうやくもいらぬ年（とし）ばい。文あほういはんすな。舟にのつた様でこはいわいな。此道理で舟玉様が見へる。文ヲ、のぞかんすないな。此洞庭（とうてい）の秋の月様をおがみ奉るじや。文イヤモウそんなら下（お）りやせぬぞ。此おりざおろしてやる。文アレ又悪い事を。此やかましい生（なま）娘（むすめ）かなんぞのやうに。《地ハル》逆縁（さかえん）やぐゑん（な）ながらと後（うしろ）より《ハル中》じつと抱しめ《フシ》抱おろし。《詞》なんとそもじは御らふじたか。文アイいゝゑ。此見たである／＼。文アイなんじややら面白（おもしろ）そふな文。此あの上から皆読（みなよ）んだか。文ヲ、くど。此ア身の上の大事とこそは成りにけり。文何（なに）の事じやぞいな。此何の事とはおかる。古（ふる）いがほれた。女房に成つてたもらぬか。文おかんせうそじや。此サうそから出た真（ま）でなければ根がとげぬ。おふといや／＼。文イヤいふまい。此なせ。文お前（まへ）のはうそから出た真（ま）じやない。実（まこと）から出た嘘（うそ）じや。文おかる受（う）出（で）そふ。文エ、。此うそでない証（しやうこ）拠（こ）に。今宵（こよひ）の内に身受（みう）せう。文ムウいやわしには。此間夫（まぼ）が有（あ）なら添（そ）してやる。文そりやマアほんかへ。此侍（しやく）理（り）（めうり）。三日（さんじつ）成（なり）共（とも）困（こま）（か）こゝたらそれからは勝（か）手（て）次第（しだい）。文ハア、嬉（うれ）しうござんすといはしておいて

わらをでの。此いや直（すく）に亭主（ていしゆ）に金渡（かねわた）し。今の間に埒（らち）さそふ。氣遣（きぢ）せずと待つてゐや。文そんなら必（かならず）待つて居るぞへ。此金渡（かねわた）してくる間（ま）。どつちへもいきやるな。女房（にようばう）じやぞ。文夫（お）もたつた三日（さんじつ）。此（こ）それ合（あ）点（てん）。文忝（かたじけ）なござんす。《三下（さんげ）り哥（か）ハル》世（よ）にも《ウ》因果（いんぐわ）な者（もの）なら《ウキン》わしが身（み）じや。《ウ》かはい男（おとこ）に。《ウキン》いくせの思（おも）ひ。《下（くだ）ウ》エ、なんじやいな《ウキン》おかしやんせ《ハル中》忍（しの）びねになくさよちどり。文《地ハル》奥（おく）でうたふも《フシ》身（み）の上（の上）とおかるは。《ノル中ハル》思（し）案（あん）取（と）り々の。政（せい）《地（ち）中（ちゆう）ウ》折（し）に出（い）合（あ）平（へい）右（みぎ）工（く）門（もん）。《詞》妹（い）でないか。文ヤア兄（あに）様（さま）か。《地（ち）ハルウ》恥（ち）しい所（ところ）で逢（あ）ましたと顔（かほ）を隠（かく）せば。政（せい）《詞》苦（くる）（しう）ない。關（かん）東（とう）（く）はんたう（う）より戻（も）りがけ。母（はは）人に逢（あ）てくはしく聞（き）た。夫（お）の為（ため）お主（ぬし）の為（ため）。よく売（う）（う）ら（う）れたでかした／＼。文《地（ち）ハル》そふ思（おも）ふて《上（かみ）》下（くだ）さんすりやわしや《色（いろ）》嬉（うれ）しい。《詞》したがまあ悦（え）んで下（くだ）さんせ。思（おも）ひがけなう今宵（こよひ）受（う）け出（で）さるゝ筈（はず）。政（せい）夫（お）は重（おも）畳（たたみ）（てう）ぢやう。何（なに）人（ひと）のお世（せ）話（わ）で。文お前（まへ）も御（ご）存（ぞん）の大（だい）星（せい）由（ゆ）良（ら）助（すけ）様（さま）のお世（せ）話（わ）で。政（せい）何（なに）しや由（ゆ）良（ら）助（すけ）殿（だん）に受（う）出（で）される。夫（お）は下（くだ）地（ぢ）からの馴染（なじみ）（なし）み）か。文何（なに）のいな。此（こ）中（ちゆう）より二三度（にさんど）酒（さけ）の相（あ）手（て）。夫（お）が有（あ）らば添（そ）してやる。隙（ひま）がほしくば隙（ひま）やると。結構（けつこう）過（か）た身（み）請（まが）い。政（せい）扱（あ）は其（その）方（かた）を。早（はや）の勘（かん）平（へい）が女（によう）房（ばう）と。文イエしらずじやぞへ。親（おや）夫（と）の恥（ち）なれば。明（あ）かして何（なに）の言（い）ませう。政（せい）ムウすりや本（ほん）心（しん）放（はな）埒（らち）者（もの）。お主（ぬし）の怨（あだ）を報（は）（ほう）ずる所（ところ）存（ぞん）はないに極（ごく）つたな。文イエ／＼これ兄（あに）様（さま）。有（あ）るぞへ／＼。高（たか）うはいはれぬ。《地（ち）ハル》コレかふ／＼とさ、やけば。政（せい）《詞》ムウすりや其（その）文（ぶん）を慥（たしか）に見（み）たな。文残（残り）らず読（よ）（よ）ん）だ其（その）跡（あと）で。互（たが）に見（み）合（あ）す顔（かほ）と顔（かほ）。それからしやらつき出（い）してつゐ身（み）請（まが）いの相（あ）談（だん）。政（せい）アノ其（その）文（ぶん）残（残り）らず読（よ）（よ）ん）だ跡（あと）で。文アイナ。政（せい）ムウ。それで聞（き）へた。妹（い）とても遁（に）れぬ命（いのち）。《地（ち）色（いろ）ウ》身（み）共（とも）にくれよと《ハル》抜（ひ）打（うち）にはつしと切（き）れば。文《詞》ちやつと飛（と）のき。コレ兄（あに）様（さま）。わしには何（なに）誤（あや）まり。勘（かん）平（へい）といふ夫（お）も有（あ）。急（いそ）度（ど）（きつ）つと二（に）親（おや）有（あ）からはこな様の儘（まま）にも成（な）るまい。《地（ち）ハル》請（まが）い出（で）されて

親夫トに。《ウ》逢ふと思ふがわしやたのしみ。《ウ》どんな事でも誤あやまらふ。《上》赦ゆるして下んせ赦してと。《ウキン》手を合すれば。《政平右エ門》《上》ぬき身を捨て《中フシ》どうどふし《中ノル》ひたんの。《ハル》涙にくれるが。《詞》可愛かほいや妹何にもしらぬな。親与市兵衛殿は六月廿九日の夜。人に切きられてお果はなされた。《文》ヤアそれはまあ。《政》コリヤまだ悔くひびつくりすな。請こ出され添そはふと思ふ勘平も。腹切はらて死しだはい。《文》《地色ハル上》ヤア／＼それはまあ《ウ》ほんかいの。コレのふ／＼と《ウ》取付て《ステテ中》わつと計はりに泣な沈しづむ。《政》《詞》ヲ、道理／＼。様子咄はなせばながい事。おいたはしいは母者人。言出しては泣。思おもひ出しては泣。娘むすめかるに聞きいたら泣死なにするである。必かなふてくれなのお頼たのみ。いふまいと思へ共。迎むかへぬそちが命。其その訳わけは。忠義ちうぎ一途いちずに凝こりかたまつた由良ノ助殿。勘平が女房にようばうとしらねば請こ出しす義理ぎりもなし。元来色もとよりには猶なほふけらず。見みられた状じやうが一ち大事請こ出し差殺さしころす。思案しあんの底そこと慥たしかに見みへた。よしそふなうても壁かべに耳みみ。外あやまより洩もれても其方そのかたが科か。密書みつしょを覗のぞき見たるが誤あやまり殺ころさにやならぬ。人手てにかきよより我われ手てにかけ。大事だいじを知したる女むすめ妹いもうととて赦ゆるされずと。夫おとこを功こうに連つ判はんの。数かずに入いてお供ともに立たん。《地ハル》小身せうしん者ものの悲かなしさは人に勝かすくれた心底こころを。《ウ》見みせねば数かずには入いられぬ。《上》聞き分わけて命いのちをくれ死してくれ《中》妹いもうとと。事ことを分わたる《ハル》兄あにの詞ことば。《文》《ウ》おかるは始終しじう《上》せき上う。《ウ》便べんりのないは《ウ》身みの代しろを。《ウ》役やくに立たての《ウ》旅立りょだてか。《ウ》暇ひま乞こいとまごひにも《ウ》見みへそな物ものと。《ウ》恨うらみでばかり《ウ》おりました。《ウ》勿体なげないがと様さまは《ウ》非業ひごうの死しでも《ウ》お年としの上うへ。《ウ》勘平殿かんぺいは三十さんじゅうに成なるやならず《ウ》死しるのは《ウ》嘸なげ悲かなしから口惜くしやく《おし》かる。《ウ》逢あたかつたで有あるのに《ウ》なぜ逢あせては下くださんせぬ。《ウ》親夫おとこの《ウ》精進しやうじんをさへ《ウ》し

らぬはわたしが身の因果いんぐわ。《ウ》何なんの生なまておりませう。《ウ》お手にかゝらば嘯か様が《ウ》おまへをお恨うらまされましょ。《ウ》自害じがい《い》した《ウ》其跡そのあとで。《ウ》首くびなりと死骸しがい《し》が《詞》功こう《こ》うに立たつなら功こうにさんせ。《地ハル》さらばでござる兄様あにさまといひつゝかたな《色》取とり上ある。《此》《詞》やれまてしばしと《地ハル》とゞむる人は由良ノ助。《政》《ウ》はつと驚おどろく平右エ門。《文》《上》おかるははなして《ウ》殺ころしてと。《此》《ウ》あせるをおさへて。《詞》《ウ》兄弟共見上あた疑うたがひはれた。兄あにはあづまの供ともを赦ゆるす。妹いもうとはながらへて。未来みらいへの追善しゆぜん《文》《地色ハル》サア其追善あは冥途めいずの供ともと。《此》《ウ》もぎ取とり刀やいばをしつかと《色》持添もつ。《詞》夫おとこ、勘平連判かんぺいには加くはしかど。敵一人たかひも討うたらず。未来みらいで主君しゆきんに言こと訳わけ《いひわけ》有あまじ。其言そのこと訳わけはコリヤ爰こゝにと。《地ハル》ぐつと突つつと。込こみ置おき《たゞみ》の透間すきま《面》《ウ》下したには九太夫肩くわだう《かた》先まぬはれて《ウ》七しち顛てん八はち倒たふしてんばつと。《此》《詞》それ引ひき出だせの《政》《地ウ》下知したより早く椽えん先ま飛とり平右エ門。《ハル》朱しゆ《あけ》に染そん《だ骸》をば無な二に無な三に引ひきずり出だし。《ウ》ヒヤア九太夫めハテよい気味きみと引ひき立たて。《ウ》目通めとりへ投なげ《中》付つければ。《此》《ウ》起おき立たせもせず由良ノ助《ハル》鬚ひげ《たぶさ》を掴つかむと《色》引寄ひきよせ。《詞》獅子しし身み中ちゆう《しんちゆう》の虫むしとは儕しか事こと。我君われきんより高知たかち《かうち》を戴おき。莫大もくだい《ばくたい》の御恩おんを着きながら。敵師直たかひが犬いぬと成なつて。有ある事ことない事ことよう内通うちと《ないつう》ひろいだな。四十しじゅう余人よにんの者もの共ともは。親おやに別わかれ子こにはなれ。一いち生せい《しやう》連添れんぞん《つれそふ》女房にようばうを君傾城きんけいの勤しん《つとめ》をさするも。亡君ぼうきんの怨うらを報はじたさ。寐覚みさめ《ねざめ》にも現まにも。御切腹ごきりばの折をら思おもひ出だして無念むねんの涙なみだ。《地ハル》五臟ござう《ざう》六腑ろふ《ふ》を《フシ》しぼりしぞや。《詞》取とりわけ今宵こよひは殿とのの速夜たひや。口くちにもろ／＼のふ浄じやう《じやう》をいふても。慎つしに慎つしを重おもかかぬる由良ノ助よしかに。よう魚肉ぎよくをつき付つ

たなア。いやといはれずおうといはれぬ胸の苦しき。三代相恩（さうおん）のお主の速夜（たいたい）に。咽を通した其時の心どの様に有ふと思ふ。五体も一度に脳乱（のうらん）し。四十四の骨（ほね）々も碎（くだ）くたくる様に有たはやい《地ハル》ヘエ、獄卒（ごくそつ）め《ウ》魔王（まわう）めと。《上》土に摺（す）り付（つ）ケ《ウ》捻（ねぢ）付（つ）ケて《スエ》無念（むねん）。涙に《中》くれけるが。《詞》コリヤ平右エ門。取前（いぜん）錆刀（さび）を忘（わす）れ置（お）いたは。こいつをばなぶり殺しといふしらせ。命取（いのち）ずと苦痛（くつう）させよ。《政》《地ハル》畏（かしこ）まはれと抜（ひ）きより早く。《ウ》踊（おど）り上（あ）り飛（と）り上（あ）り。切（き）れ共（とも）僅（わずか）一（ひと）つか二（ふた）三（さん）寸（すん）。《ウ》明（あ）き所（ところ）もなしに疵（きず）一（ひと）きず一（ひと）だらけ。《百》《ウ》のた打（う）ち廻（ま）つて。《詞》平右殿。おかる殿。《地色ハル》詫（わ）び一（ひと）してたべと手を合せ。《ウ》以前（いぜん）は足（あ）しむれ也と。《ウ》目（め）にもかけざる寺岡（てらおか）に《フシ中ハル》三（さん）拜（はい）するぞ見（み）ぐるしき。《此》《詞》此（こ）場で殺（ころ）さば言（い）訳（わけ）一（ひと）むつかし。くらひ酔（よ）一（ひと）ふ一（ひと）たていにして。《地ハル》館（くわん）へ連（つ）よと羽織（はおり）一（ひと）打（う）きせ《中》疵（きず）一（ひと）きず一（ひと）の口（くち）。《ハル》信（しん）隠（かく）れ聞（き）たる矢（や）間（ま）千（せん）崎（さ）竹（たけ）森（もり）が。《ウ》障（しやう）子（こ）ぐはらりと《色》引（ひ）き明（あ）け。《三》《詞》由（よ）良（ら）助（すけ）殿（だ）々（々）誤（あや）まり入（い）りましてござります。《此》それ平右エ門。くらひ酔（よ）た其（その）客（きやく）に。加（か）茂（も）一（ひと）かも一（ひと）川（が）で。水（みづ）旨（旨）一（ひと）ざうすい一（ひと）をくらはせい。《政》ハア《此》イケ*

第八段 道行旅路の嫁入り

∴第八道行旅路の嫁入 *L8 《ハルウ》浮世とは。《ウ》たがいひそめて。《中》飛鳥（とび）一（ひと）あすか一（ひと）川（が）。《中》ふちも知行（ちぎやう）も瀬（せ）一（ひと）とかはり。《スエテハル》よるべも浪（なみ）一（ひと）の下（した）《中》人に。結（むす）一（ひと）ぶ塩（しほ）治（あや）まの誤（あや）まりは。恋（こ）のかせ杭（か）一（ひと）く一（ひと）加古川（かこがわ）の。娘（むすめ）小浪（こなみ）が《ウ》言（い）号（ごう）一（ひと）いひなづけ《ウ》ウヤクリ《結納（むすな）一（ひと）たのみ》も。とらず《ウ》其儘（そのまま）にふり捨（す）られし《ハル》物（もの）思（おも）ひ。《長地ウ》母（はは）の思（おも）ひは山科（やまの）一（ひと）しな《ウ》聲（こゑ）一（ひと）むこ《力（ちから）弥（や）を》《ウ》ちからにて《ウ》住家（すま）一（ひと）すみか《へ押（お）して嫁入（よめい）も。《中》世（よ）に有（あ）なしの義理（ぎり）遠慮（えんり）一（ひと）るりよ《ウ》

娼（しやう）つれず乗（の）り物（もの）も。《ウ》やめて親子（おやこ）の《中》二人（ふたり）連（つ）れ。《フシヤクリ》都（みやこ）の。一（ひと）空（そら）に。心（こゝろ）ざす。《ハルフシ》雪（ゆき）のはだへも。《中》さむ空（そら）は。《ウ》キン《寒紅梅（かむこうばい）一（ひと）かんこうばい》の色（いろ）添（そ）ひて。《中》手先（てまへ）覚（おぼ）へず《ウ》こぼへ坂（さか）。《ハツミ》さつた峠（とうげ）に。さしかり見返（みかへ）れば。《上》不二（ふじ）の煙（け）一（ひと）けふり《の》。《サハリウ》空（そら）に消（き）へ《ウ》キン《行衛（ぎやうゑい）もしれぬ《中》思（おも）ひをば。《ナラスハル》晴（はら）す嫁入（よめい）の。《フシ》門（かど）火（ひ）ぞと。いはふて三保（さんぼ）の《ウ》松原（まつはら）に《小ヤクリ》つづく。並（なら）一（ひと）なみ《松街道（まつがじ）一（ひと）かいだう》を《ウ》せましと打（う）つたる《ウ》行烈（ぎやうれつ）一（ひと）ぎやうれつ一（ひと）は。《トル》誰（たれ）としらねど《ウ》一（ひと）浦山（うらやま）し。▲《地ウ》ア、世（よ）が世（よ）なら《色》あのごとく。《ウ》一度（いちど）の晴（はら）と花（はな）《ハル》かざり。《二人》伊達（いたて）一（ひと）をするがの《ウ》府中（ふちう）一（ひと）過（あ）り。《中》ウキン《城下（じやうげ）一（ひと）過（あ）りばきさんじに。《フシ》母（はは）の《ウ》心（こゝろ）もいそ一（ひと）と。▲《中》二世（にせ）の盃（さかづき）一（ひと）さかづき《ウ》濟（すん）一（ひと）で後（ご）。《本フシ》閨（ねや）の《ハル》むつ言（こと）《中》さゝめ言（こと）。《ウ》親（おや）しらず子（こ）しらずと。《ウ》キン《薦（わた）一（ひと）つた》の細（ほそ）道（みち）。もつれ合（あ）い。《フシ》嬉（うれ）しからふと手を引（ひ）けば。《地中》アノ母（はは）様の（やう）差合（さあ）いを《ウ》わきへこかして鞆（たもと）一（ひと）まりこ一（ひと）川（が）。《ウ》うつの山（やま）辺（べ）の現（うつ）にも。《ハル》殿御（だんご）初（はつ）めの《中》新（あたら）しい一（ひと）枕（まくら）。せとの《ウ》染飯（せんべん）一（ひと）そめい一（ひと）《ハル》こはるやら。《ウ》恥（はづ）かしいやら《ウ》嬉（うれ）しいやら《ウ》案（あん）一（ひと）じて胸（むね）も《ウ》大井川（おおいがわ）。《ウ》キン《水（みづ）の流（なが）れと人心（にんしん）。もしや心（こゝろ）はかはらぬか。《中》ハルウ《日（ひ）かげに花（はな）は《ウ》咲（さ）か一（ひと）ぬかと。《中》フシ《いふて嶋田（じま）の《ハル》うさはらし。《二人》ハルフシ《我身（わがみ）の上（うへ）を。かくとだに。《中》人（ひと）しらすかの橋（はし）こへて行（い）くば吉田（きち）や《ハル》赤坂（あかざか）の。まねく《ウ》女（むすめ）の声（こゑ）そるへ。《二人》ハルウ《縁（ゆかり）をむすば、《キン》清水寺（しみずでら）へ《中》参（ま）らんせ。《ハルウ》音羽（ねづ）一（ひと）おとは《の滝（たき）一（ひと）たき》に《トルキン》ざんぶりぎ毎日（まいにち）そふ《ウ》いふておがまんせ《下》そうじやいな。《合（あ）ハルウ》しゝきがんかうがかいれいにうきう。《ウ》合（あ）ウ《かぐら太鼓（たいこ）一（ひと）に《色》ヨイコノ

エイ。《合ハルウキン》こちのひるねを覚（さま）された。《合上》都
とのごにあふてつらさが語りたや《色》ソウトモ／＼。《ハル》もしも
女夫と《下》かゝさま。《ハル》ならば伊勢さんの引（キ）合（セ）。《ナヲスハ
ルフシ》ひなびた哥も。《中》身に取て。よい吉左右（きつさう）に《ウ》
なるみがた。あつたの社《ウフシ》あれかとよ。《中》七里の渡し《ハ
ル》帆（ほ）を上て《中キン》櫓拍子（ろびやうし）揃（そろ）へて《色》ヤツ
シツシ。《ハルキン》楫（かぢ）取音は。《中》鈴虫（すずむし）《ウ》
かいや。《ヒロイ》きり／＼す。鳴（なく）や霜夜と《ウ》詠（よみ）
たるは。さよふけてこそ《ハル》くれ迄と。《ウ》限（かぎ）り有（ル）舟
《ウ》いそがんと《トル》母が走（はし）れば。《合ハル》娘も走（ハ）
クリ《空》の。《ウ》あられに笠覆（おほ）ひ。《ハルフシ》舟路（ぢ）
の《中》友の。跡や先（キ）庄野亀山《ハル》せきとむる。伊勢と吾妻（あ
づま）の《ウ》別れ道。駅路（えきぢ）《多（た）きろ》の鈴（すず）の《ウ》鈴鹿（す
ゝか）こへ。《トルカ》リ《間（ま）の土山》。《合》雨がふる《中ウキ》水口
（みなくち）の葉に。《ハル》いひはやす。《中ウ》石部（いしべ）石
場（いしば）で《ハル》大石や。《ウ》小石ひらふて《ウ》我夫（つま）
と《ウ》撫（な）でつ。さすりつ《ウ》手にすへて。《ウ》やがて大津
や三井寺（みみで）の。《上》禁（ふもと）を越（こ）へて《ウ》山科
（しな）へ程なき。《ウ》里（り）へ。三重《上》へいそぎゆく*

第九段 山科閑居の段

∴第九 *L9 《地中キン》風雅（ふうが）でもなく。《ウ》しやれで
なく。《ハル》しやうことなしの《中》山科（しな）に。《ウ》由良（ゆら）助
が《ハル》住居（ぢ）わびすまゐ。《ウ》祇園（ぎおん）の茶屋にきの
ふから雪の夜明し《中》朝戻り。《ウ》牽頭（たいこ）中居（ちゆうき）に送（おく）
られて《ハル》酒が。ほたへる雪（ゆき）かし《ウ》雪（ゆき）はこけて雪（ゆき）かさされ。

《フシ》仁体（じんたい）捨（す）し遊びなり。《詞》旦那（だんな）申（ま）
那。お座敷（ざしき）の景（けい）（けい）ようござりますお庭（にわ）の藪（やぶ）に雪（ゆき）持（も）
つた所。とんと絵（ゑ）（ゑ）にかいた通（とほ）り。けうといじやないかのふお品（ひん）。
サア此景（このけい）を見て。外（そと）へはどつちへもいきたくはござりますまいがな。へ
ッ朝夕（あさゆふ）に見ればこそ有（ル）住吉（ぢき）の。岸（きし）の向（む）ひの淡路（たんろ）（あはぢ）嶋山（じま）といふ
事（こと）しらぬか。自慢（じまん）の庭（にわ）でも内の酒（さけ）は呑（の）ぬ／＼。エ、通（とほ）らぬや
つ／＼。サア／＼奥（おく）へ／＼《地ウ》奥（おく）はどこにぞお客（きやく）が有（ル）と。《ハル》
先（ま）に立て《中》飛石（とひし）の。《ウ》詞（こと）もしどろ足取（あしと）りも《キンヲクリ》しど
ろに。《中ハル》見（み）ゆる酒機嫌（さかきげん）。《ウ》お戻（も）りそふなと《ウ》
女房（にようばう）のお石（いし）が軽（かろ）う汲（くみ）（くみ）で出る《ウ》茶屋（ちや）の茶（ちや）よりも氣（き）の端香（たんかう）（は
なか）。《ウ》お寒（さむ）（さむ）からふと愒（あ）りんきせぬ詞（こと）の塩（しほ）は
茶（ちや）《フシ》酔（よ）醒（せい）（さ）いさまし。《地ハル》一口呑（の）んで《色》跡打（あと）明（あ）
《詞》エ、奥（おく）無（む）粹（すい）（ぶ）すい）なぞや／＼。折角（せつかく）面白（おもしろ）ふ酔（よ）
ふた酒醒（さけ）せとは。ア、ア、降（ふ）たる雪（ゆき）かな。《文弥詞》いかに余所（あま）よ
そ一のわる達（た）が嘸（ま）愒（あ）気（き）とや見（み）給（たま）ふらん。《地上》それ雪（ゆき）は打綿（う）
に似（に）て飛（と）で中入（ちゆうじゆう）と成（な）《詞》奥（おく）はかゝ様（さま）といへばとつと世帯（よ）
たい）染（しむ）といへり。《地ハル》加賀（か）の二布（ふた）のへお見廻（みまわ）
いの《ナヲス詞》遅（おそ）いは御用（ごよう）捨（す）（よう）しや。伊勢海老（いせえび）
（えび）と盃（さかづき）（さ）かつき。穴（あな）（あな）の稻荷（いなり）の玉垣（たまがき）
は。朱（あか）（あか）ふなければ信（しん）がさめるといふ様な物（もの）かい。ヲイ
これ／＼。こぶら返（かへ）りじや足の指折（ゆび）つた／＼。おつとよし／＼。
《地色ウ》次（つぎ）手（て）にかうじやと《ハル》足先（あし）で。《詞》ア、これほたへ
さしやんすな嗜（た）しなま）しやんせ。さゝが過（あ）るとたはあがない。
《地色ハル》ほんに世話（せわ）でござらふのと《フシ》物（もの）やはらかにあいら
ふ。《地ハル》力（ちから）弥（や）心得（こころえ）奥（おく）より《色》立出（た）出（で）る。《詞》申（ま）
様（さま）は御寐（ごよし）（ごよし）なつたか。《地ウ》是（こゝ）上（あ）られいと指出（し）す親子（おやこ）が所
作（しよさ）を《ハル》塗（ぬ）（ぬ）り分（わ）けても。《ウ》下地（げぢ）は同（おな）し《中》
桐枕（きりまくら）。《ウ》ヲ、ヲ、応（お）は夢現（むら）現（ま）現（ま）現（ま）。《詞》イヤもふ皆（みな）にや

れ。ハイ／＼。そんならば旦那へ宜しう。《地ウ》若旦那ちと《ハ
ル》御出を目遣ひで《フシ》いに際（ぎは）わるう帰りける。《地ウ》
声聞へぬ迄行過させ。由良助《色》枕を上。《詞》ヤア力弥。遊興（ゆ
うけう）に事寄丸めた此雪所存有ての事じやが何と心得たぞ。ハツ雪
と申物は。降（ふる）時には少シの風にもちり。軽い身でござりませう
共。あのごとく一致（いち）して丸まつた時は。嶺（みね）の雪吹に岩
（いわ）をも碎（くだ）く大石同然（どうぜん）。重（おも）いは忠義。
其重い忠義を思ひ丸めた雪も。余（あま）り日数を延（のべ）過して
はと思召（し）ての。イヤ／＼。由良助親子。原郷右衛門など四十七人連判
の人数は。ナ皆主なしの日かげ者。日かげにさへ置（お）げば解（と）けぬ雪。
せく事はないといふ事。爰は日当（あた）り奥の小庭へ入（い）り置（お）け。蛩（は
たる）を集（あつ）め雪を積（つむ）も学者（がくしや）の心長（なが）
き例（たと）え。女共。切戸内から明（あ）けてやりやれ。《地ウ》塚（さかい）への状認
（たま）めん。《詞》飛脚（ひきやく）が来（き）たらばしらせいよ。アイ／＼《地ハル》間
（ま）の切り戸のうち。《中》雪（ゆき）こかし込戸（こま）を《ハル》立（た）つる《ヲクリ》襖（ふ
すま）へ引（ひ）立入（た）にける。《地ウ》人の心の《ウ》奥深（おく）き山科（やま）の隠（ひ）れ家
を。《ウ》尋（たず）ねて爰（こゝ）に《ハル》くる人は。《ウ》加古川本蔵行国（か）が《ウ》
女房となせ。《ウ》道の案内の乗（の）り物をかたへに待（まち）せ《中》只（ただ）一人。《ウ》
刀脇指（たばきさし）《ウ》さすがげに《ウ》行義乱（ぎ）さず。《ハルフシ》
庵（いほり）の戸口。《詞》頼（たの）ませう。／＼といふ声に。《地》襷（たす）
すき）はつして飛（と）いで出る。《ウ》昔（むかし）の奏者（そうしや）今
のりん。《フシ》どうれといふもつかふと成（な）る。《詞》ハツ大星由良助
様お宅は是かな。左様ならば加古川本蔵が女房となせでござります。誠
に其後は打絶（た）えました。ちとお目にかゝりたい様子に付（つ）遥（ひま）
々（は）参（ま）りましたと。伝（つた）へられて下（くだ）されと《地ハル》いひ入（い）さ
せて表（おもて）の方。《フシ》乗（の）り物はへと昇（あ）り（かき）寄（よ）させ。《地
ウ》娘爰（むすめ）へと呼（よ）出（だ）せば。《ウキン》谷（や）の戸明（あ）けて《ウ》鶯（うぐひす）

- 1 -

の梅（う）見付（み）たる《ウ》ほ々笑顔（ゑがほ）《ウヲクリ》まぶかに。着（き
たる）《ハル》帽子（ぼうし）の内。《詞》アノ力弥様のお屋敷（やしき）はもふ
爰（こゝ）へ。《フシ》わしや恥（は）しいと媚（な）まめかし。《地ウ》取（と）ちらす
物片（もの）付（つ）て。《ウ》先（ま）つお通り《ハル》なされませと。《ウ》下女（つた）が伝（つ）
る口上（くわ）に。《詞》駕（かご）の者（もの）皆（みな）帰（か）れ。《地色ウ》御案内（あんない）
頼（たの）ますといふもいそ／＼娘（むすめ）の小浪（こなみ）。《フシ》母（はは）に付（つ）添（そ）ひ座（ま）に直（な）
（なを）れば。《地ハル》お石（いし）しとやかに《色》出（い）出（い）向（む）ひ。《詞》是（こゝ）は
／＼。お二（に）方（か）共（ども）ようそや御出（ごしゅつ）。とくよりお目（め）にもかゝる筈（はず）。お聞（き）及（およ）ひの
今の身（み）の上。《地ハル》お尋（たず）ねに預（ま）りお恥（は）しい。《中詞》あの改（あらた）
まつたお詞。お目（め）にかゝるは今（いま）日（ひ）初（は）じめなれど。先（ま）達（た）つて御子息（ごしよ）しそ
く力（りき）弥（や）殿（だ）に。娘（むすめ）小浪（こなみ）を言（い）ひなづけ一致（いち）したからは。お前（まへ）也（や）わた
しなり。《地色ル》姫（あいや）同（どう）士（し）（とし）御遠慮（ごんりよ）に《色》及（およ）は
ぬ事（こと）。《詞》是（こゝ）は／＼悼（いた）み入（い）る御挨拶（ごあいさつ）。殊（こと）に御用（ごよう）し
げい本（ほん）蔵（ぞう）様の奥方（おくかた）。寒空（さむそら）といひ思（おも）ひがけない御上京（ごじやう）。と
なせ様（さま）はとも有（あ）り小浪（こなみ）御寮（ごりやう）。嘸（さ）都（と）珎（みづ）（めつ）らしからふ。祇
園（ぎをん）清水（しみず）智（ち）恩（おん）院（いん）（ちおんいん）。大（だい）仏（ぶつ）様（さま）御（ご）らうじたか。金（きん）閣（かく）
寺（てら）（きんかくじ）拜（はい）見（けん）（はいけん）あらばよい伝（つた）が有（あ）るぞへと。《地色
ハル》と心置（こころ）なき挨拶（あいさつ）に。《ウ》只（ただ）あい／＼も口（くち）の内。《フ
シ》帽子（ぼうし）まばゆき風情（ふうじやう）なり。《地ハル》となせは行義（ぎやう）《色》
改めて。《詞》今（いま）日（ひ）参（ま）る事（こと）余（あま）の義（ぎ）にあらず。是（こゝ）成（な）る娘（むすめ）小浪（こなみ）言（い）ひな
づけ一致（いち）して後（あと）。御主人（ごしゅじん）塩（しほ）治（ぢ）殿（だ）不（ふ）慮（りよ）の義（ぎ）に付（つ）き。由（ゆ）良（ら）助（すけ）様（さま）。
力（りき）弥（や）殿（だ）。御（ご）在（ざい）所（しよ）もさだかならず。《地ウ》移（うつ）りかはるは世（よ）のな
らひ。《ハル》かはらぬは親（おや）心（こころ）とやかくと《色》聞（き）合（あ）せ。《詞》此（こゝ）山（やま）科（か）
（しな）にござる由（ゆ）承（う）承（り）ました故（ゆゑ）。此（こゝ）方（か）にも時（とき）分（ぶん）（じぶん）の娘（むすめ）早（はや）う
お渡（わた）し申（ま）したさ。近（ちか）カ比（ひ）押（お）付（つ）がましいが。夫（つま）も参（ま）る筈（はず）なれど出（い）仕（しま）に際（ま）
のない身（み）の上。此（こゝ）二（に）タ腰（こし）は夫（つま）が魂（たま）（たま）し。是（こゝ）をさせば則（すなは）ち夫（つま）本（ほん）蔵（ぞう）が
名代（なしろ）（めうだい）と。わたし役（やく）の二人（ふたり）前（まへ）。由（ゆ）良（ら）助（すけ）様（さま）にも御意（ごい）得（え）まし。
祝言（しうげん）させて落（お）付（つ）きたい。《地ウ》幸（さい）けけふは《ハル》日（ひ）がら

もよし。《ウ》御用意《ウ》なされ《中フシ》下さりませと《ハル》相述る。《詞》是は思ひも寄らぬ仰。折悪う夫由良ノ助は他行「たぎやう」。去りながら若宿におりましてお目にかゝり申さふならば。御深切の段千「万」忝「かたじけな」う存じます。言号「いひなづけ」致した時は。故「こ」殿様の御恩に預り。御知行「ちぎやう」頂戴「てうたい」致し罷有故。本蔵様の娘御を貰ませう。然らばくれふと。言「いひ」約束は申たれ共。只今は浪人。人つかひ連もござらぬ内へ。いかに約束なれば連。大身な加古川殿の御息女「そくちよ」。世話に申挑灯に釣鐘「つりがね」。釣合ぬは縁のもと。ハテ結納「たのみ」を遣はしたと申すではなし。どれへ成りと外々へ。御遠慮「ゑんりよ」なう遣はされませと申さるゝでござりませうと。《地ハル》聞てはつとは《中》思ひながら。《詞》アノまあお石様のおつしやる事。いかに卑下なされう連。本蔵と由良ノ助様。身上「しんしやう」が釣「つり」合ぬとな。そんならば申ませう。手前の主人は小身「せうしん」故。家老「からう」を勤「つとむ」る本蔵は五百石。塩治殿は大名。御家老の由良ノ助様は千五百石。すりや本蔵が知行「ちぎやう」とは。千石違ふを合点で言号「いひなづけ」はなされぬか。只今は御浪人。本蔵が知行とは皆違ふてから五百石。イヤ其お詞違ひます。五百石は扱置。一万石違ふても。心と心が釣あへば。大身の娘でも嫁に取まい物でもない。ム、こりや聞所お石様。心と心が釣合ぬとおつしやるは。どの心じやサア聞ふ。主人塩治判官様の御生害「しやうがい」。御短慮「たんりよ」とは言ながら。正直を元とするお心より発「おこり」し事。それに引かへ師直に金銀を以て《ウ》媚「こび」諂「へつら」ふ追従「ついでしやう」武士の禄「ろく」を取本蔵殿と。二君「じくん」に仕へぬ由良ノ助が大事の子に。《地ウ》釣合ぬ女房は持たされぬと。《ハル》聞もあへず《色》膝「ひざ」立直し。《詞》諂「へつら」ひ武士とは誰が事。様子によつては聞すてられぬそこを救「ゆる」すが娘のかはひさ。夫に負「まけ」るは女房の常。《地色ウ》祝言「しうげん」有ふが《ハル》有「ま

いが。《ウ》言号有「ま」からは天下晴ての力弥が《色》女房。《詞》ム、面白い。女房ならば夫トがさる。力弥にかはつて此母かさつた。《地ハル》「と」言放「はな」し。《ウ》心隔の唐紙を《フシ》はたと。引立入にける。《地ハル》娘はわつと泣出し。《ウ》折角「せつかく」思ひ思はれて《ウ》言号した力弥様に。《ウ》逢せてやるとのお詞を便りに思ふて《ウ》きた物を。姑御のどうよくに。《詞》さられる覚はわたしやない。《地ハル》母様どふぞ《ウ》詫言「わびごと」して。《上》祝言、させて下さりませと《スエ》縋「すが」り。歎けば《中》母親は。《ウ》娘の顔を《ハル》つく／＼と。《ウ》打ながめ／＼。《ハル中》親の欲目「よくめ」かしらね共。《ウ》本にそなたの器量《中》なら。《ウ》十人並「なみ」にも《ウ》まさつた娘。《ウ》よい智「むこ」をがたと詮義して言号した《ハル》力弥殿。《ウ》尋できた《ウ》かいもなう。《上》智にしらすず《色》さつたとは。《ハル》義理にも《ウ》いはれぬお石殿。《ウ》姑「しうとめ」去りは《色》心得ぬ。《詞》ム、／＼扱は浪人の身よるべなう筋目を言立。有徳「うとく」な町人の智に成つて。義理も。法も忘れたな。《ナフ》小浪。今いふ通りの男の性根「しやうね」。さつたといふを面当「つらあて」ほしがる所は山々。外へ嫁入りする気はないか。コレ大事の所泣かず共しつかりと返事仕「し」や。《地ハル》コレどふじや。《ウ》／＼と。《ウ》尋る親の気は張弓「はりゆみ」。《ウ》アノ母様の胸欲「とうよく」な事おつしやります。《ウ》国を出る折と、様のおつしやつたは。《中ウ》浪人しても大星力弥。《ウ》行義といひ器量といひ。《ハル》仕合せな智を取つた。《ウ》貞女「ていぢよ」両夫「りやうふ」に今日「まみへ」ず。《サハリウ》譬夫「たとへ」に別れても又の夫トを設「もふけ」なよ。《中ウ》主有「ま」女の不義同前。《ハル》必々寐覚「ねざめ」にも殿御大事を《中》忘るゝな。《ウ》由良ノ助夫婦の《ハル》衆へ孝行「かう／＼」尽し夫婦中。《ウ》睦「むつまじい」連《ウ》あしやらにも。《ウ》恠気「りんき」ばしして《ナラスフシ中》さらるゝな。《地ウ》案「あん」ぜうか連隠さずと《ウ》嬢妊「みもち」

に成つたら《ハル》早速に。《ウ》しらせてくれとおつしやつたを《ウ》わたしやよう覚て居る。《ウ》去れていんで《ウ》とゞ様に《ウ》苦《く》に苦をかけて《ウ》どふいふてどふ言訳《いひわけ》が《ウ》有ふ共。《ハル》力弥様より外に余の殿御。《上》わしやいや／＼と一筋に《フシ》恋を立テぬく心根を。《地ハルサハリ》聞に絶《たへ》兼母親の。《中》涙《チ途》《づ》に突詰《つきつめ》し。《ウ》覚悟《かくご》の刀《ハル》拔《キ放》《はな》せば。《ウ》母親は何事と押しとめられて顔を《中》上。《詞》何事とは曲《きよく》がない。今もそなたがいふ通り一時も早う祝言《しうげん》させ。初《うゐ》孫の顔見たいと。娘に甘《あま》いは爺《てゝ》のならひ。《地ハル》悦んでござる中へまだ祝言もせぬ先《キ》に。《ウ》去れて戻りました逆《ウ》どふ連していなれふぞ。《ウ》といふて先《キ》に合点せにや《中フシノル》仕様も。《ハル》やうもないわいの。《地ハル》殊にそなたは先妻《せんさい》の子。《ウ》わしとはなさぬ中じや故およそにしたかと思はれては。《ウ》どふも生《キ》ては《ウ》居られぬ義理。《ウ》此通《リ》を死《シ》た跡で《ウ》爺御《てゝご》へ言訳《色》してたもや。《詞》アノ勿体《もつたい》ない事おつしやります。殿御に嫌《きら》はれわたしこそ死《ス》べき筈。《地ハル》生《キ》てお世話《せわ》に成《ル》上に苦《く》を見せまする《ウ》ふ孝《かう》者。《ウ》母様の手にかけて《ウ》わたしを殺して下さりませ。《ウ》去られても殿御の内《ウ》愛で死れば本《望》じや。《ウ》早う殺して《色》下さりませ。《詞》ヲゝよよいやつたでかしやつた。そなた計殺しはせぬ。此母も三《途》《づ》の友《とも》。そなたをおれが手にかけて。母も追《ツ》跡から行く。《地ハル》覚悟はよいかと立派《りつぱ》にも《ハル中ノル》涙。とゞめて立かゝり。《詞》コレ小浪。アレあれを聞《き》きや。表《テ》に虚無僧《こもそう》の尺八。《つる》の巢籠《すごもり》。《地ウ》鳥類《てうるい》でさへ子を思ふに《ハル》科《とが》もない《ウ》子を手にかけるは。《上》因果と《ウ》因果の寄《合》と。《ウ》思へば足も《キン》立兼て。《中》ふるふ拳《こぶし》を《ハル》漸《やう／＼》に。《ウ》ふ

り上る又《やいば》の下。尋常《じんじやう》に座をしめ手を合せ。《詞》なむあみだ仏と。《地ウ》唱《となふ》る中《チ》より《ハル》御無用と。《ウ》声かけられて思はずも。《ウ》たるみし拳《こぶし》尺八も《フシ》俱に。ひつそとしづまりしが。《詞》ヲゝそふじや。今御無用ととゞめたは。虚無僧《こもそう》の尺八よな。助《ケ》たいが山々で。無用といふに気おくれし。未練《みれん》なと笑はれな。《地色ハル》娘覚悟《かくご》はよいかやと又ふり上る《ウ》又吹出す。《ウ》とたんの拍子《ひやうし》に又御無用。《詞》ムゝ又御無用と止《とゞめ》たは。修行者《しゆぎやうじや》の手の内か。ふり上た手の中《チ》か。イヤお刀の手の中御無用。駈力弥に祝言《しうげん》させう。エ、そふいふ声はお石様。《地ハル》そりや真実《しんじつ》か誠かと尋る襖《ふすま》の内よりも。《中ウ》タイ《あひに相生》《あいおい》の。松こそめでたかりけれと。《地ウ》祝義の小謡《こうたひ》《ウ》白《ラ》木の小四方《こしほう》。《フシ》目八分《に携》《たつさへ》出。《詞》義理有《ル》中の一人娘。殺さふと辻思ひ詰たとなせ様の心《底》。小浪殿の貞女。志《こころし》がいとをしきさせにくい祝言さす其かはり。世の常《つね》ならぬ嫁の盃。《地色ハル》請取《ル》は此三方。《フシ》御用意《ようゐ》あらばと指置《ケ》ば。《フシ地色ウ》少《シ》は休《やすま》つて《ハル》拔《キ》たる刀《色》鞘《さや》に納め。《詞》世の常ならぬ盃《キ》とは。引《キ》出物の御所望《しよもう》ならん。此《ニ》腰は夫《ト》が重代《ぢうだい》。刀は正宗。指添《さしぞへ》は浪の平《ひら》行安。家にも身にもかへぬ重宝《ちやうほう》。《地ハル》是を引《キ》出と皆迄《色》言さず。《詞》浪人と侮《あなどつ》て。価《あたひ》の高い《ニ》腰。まさかの時に売《リ》払《はら》へといはぬ計の響引《キ》出。御所望申《ス》は是ではない。ムゝそんなら何が御所望ぞ。此三方へは加古川本蔵殿の。お首を乗《セ》て貰《ひ》たい。エ、そりや又なげな。御主人塩治判官様。高師直にお恨有て。鎌倉殿でト刀に切かけ給ふ。其時こなたの夫加古川本蔵。其座に有《ツ》て抱留《いたきとめ》。殿を支《た》計《ツ》に御本望も遂《とげ》られず。敵は漸

「やう／＼」薄手計り。殿はやみ／＼御切ッ腹。口へこそ出し給はね。其時の御無念は。本蔵殿に憎しみがかゝるまいか。有まいか。家来の身として其加古川が娘。あんかんと女房に持様な力弥じやと。思ふての祝言ならば。此三方へ本蔵殿のしらが首。いやと有ればどなたでも。首を並「ならべ」る尉「せう」と姫「うば」。それ見た上で盃させう。サ、サアいやか。《地ハル》応かの返答「へんたう」をと。《ウ》尖「する」とき詞の《ウ》理屈詰「りくつづめ」。《ウ》親子ははつと《フシ中ハル》指喜「さしうつむき」途方「とほう」に。くれし折からに。《詞》加古川本蔵が首進「しん」上申。お受取なされよと。《地ウ》表「に扣「ひかへ」し薦「こも」僧の。《ハル》笠脱「ぬぎ」捨てしつ／＼と《ウ》内へはいるは。《詞》ヤアお前はと様。本蔵殿。《地色ハル》爰へどふして此形「なり」は。《ウ》合点がいかぬこりやどふじやと咎「とがむ」る女房。《詞》ヤアさは／＼と見ぐるしい。始終「しじう」の子細皆聞た。そち達「ち」にしらす爰へ来た様子は追ッて。先ッだまれ。其元トが由良、助殿御内証お石殿よな。今日の時宣「しぎ」かくあらんと思ひ。妻子「さいし」にもしらせず。様子を窺ふ加古川本蔵。案「あん」に違「たが」はず拙ッ者が首。髻引「き」出にほしいとな。ハ、ハ、ハ、ハ。いやはやそりや侍「い」のいふ事。主人「しん」の怨を報はんといふ所存「しよぞん」もなく。遊興「ゆうけう」に耽「ふけ」り大酒に性根「しやうね」を乱し。放埒成「ほうちやう」日本「に」のあほうの鏡「かざみ」。蛙「かゝいる」の子は蛙に成。親に劣「おと」ぬ力弥めが大だはけ。うるたへ武士のなまくららはがね。此本蔵が首は切れぬ。馬鹿尽すなど踏碎「ふみくだ」く。《地色ウ》破「われ」三方のふち放「はな」れ。《ハル》こつちから髻に《ウ》取「ぬちよこざいな女めと《色》言せも果ず。《詞》ヤア過言「くはごん」なぞ本蔵殿。浪人の鏢「さび」刀切れるか切れぬか塩梅「あんばい」見せう。不詳「ふしやう」ながら由良、助が女房。《地ハル》望む相「手じやサア勝負「しやうぶ」。《ウ》／＼と《中》裾「すそ」引「上」上。《ウ》長押「ながし」にかけたる鏢「やり」追ッ取突「つ」かゝらん

ず《ハル》其気色「けしき」。《ウ》是は短気「たんき」なマア待ッてと《ウ》とゞめ隔「へだつ」る《色》女房娘。《詞》邪广「じやま」ひろぐなとあらけなく。右「キ」と左「リ」へ引退る。間「い」もあらせず突「つき」かくる。鏢のしほ首引ッ掴「つかみ」。もぢつて払「はら」へば身を背「そむ」け。諸足「もろあし」ぬはんとひらめかす。はむねをけつて蹴上「け」ば。拳「こぶし」放「はな」れて取落す。《地色ウ》鏢奪「うば」はれじと走リ寄。腰際「こしぎは」帯「に」際「ハル》引ッ掴「つかみ」。どぶど《ウ》打付「うつけ」動かせず。膝「ひざ」にひつ敷「強氣「がうき」の《色》本蔵。《ウ》しかれてお石が《ウ》無念の《ハル》齒「は」がみ。《ウ》親子ははあ／＼《フシ》あやぶむ中へ。《地ハル》かけ出る大星力弥。《ウ》捨たる鏢を取「手」も見せず本蔵が。《ウ》馬手「めて」のあばら《ウ》弓「手」へ通れと突「つき」通す。《ウ》うんと計にかつばとふす。《ウ》コハ情なやと母娘《スエ》取付。歎くに《ウ》目もかけず。《ウ》とゞめさゝんと《色》取直「なを」す。《詞》ヤア待「力」弥早まるなど。《地ハル》鏢引「とめ」て由良、助《色》手負「おひ」に向ひ。《詞》一「別」以来「来」珞「めづ」らしし本蔵殿。御計略「けいりやく」の念願とゞき。髻力弥が手にかゝつて。嚙本「めづ」でござらふのと。《地ウ》星をさいたる《ハル》大星が。《ウ》詞に本蔵目を《中》見開「ひら」き。《詞》主人の鬱憤「うつつん」を晴さんと此程の心づかひ。遊所の出合に気をゆるませ。従党「とどう」の人数は揃「そろ」ひつらん。思へば貴殿「きでん」の身の上は。本蔵が身に有べき筈。当春が岡造宮「みやう」の砌。主人桃井「もりのゐ」若狭助。高師直に恥しめられ。以「テ」の外憤「いきとを」り。某を密「ひそか」に召「サ」れ。まつかう／＼の物語。明日御殿にて出ッくはせ。一「刀」に討「チ」留「る」と思ひ詰「つめ」たる御顔色。《地ウ》とめてもとまらぬ《ハル》若氣「わかげ」の《色》短慮「たんりよ」。《詞》小身「せうしん」故に師直に。賄賂「まいない」金を根に持ッて。恥しめたと知つたる故。主人「しん」にしらせず相応「あうおう」の金銀衣服「あふくたい」の物。師直へ持参「ちさん」して。心に染「そま」ぬ詔「へつら」ひも主人を大事と存るから。賄賂課「まいないおほ」せあつちから誤ッて出た故

に。切ルに切レれぬ拍子ぬけ。主人シが恨もさらりと晴はれ。《地ハル》相イ手
かはつて塩治殿の。《上》難シ義となつたは則チ《中》其日。《詞》相イ手
死ずば切ツ腹にも及ぶまじと。抱とめたは思ひ過す《すこ》した本蔵が。
《地ハル》一生一しやうの誤りは娘が難シ義と《上》しらがの此首。
《ウ中フシ》智殿に。進一しんぜたさ。《詞》女房娘を先キへ登一
ぼし。媚一こび詔一へつひしを身の科とがにお暇いとまを願ふてな。道を
かへてそち達チより二日前に京着ちやく。若カい折リの遊芸ゆうげ「ゆうけい」が益一や
く「にたつた四日の内。こなたの所存しよせんを見ぬいた本蔵。手にかゝれば
恨を晴はれ。約束やくそくの通リ此娘。《地ハル》力弥りきに添そせて下さらば《ウ》未
永劫えいけつ「みらいゑうごう」御恩おんは忘れぬ。《詞》コレ手を合あして頼入。
《地ハル》忠義ちゆうぎにならでは捨すぬ命。《上》子故こに捨する親心せしん推量すいりやう有レ由良殿
といふも涙なみだにむせ返かへれば。《ウ》妻や娘は《ウ》有レにもあられず。《ウ》
本ンにかうとは露つゆしらず死しおくれた《ウ》計はかりに。《ウ》お命捨するはあ
んまりな。《ウ》冥加めうがの程ほどが《ウ》恐おそろしい。《ウ》赦ゆるして下され父上と《スエ》かつぱとふして。《中》泣なきけぶ。《地ハル》
親子が心思しんしひやり。《ウ》大星親子三人さんも。《フシ》俱ともにしほれて居た
りしが。《地ハル色》ヤア／＼本蔵殿。《詞》君きみ子こは其罪つみを悪にくに
んで其人ひとを悪くまずといへば。縁ゆかり「ゑん」は縁恨ゆかりは恨にくと。格別かくべつの沙汰さたも
有レべきにと嘸な恨なに思はれん。が所詮しよせん「しよせん」此世このよを去る人。底意そこい「そ
こい」を明あけて見みせ申まさんと。《地色ウ》未前みぜん「みせん」を察さつ「さつ」
して奥庭おくにわ「おくには」の《ハル》障子しょうじさらりと《色》引ひ明あければ。《ウ》
雪ゆきを束たば「つかね」て石塔いしだつ「せきたう」の《ウ》五輪ごりん「りん」の形かた
ちを《ハル》「二つ迄。《ウ》造つく「つくり」立たしは大星が。《フシ》成
行果りょうかを頭あたまはせり《地色》となせは《色》さかしく。《詞ノリ》ム、御
主人おんしゆじんの怨あたまを討うて後あと。二君にきみに仕つかへず消きゆるといふお心のあの雪。
力弥殿りきでんも其心こころで娘むすめを去すたのどうよくは。御おん便余びんあま「あま」つてお石様。
恨うらみだがわしや悲かなしい。となせ様のおつしやる事。玉椿たまつばき「つばき」の八
千代やちやう迄いた共祝ともいふ「いは」はれず。御家おんけに成な嫁取よめとりた。《地上》此こ様なめでた

い《色》悲かなしい。《フシ》事ことはない。《詞ノリ》かういふ事がいやさに。
むごうつらういふたのが。嘸な憎にく「にく」かつたでござんしよなふ。イ、
エイナ。わたしこそ腹立はらだま。町人ちやうじんの智ちに成なつて義理ぎりも法ほう「ほう」も
忘わす「わす」れたかといふたのが。恥はづしいやら悲かなしいやらどふも顔かほが上あ
れぬお石様。となせ様。氏うぢ「うぢ」も器量きりやうも勝まさ「まさ」れた子何ことして
此こ様に。《地色ハル》果報くわくわう「くわくわう」拙つた「つたな」い《上》生なれやと
《フシハル中》声こゑも。涙なみだに《ハル》せき上ある。《地ハル》本蔵ほんぞうあつき涙
をおさへ。《ウ色》ハウア、嬉うれしや本蔵ほんぞうや。《詞》呉王ごわう「ごわう」を諫
「いさ」めて誅ちゆう「ちゆう」せられ。辱はづかしめ「はづかしめ」を笑わらひし呉子胥ごこ
「しよ」が忠義ちゆうぎは取とりに足あ「たら」ず。忠臣ちゆうしんの鑑かざみ「かざみ」とは唐土たうど
「こし」の予讓よじやう「よじやう」。日本の大星。昔むかしより今いまに至いたる迄。唐たうと日
本ほんにたつた二人ふたり。《地色ウ》其一人ひとりを《ハル》親せに持もつ。《ウ》力りき弥
が妻つまに成なつたるは。女御にようご「にようご」更衣かうゐ「かうゐ」に備そなへはる
より。《上》百倍ひゃくばい「はい」勝まさ「まさ」つてそちが身みは《ウ》武士ぶしの娘むすめ
《色》手柄てしやう「がら」者もの。《ハル》手柄てしやうな娘むすめが智殿ちでんへ。《中》お引ひの目録
「もくろく」進しん「しん」上うへと《ウ》懷くわい中ちゆうより《ハル》取と出すを。《ウ》
力弥取りきとりつて押お戴いた披ひら「ひら」き見みれば《色》コハいかに。《ウ》目録もくろく
ならぬ師直しぢくが《ウ》屋敷やしきの案内あんない「ちや」に。《ウ》玄関げんかん「けんくはん」長ちやう
屋侍ちやうしやく部屋べいつ。《ウ》水みづ門物置かどもの柴しば「しば」部屋べいつ迄《キン》絵図えず「ゑづ」
にくはしく《色》書か付けたり。《ハル》由良ゆら助すけはつと《色》押お戴いた。《詞》
へツエ有難ありがた「ありがた」し／＼。従党じゆうたう「とどう」の人数にんすうは揃そろへ共。敵地
の案内あんない知しる故発足こくはつそく「ほつそく」も延引えんいん「ゑんいん」せり。此絵図こゝ
そは孫呉そんご「そんご」が秘書ひしよ「ひしよ」。我わが為ための六韜りくどう「りくどう」三略
「りやく」。《地色ウ》兼あて夜討よんちゆうと定さだめたれば。《ウ》継梯子つぎはしにて塀へいを越
《ウ》忍しのび入いには椽側えんがはの。《ウ》雨戸あまどはつせば《ハル》直すぐに
居間いま。《ウ》爰こゝをしきつて《ウ》かう攻せめ「せめ」てと《フシ》親せ子が悦よろこ
び。《地ウ》手負ておひ「おひ」ながらも《ハル色》ぬからぬ本蔵。《詞ノリ》
イヤ／＼夫おつとは僻言ひくごん「ひごん」ならん。用心しんしん敵てき「きび」しき高たか師直しぢく。障子

襖（ふすま）は皆尻（しり）ぎし。雨戸に合栓（あいせん）合（あ）枢（くろく）。こぢてははづれずかけやにて。こぼたば音（ね）して用意（ようい）せんかそれいかゞ。《地ウ》ヲ、夫（つま）にこそ《色》術（てだて）あれ。《詞ノリ》凝（こつ）ては思案（しあん）にあたはずと遊所（ゆうしよ）より（ゆうしよ）よりの帰るさ。思ひ寄（よ）つたる前裁（せんざい）の雪持（ゆきぢ）竹。雨戸をはずす我（わが）工夫（くふう）《地ハルウ》仕様を愛（あい）にて《ウ》見（み）せ申（ま）さんと《ヲクリ中》庭（にわ）に。折（を）しも雪（ゆき）ふかく《ウ》さしにも強（つよ）き《ウ》大竹（おほたけ）も《トル》雪（ゆき）の重（おも）さに。ひいはりと《ウ》しはりし竹（たけ）を。引（ひ）き廻（まわ）して《ウ》鴨居（かみ）にはめ。《中キン》雪（ゆき）にたはむは《色》弓（ゆみ）同然（どうぜん）。《詞ノリ》此（こ）ごとく弓（ゆみ）を拵（こしら）へ張（は）り。鴨居（かみ）と敷（し）居（い）にはめ置（お）きて。一（いち）度（ど）に切（き）て放（は）なつ時は。《地色ハル》まつ此（こ）様（さま）にと積（つも）つたる《ウ》枝打（えぢ）はらへば《ウ中キン》雪（ゆき）ちつて。のびるは直成（ちか）ル《ハル》竹（たけ）の力（ちから）。《ウ》鴨居（かみ）たはんでみぞはづれ。《ウ》障子（しやうし）しやうし）残（のこ）らずばた／＼。《ウ》本蔵（ほんぞう）苦（くる）しき打（うち）忘れハ、ア《色》したり／＼。《詞》計略（けいりやく）といひ義心（ぎしん）といひ。か程（ほど）の家来（けらい）をたながら了（りやく）簡（かん）（れう）けんも有（あ）るべきに。《地色ハル》あさきたくみの塩治殿（しんぢてん）。《ウ》口（くち）おしき行跡（ぎやく）（ふるまひ）やと。《ウ》悔（くわい）を聞（き）に御主人（ごしゆじん）の御短慮（ごたんりょ）（たんりよ）成（な）る《上》御仕業（ごしぎやう）（しわざ）。《ウ》今（いま）の忠義（ちうぎ）を戦場（せんじやう）（せんしやう）のお馬先（うまざき）にて《ウ》尽（つく）さばと。《ウ》思（おも）へば無念（むねん）に閉（とぢ）ふさがる。《ウ》胸（むね）は七重（しちじゆう）の《フシ》門（かど）の戸（かど）を《中ハル》洩（も）るるは。《ハル》涙（なみだ）計（けい）り也。《地ハル》力（ちから）弥（や）はしづ／＼おり立て父（ちち）が前に《色》手（て）をつかへ。《詞》本蔵殿（ほんぞうてん）の寸志（すんし）により。敵地（てきぢ）の案内（あんない）知（し）たる上（うへ）は。泉州堺（せんしゅうさかい）の天河屋儀（てんがゐ）平方（へいほう）へも通達（つうたつ）（つうだつ）し。荷物（にもつ）の工面（くめん）（くめん）仕（し）らんと聞（き）もあへず何（なに）さ／＼。山科（やまの）に有（あ）る事（こと）隠（かく）れなき由（よし）良（よ）助（すけ）。人（ひと）数集（かずじゆう）（あつ）めは人（ひと）目（め）有（あ）る。一（いち）つ堺（さかい）へ下（くだ）つて後（あと）あれから直（ちか）に発足（はつそく）（はつそく）せん。其方（そのかた）は母嫁（ははよめ）となせ殿諸（てんしよ）共に。跡（あと）の片（かた）付（つ）き諸事（しよじ）万（ま）事（じ）何（なに）もかも。心（こゝろ）残（のこ）りのなき様に。ナ。ナ。コリヤ《地ウ》あすの夜舟（よふね）に下（くだ）るべし。《ウ》我（わが）は幸（さい）本蔵殿（ほんぞうてん）の忍（しの）び姿（すがた）を《ノル》我（わが）姿（すがた）と。《ウ中》けさ打（うち）かけて編（あみ）笠（かさ）に。《ウ》恩（おん）を戴（おん）（いた）く報謝（ほうしゃ）

- 1 -

（ほうしや）がへし未来（みらい）の迷（まよ）ひ晴（はら）さん為（な）り。《詞》今宵（こよひ）一（いち）夜（や）は嫁御寮（よめごしやく）（りやう）へ。舅（いもうと）が情（なさけ）のれんぼ《地色ハル》流（なが）し。《ウ》哥口（かこう）しめして立（た）出（で）れば。《ウ》兼（か）て覚悟（かくご）の《ウ》お石（いし）が歎（なげ）き。《上》御本（ごほん）望（ぞら）をと《ウ》計（けい）りにて名残惜（なごりおし）（おし）さの《ウ》山（やま）々（々）をいはぬ心の《フシ》いぢらしさ。《地中ハル》手負（ておひ）（おひ）は今（いま）を知（し）死（し）期（き）（ちし）ご時（とき）。《ウ》と様（さま）申（ま）しと様（さま）とよべど。《ハル》こたへぬだんまつま。《ウ》親子（おやこ）の縁（ゆかり）も《ウ》玉（たま）の緒（いと）（を）も切（き）て《中》一（いち）世（よ）の。《フシカ、リ》うき別（わか）れ《ハル》わつと泣（な）く母泣（ははな）娘（むすめ）。《ウ》俱（とも）に死骸（しがい）（しがい）に向（む）ひ地の。《ウ》回向（くわう）（ゑんかう）一念（いっぺん）は恋（こゝろ）無常（むじやう）（むじやう）。《ウ》出（で）行（ぎやう）足（あし）も立（た）まり。《合上》六（む）字（じ）の御（ご）（み）名（な）を笛（ふえ）の音（ね）に。《詞》なむあみだ仏（ぶつ）。《地上ウ》なむあみだ是（これ）や《ウ》尺八（しゃくはち）ぼんのふの《ハル》枕（まくら）ならぶる追善供養（しぜんくわう）（くわう）（ねや）の契（ちぎ）りは一（いち）夜（や）ぎり心（こゝろ）。《中上》残（のこ）して。《三重上》立（た）出（で）る *

第十段 天河屋の段

第十 * L10 《地ハル》津（つ）の国（くに）と和泉河内（わいせんがわ）（いつ）みかはちを引（ひ）受（う）けて。《ウ》余（あま）所（ところ）（よそ）の国（くに）舟（ふね）よせる三（さん）国（くに）の《ウ》大湊（おほみなと）（みなと）もなき。《ウ》堺（さかい）といふて人の氣（き）も《ウ》賢（さかし）（さかし）き町（まち）に《中》疵（きず）（きず）もなき。《ウ》天河屋（てんがゐ）の義平（ぎへい）進（しん）金（かね）から金（かね）を《ウ》設溜（せち溜）（まふ）けため。《ハル》見（み）かけは軽（かろ）く内証（ないしやう）（ないしやう）は重（おも）い暮（くらし）に《ウ》重荷（じゆうか）（おも）にをば。《ウ》手（て）づから見（み）世（よ）でしめく／＼大船（おほぶね）の《中》船頭（せんとう）（せんとう）。《詞》是（こゝろ）でうど七竿（しちさん）（さほ）。《地ハル》請（こゝろ）取（と）りましたと指荷（さしかり）（にな）ひ。《ウ》行（い）も黄昏（わうこん）（たそ）かれ亭主（ていしゆ）（ていしゆ）は《中》ほつと。《ウ》日和（ひより）（よ）もよしよい出船（いしづ）と。《ハル》いひつゝたばこきせる筒（つづ）と。《フシ》すい付（すいづ）にこそ入（い）りけれ。《地中》家の世継（よつぎ）は《ウ》今（いま）年（ねん）（こと）し四（よ）つもりは十九（じゅう）の丸額（まるがく）（びたい）。《ハル》親方（おやかた）よりも我（わが）遊（あそ）び。《詞》

夫は重畳。イヤ重畳でござらぬ。手前も国元トに居た時は。斧(おの)九太夫殿から扶持も貰ひ相応の身代。今は一チ僕さへ召使はぬ所へ。さしてもない病気を養生さしてくれよと指越されたは。子細こそあらん。ガ夫はとも有。生若かい女ふ塚が有ては貴殿も立ッす。身共も皺腹でも切ねばならぬ。所て一つの相談。先世間は隙やり分。暇の状をおこしておいて。ハテ何時でも爰の勝ッ手に。呼戻す迄の事。たつた一ト筆ついで下されと。《地ハル》軽ういふのも物工。《ウ》一チ物(もつ)有と知りながら。《ウ》いやといはゞ女房を直ッに戻さん戻りては。《ウ》頼まれた人々へ詞も立ッずと取ッつ置ッ思案する程《詞》いやかどふじやふ得心なら此方にも。片時置カれず戻すからは此了竹もにじり込。へたばつて俱に攪いやか応かの返答(へんたう)と。《地ウ》込付ッられて道(みち)の義平。《ウ》工に乗ルが口惜(おし)やと。《ウ》思へどこちらの一(一)大事《ハル》見出されてはと《中》かけ硯(すざり)。《ウ》取ッて引寄(せ)さら／＼と。《フシ》書(し)認め。《詞》是やるからは了竹殿親でなし子でなし。重て足踏お仕やんな。底工有暇(いとま)の状。弱身をくふてやるが残念。持ッていきやれと投付ッれば。《地ハル》手早く取ッて《色》懐中し。《詞》ヲ、よい推量。聞ッば此間より浪人共が入込(ひ)そめくより。そのめにとへ共しらぬとぬかす。何仕出そふも知ぬ。娘を添して置ッが気づかひ。幸(い)去(れ)歴(れ)き々から貰(も)かけられ。去(り)状取(と)直ッに嫁入(い)さする相談。一(い)ばいまいつて重畳。ホウ警(か)去(り)状なき迎(むか)も子適(こ)なしたる夫トを捨。外(か)へ嫁入(い)する性根(しやね)なら心は残(た)らぬ勝ッ手。ヲ、勝手にするは親のこうけ。今宵(こよひ)の内に嫁(よ)らす。ヤア細言(こまご)はかずと早帰(はや)れと。《地ウ》罽(か)拵(づ)で《ハル》門(と)口(く)より。《ウ》外(と)へ蹴(け)出して跡(あと)びつしやり。《ウ》ほう／＼起(お)きて《詞》コリヤ義平。なんぼ拵(づ)でほり出して。嫁(よ)らす先(ま)から仕(し)拵(づ)そろへ金。温(あ)た／＼まつて蹴(け)られたりや。どふやら疝(せん)気が直(な)を。つたと。《地ハル》口は達(た)者(者)に足腰(あしこ)を撫(な)て。つさすりつ迹(あと)ほへに。《ヲ

クリ》つぶやき／＼立帰る。《地色ウ》月の曇(くもり)にかけ隠(かく)す《ウ》隣家(りんか)も《ハル》寐(ね)入(れ)亥(い)の刻(こく)過(こ)ぎ。《ウ》此家(こ)をめがけて捕(と)り手(て)の人数(にんず)《ウ》十(じ)手(て)早(はや)繩(な)《中》腰挑(こし)灯(とう)一(ひ)かげを隠(かく)して窺(うかが)ひ。《ウ》犬(いぬ)とおぼしき家来(か)を招(ま)ねき。《ウ》耳(みみ)打(う)すれば指(さ)心得(こころ)得(え)《ハル中》門(と)の戸(と)せはしく《中》打(う)た／＼。《色》誰(た)じや。《ハル》及(およ)びごし。《詞》イヤ宵(よ)にきた大舟(おほいぶね)の船頭(せんとう)でござる。舟賃(ふね)ちん(ちん)の算用(ざんよう)が違(ちが)ふた。ちよつと明(あ)けて下(くだ)され。ハテ仰(おほ)山(やま)な。纒(むす)な事(こと)であろあす来た(きた)／＼。イヤ今(いま)夜(よ)うける舟(ふね)。仕切(し)て貰(もら)はにや出(い)されませぬと。《地色ウ》いふもこは高近(たかね)所の聞(き)へと。《ウ》義平(ぎへい)は立出(た)出(い)何(なに)心(こ)なく《ハル》門(と)の戸(と)を。《ウ》明(あ)ると其儘(そのまま)捕(と)りた。《色》動(うご)くな上意(じやうい)と追取(お)り。《ウ》コハ何故(なに)と四方(よっぺ)八方(はつぱう)。《ウ》眼(まなこ)を配(く)ばれば《ハル》捕手(と)りの《色》両(りやう)人(にん)。《詞》ヤア何故(なに)とは横道(わやうだう)者(者)。儕(し)塩(し)治(ぢ)判官(はんくわん)が家来(か)大星(おほほし)由良(ゆら)助(すけ)に頼(たの)れ。武具(ぶぐ)馬具(ばぐ)を買(か)ひ調(てい)へ大廻(おほまわ)しにて鎌倉(かまくら)へ遣(や)はす条(じょう)。急(い)召(め)捕(と)り拷問(ごうもん)せよとの御上意(ごじやうい)。遁(に)れね所(ところ)じや腕廻(うでまわ)せ。是(こ)は思(おも)ひも寄(よ)らぬお咎(とが)。左様(さやう)の覺(さ)聊(ちやう)なし。《地色ウ》定(さだ)て夫(お)は人(ひと)違(ちが)へと《ハル》いはせも立(た)てず。《詞》ヤアぬかすまい。争(ま)はらそはれぬ証(しやう)拠(こ)有(あ)り。ソレ家来(か)共(ども)。《地色ハル》はつと心得(こころ)持(も)て来る(くる)は。《ウ》宵(よ)一(よ)ひに積(た)つた。《中》堯筵(じやうぜん)荷(に)の長持(ながもち)。《ウ》見るより義平(ぎへい)は心(こ)も空(くう)。《ウ》ソレ動(うご)かすなと四方(よっぺ)の《中》十(じ)手(て)。《ウ》其間(そのま)に荷物(にもの)を切解(きげ)一(い)ほどき。《ウ》長持(ながもち)明(あ)くと《ハル》する所(ところ)を。《ウ》飛(と)か／＼つて下(くだ)部(ぶ)を蹴(け)退(ひ)き。《ウ》蓋(ふた)の上(う)にどつかと《色》すはり。《詞》ヤア俺(おれ)忽(ま)ち千(ち)万(まん)。此(こ)長(なが)持(もち)の内に入(い)置(お)いたは。去(れ)大名(だいめい)の奥方(おくかた)より。お詔(あつら)へのお手道具(て道具)。お具足櫃(ぐくひ)の笑(わ)ひ本(ほん)。笑(わ)ひ道具(道具)の注文(注文)其名(そのな)を記(しる)し置(お)いたれば。明(あ)げさしては歴(れ)き々(き)のお家(お)のお名(な)の出(い)る事(こと)。御覽(ごらん)有(あ)ってはいづれもお身(み)の上(う)にもか／＼りませうぞ。ヤア弥(や)胡(こ)乱(らん)者(者)。中(な)々(々)大(お)抵(たい)一(い)では白(しろ)状(じやう)致(ぢ)すまい。ソレ申(ま)合せた通(と)。《地色ウ》合(あ)点(てん)でござると《ハル》一(い)ト間(ま)へかけ入(い)る。《ウ》一(い)子(こ)よし松(まつ)を《色》引(ひ)ッ立(た)出(い)る。《詞》サア義平(ぎへい)。

長持の内はとも有^り。塩治浪人一流（とう）に堅^{かた}まり。師直を討^う密事^{みつじ}の段々。儕^し能^にしつ^つらん。有^あやうにいへばよし。いはぬと忽^{たちまち}駈^かれが身の上。《地色ウ》コリヤ是を見よと《ハル》抜^ひ刀。稚^{わか}（おきな）き咽^{のど}に指付^{さし}られ。《ウ》はつとは思へど色も《色》変^かへん^んぜず。《詞》ハハ、女^{むすめ}童^{わらわ}を責^せる様に。人質^{ひとかたぎ}（しち）取^とての御詮^{おんせん}義。天河屋の義平は男でござるぞ。子に羈^ほれ存^{ぞん}ぜぬ事を。存^{ぞん}たとは得申^{えぞん}さぬ。嘗^{かつ}て何にも存^{ぞん}ぜぬ。しらぬ。知^しらぬといふから金輪^{こんりん}ならく。憎^{にく}（にく）しと思は^せ其^{その}駈^かれ。我^{われ}見る所で殺^{ころ}した。テモ胴^{どう}骨^{ぼね}の太^{ふと}いやつ。管^{くだ}鑓^{やり}鉄^{てつ}炮^{ぱう}鎖^さ。四十六本の印^{いん}辻^{つじ}調^{てう}へやつたる儕^しが。知^しらぬといふていはしておこふか。白^{しろ}状^{じやう}せぬと一寸^{いちゆん}様。一^{いっ}分^{ぶん}刻^{こく}に刻^こむが何^{なに}と。ヲ、面^{おもて}白^{しろ}い刻^こ（きざま）れう。武具^{ぶぐ}は勿^な論^{ろん}。公家^{こうか}（くけ）武家^{ぶか}の冠^{かん}鳥^{ひり}帽^{ぼう}子。下女^{げにょ}小^{せう}者が藁^{わら}沓^{くつ}（わらくつ）辻^{つじ}。買^か調^{てう}（かひと）のへて売^うルが商人^{かみん}（あきんど）。それふしぎ逆^{さか}御^ご詮^{せん}義^ぎあらば。日本^{にっぽん}に人種^{じんしゆ}（だね）は有^あるまい。一寸^{いちゆん}だめしも三寸^{さんすん}繩^{なは}も。商^{しょう}売^{ばい}故^こに取^とる命^{いのち}。惜^{おし}（おし）いと思^{おも}はぬサア殺^{ころ}せ。駈^か（せが）も目の前^{まへ}突^つ。《地^ちハル》一寸^{いちゆん}試^しは腕^{うで}（うで）から切^きルか胸^{むね}から裂^さ（さく）か。《ウ》肩^{かた}骨^{ほね}背^せ骨^{ほね}も望^{のぞ}次第^{じだい}と。《ウ》指^{さし}付^{つけ}突^つ付^{つけ}我^{われ}子^こを《中^{ちゆう}》もぎ取^と。子に羈^ほれぬ性^{しやう}根^{こん}（しやうね）を見よと。《ウ》しめ殺^{ころ}すべき《色》其^{その}吃^く相^{さう}（きつさう）。《詞》ヤレ聊^{りやう}尔^に（れうじ）せまい義^ぎ平^{へい}殿^{でん}。暫^{しばらく}し／＼と長^{なが}持^ぢより。《地^ち色^{しき}ウ》大^{だい}星^{せい}由^ゆ良^ら助^{すけ}よし金^{かね}。《ウ》立^た出^でる体^{てい}《ハル》見^みて恟^{おび}（びつ）く^り。《ウ》捕^と手^ての^人、一^{いっ}時^{とき}に。《ウ》十^{じゅう}手^て捕^と手^て繩^{なは}打^{うち}捨^すて《フシ》遙^{はるか}さがつて座^ざをしむる。《地^ち色^{しき}ハル》異^い（ゐ）義^ぎを正^{ただ}（た）して由^ゆ良^ら助^{すけ}《ウ》義^ぎ平^{へい}に向^{むか}ひ《中^{ちゆう}》手^てをつかへ。《詞》扱^あ々^あ驚^{おど}入^いたる御^ご心^{しん}底^{てい}。《地^ち色^{しき}ハル》泥^{どろ}中^{ちゆう}の蓮^{れん}。《ウ》砂^{すな}の中^{ちゆう}の金^{かね}とは貴^き公^{こう}の《中^{ちゆう}》御^ご事^じ。さもあらんさもそふづと。《ウ》見^み込^こで頼^{たの}んだ《ハル》一^{いっ}大^{だい}事^じ。《ウ》此^こ由^ゆ良^ら助^{すけ}は微^み塵^{ちん}聊^{りやう}。《ウ》お疑^ぎひ《色》申^まさね共^{ども}。《詞》馴^な染^ぢ（なじみ）近^{ちか}付^{つけ}（な）き此^こ人^{ひと}／＼。四十^{しじゅう}人^{にん}余^よの中^{ちゆう}にも。天河^{てんか}屋^やの義^ぎ平^{へい}は生^なれながらの町^{まち}人^{ひと}。今^{いま}にも捕^とられ詮^{せん}義^ぎ

にあは^は。いかゞあらん。何かといはん。殊^{ことごと}に寵^{てう}愛^{あい}の一^{いっ}子^こも有^あれば。子^こに迷^{まよ}ふは親^{おや}心^{しん}と評^{ひやう}議^ぎ（ひやうぎ）区^く（まち）々^々。案^{あん}じに胸^{むね}も休^{やす}まらず。《地^ちウ》所^{しよ}詮^{せん}一^{いっ}心^{しん}の定^{ぢやう}めし所^{しよ}を見^みせ。《ウ》古^こ傍^{ぼう}輩^{ばい}の者^{もの}共^{ども}へ安^{あん}堵^ど《ハル》させん為^{ため}。《ウ》せまじき事^{こと}とは存^{ぞん}ながら右^{みぎ}キの仕^し合^あ。《ウ》僂^{せう}忽^{こつ}の段^{だん}は《中^{ちゆう}》まつひら／＼。《詞》花^{はな}は桜^{おう}木^き。人^{ひと}は武^ぶ士^しと申^ませ共^{ども}《地^ちハル》いかな／＼武士^{ぶし}も及^{およ}ばぬ御^ご所^{しよ}存^{ぞん}。百^{ひやく}万^{まん}騎^きの強^{がう}敵^{てき}は防^{ふせ}共^{ども}。《ウ》左^さ程^{ぢやう}に性^{しやう}根^{こん}はすはらぬ物^{もの}。《ウ》貴^き公^{こう}の一^{いっ}心^{しん}をかり受^うケ我^{われ}レ々^々が手^て本^{ほん}とし。《ウ》敵^{てき}師^し直^{ぢく}を討^うッならば誓^{ちか}（ちか）す。《ウ》巖^{いん}石^{せき}の中^{ちゆう}に箆^{へい}（こも）り。鉄^{てつ}洞^{どう}の内^{うち}に隠^{かく}る。《ウ》共^{ども}やはか仕^し損^{そん}じ《色》申^ますべき。《詞》人^{ひと}有^あル中^{ちゆう}にも人^{ひと}なしと申^ませ共^{ども}。町^{ちやう}家^かの中^{ちゆう}にも有^ある物^{もの}。《地^ち色^{しき}ウ》一^{いっ}味^{あじ}徒^と党^{たう}の者^{もの}共^{ども}の《ハル》為^{ため}には。《ウ》生^{せい}土^ど（うぶすな）共^{ども}。氏^{うぢ}神^{しん}共^{ども}。尊^{たつとみ}奉^{ほう}らずんば。《上^{じやう}》御^ご恩^{おん}の冥^{めい}加^かに《中^{ちゆう}》尽^{つき}（つき）果^{くわ}ませう。《詞》静^{せい}謚^いの代^{だい}には賢^{けん}者^{しや}も頭^{あたま}はれず。エ、惜^{おし}（おし）いかな。《地^ちフシ》悔^{くわ}（くわ）しいかな。《中^{ちゆう}》亡^{ぼう}君^{くん}御^ご存^{ぞん}生^{せい}の《ハル》折^せならば。《ウ》一^{いっ}方^{かた}の簾^{せき}（はた）大^{だい}将^{じやう}。《ウ》一^{いっ}國^{こく}の政^{せい}道^{だう}。《ウ》お預^よけ申^ました逆^{さか}惜^{せき}からぬ《中^{ちゆう}》御^ご器^き量^{りやう}。《詞》是^{こゝ}に並^{なら}（な）らぶ大^{だい}驚^{おど}文^{ぶん}吾^{われ}矢^や間^ま重^{じゆう}太^た郎^{らう}を始^{はじめ}。小^{せう}寺^じ高^{かう}松^{そう}堀^{くわ}尾^び板^{ばん}倉^{くら}片^{ぺん}山^{さん}等^{とう}潰^{つぶ}れし眼^めを開^{ひら}かす。《地^ち色^{しき}ハル》妙^{めう}薬^{やく}名^な医^いの心^{しん}魂^{こん}。《ウ》有^あがたし／＼とすさつて三^{さん}押^{おし}人^{にん}々^々も。《ウ》不^ふ骨^{こつ}（こつ）の段^{だん}真^ま平^{へい}と置^おに。頭^{あたま}を《中^{ちゆう}》摺^{すり}（すり）付^{つけ}る。《詞》ヤレ夫^{おつ}レは御^ご迷^{めい}惑^{わく}お手^て上^{じやう}ケられて下^{くだ}さりませ。惣^{そう}体^{たい}（そうたい）人^{ひと}と馬^{うま}には。乗^{のり}て見^みよ添^そ（そふ）て見^みよと申^ませ。お馴^な染^ぢ（なじみ）ない御^ご旁^{ぼう}（かた）／＼は氣^きづかひに思^{おも}召^めスも尤^{なほ}。私^{わが}元^{もと}は輕^{かろ}い者^{もの}。お國^{くに}の御^ご用^{よう}承^{じやう}はつてより。経^{けい}（へ）上^{じやう}つた此^こ身^み代^{だい}。判^{はん}官^{くわん}様^{さま}の樣^{よう}子^こ承^{じやう}はつて俱^{とも}に無^な念^{ねん}。何^{なに}卒^{そつ}此^こ恥^ち辱^{じやく}雪^{せつ}（すゝぎ）やうはないかと。りきんで見^みても泰^い龜^{かめ}のじだんだ。及^{およ}ばぬ事^{こと}と存^{ぞん}じた所^{ところ}へ。由^ゆ良^ら助^{すけ}様^{さま}のお頼^{たの}。こそ心得^{こころえ}たと向^{むか}ふ見^みず。俱^{とも}にお力^{ちから}付^{つけ}ける計^{けい}。《地^ち色^{しき}中^{ちゆう}》情^{じやう}ないは町^{まち}人^{にん}の身^みの上^{じやう}。《ウ》手^て一^{いっ}合^あでも御^ご扶^ふ持^ぢを戴^{たい}（ま）したらば。《ウ》此^こ度^たの思^{おも}し立^た。《ウ》袖^{そで}つまに取^と付^{つけ}て成^{なり}共^{ども}お供^ぐ申^ま。《ウ》いづれも様^{さま}へ息^{いき}つぎの。《ウ》茶^{ちや}水^{すい}でも汲^{くみ}（くみ）ませう《中^{ちゆう}》に。《詞》夫^{おつ}も叶^かはぬ

は。よく／＼町人はあさましい物。是を思へばお主の御恩。刀の威光一
くはう一は有かたい物。《地ハル》それ故にこそ《ウ》お命捨らるゝ。
御羨しう《色》存まする。《ウ》猶も冥途で御奉公。お序に義平めが。
《ウ》志もお執成（とりなし）と《ウ》あつき詞に人／＼も。《上》
思はず涙《キン》催（もよほ）して《フシ中ハル》奥歯（おくば）。
割（か）みわる計也。《地色ノル》由良助《色》取あへず。《詞》今
晩鎌倉へ出立。本望遂（とど）ぐるも百日とは過（す）すまじ。承は
れば。御内証（ないしやう）省給（はぶ）ふ由重々のお志（こころ）さし。追付（おしづ）夫（つ）も呼返
させ申さん。《地色ハル》御不自由（じゆう）も今暫く。《フシ》早（はや）お暇（ひま）と立上る。
《地ハル》ヤレ申さばめで度旅立。《ウ》いづれも様へも御酒一つ。《詞》
いや夫（つ）は。ハテ扱祝（あつかひ）（いは）ふて手打（てうち）の蕎麦（そば）一切。ヤ手打（てうち）とは
吉相（きさう）。然らば大驚（おどろ）矢間（やま）御兩人（ごにり）は跡に残（のこ）り。先（ま）手組（てぐみ）の人（ひと）／＼は。郷右衛
門力（ぢから）弥（や）を誘（さそ）ひ。佐田（さだ）の森（もり）お先（ま）へ《地色ハル》いさこなたへ
と亭主（ていしゆ）が案内（あんない）。《ウ》お辞義（じぎ）は無礼（れい）と《中》由良助（ゆらすけ）《ヲクリ》二人を
伴（たづ）ひ《中》入（い）れ月（つき）と。《ハルフシ》又出（で）る《中》月（つき）と。二つ輪（りん）の《ウ》
親（おや）と夫（つ）（つま）との《ハル》中に立（た）つ。《長地》おそのは一人小挑（ちやうせん）灯（とう）《ウ》
くらき思（おも）ひも。《キンフシ》子故（こご）の闇（やみ）。《ウキン》あやなき門（かど）を《色》
打（う）たゝき。《詞》伊五（いご）よ／＼と呼（よ）ぶ声（こゑ）が。《地色ハル》寐耳（みみ）にふつとあほ
うは《色》かけ出（で）る。《詞》おれ呼（よ）んだは誰（たれ）じや。化生（けしやう）の者（もの）か。迷（まよ）ひの者
か。イヤそのじや愛明（あいめい）てくれ。そふいふても気味（きゐ）が悪（わる）い。必（かな）ばあとい
ふまいぞと。《地色ハル》言（い）つゝ門（かど）の《色》戸押（とど）ひらき。《詞》エ、
おゑさんかようごんしたの。一人あるききすると。ナ病（やまひ）犬（いぬ）が噛（か）むぞへ。
ヲ、犬（いぬ）に成（な）り共（とも）かまれて死（し）んだら。今の思（おも）ひは有（あ）まいに。おりや去（さ）れたは
いやい。どんな事（こと）にならんしたなア。旦那殿（だんなどの）はねてか。イ、エ。留（とど）まるか。
イ、エ。何（なに）の事（こと）じやぞやい。何（なに）の事（こと）やらわしもしらぬが。宵（よ）のくちに猫（ねこ）
が鼠（ねづみ）を取（と）つたかして。とつた／＼と大勢（おほしやう）来たが。ちやつとおれは蒲団（ふとん）か
ぶつたればつゝ《ウ》寐（ね）入（い）た。今（いま）其（その）わる達（たち）と奥（おく）で酒盛（さか）ざんざやつて

ゞござんす。《ハテ》合点（あてん）のいかぬそふしてぼんはねたか。アイ是（こゝ）はよ
うねてゞござんす。旦那殿（だんなどの）とねたか。イ、エ。われとねたか。イ、エ。
つゝ一人（ひとり）ころりと。なぜ伽（か）してねさしてくれぬ。夫（つ）でもわしにも旦那
様（さま）にも。乳（ち）がないといふて泣（な）てばつかり。へエ、可愛（かひ）やそふである／
＼。《地上》夫（つ）ればつかりがほんの事（こと）と《フシ》わつと泣（な）出す門（かど）の口（くち）。
《ウ》空（そら）にしられぬ《フシ》雨（あめ）の足（あし）《中ハル》かはく。袂（たもと）もなかりける。
《詞》ヤイ／＼伊五（いご）めどこにおると。《地色ウ》呼（よ）立（た）出（で）る主（しゅ）の《ハル》
義平（ぎへい）。アイ／＼《ウ》愛（あい）にとかけ入（い）れ跡（あと）。《ウ》尻目（しりめ）にかけて《色》た
わけめが。《詞》奥（おく）へいて給（たま）仕（し）ひるげと。《地色ウ》呵（か）追（お）いやり門（かど）の戸（こ）
を。《ウ》さすを押（お）サへて。《詞》コレ旦那殿（だんなどの）。いふ事（こと）が有（あ）る愛明（あいめい）て。《地
色ウ》イヤ聞（き）事（こと）もなしふ事（こと）も。《ウ》内証（ないしやう）一（いち）の《ハル》畜（ちく）生（せい）め。《ウ》穢（けが）
はしいそこ《色》のこふ。《詞》イヤ親（おや）と一（いち）所（ところ）でない証（しやう）拠（たより）。それ見て
疑（うたが）ひ晴（は）れてたべと。《地色ウ》戸（こ）の透（すき）よりも投（な）げ込（こ）め一（いち）通（つう）。《ハル》拾（ひろ）ひ
取（と）れ間に付（つ）込（こ）め女房（にようぼう）。《ウ》夫（つ）は書（か）き物（もの）一（いち）目（め）見て。《詞》コリヤ取（と）前（まへ）や
つた暇（ひま）の状（じやう）。是（こゝ）戻（もど）してどふするのじや。どふするとは聞（き）へませぬ。親（おや）
了（り）竹（たけ）の悪（わる）工（たくみ）。常（つね）からよう知（し）つての事（こと）。譬（たと）へどの様（よう）な事（こと）有（あ）る。なぜ隙（ひま）状（じやう）
をくだんした。《地色ハル》持（も）つて戻（もど）ると嫁（よめ）らすと。思（おも）ひも寄（よ）ぬ拵（しやう）。《ウ》
嬉（うれ）しい顔（かほ）で油断（ゆだん）させ《ウ》涕（な）紙（かみ）袋（ふくろ）の去（さ）り状（じやう）。《ウ》盗（ぬす）んでわしは逃（に）げ
《中》来（き）ました。お前はよし松（まつ）《ハル》可愛（かひ）ないか。《ウ》去（さ）つてあ
の子（こ）を継（ついで）母（はは）に。《ウ》かける気（き）かいの胸（むね）欲（ほ）など。《ウキン》すがり歎（なげ）けは。
《詞》ヤア其（その）恨（うらみ）は逆（さか）かねち。此（こゝ）内（うち）をいなす折（せ）。言（い）喩（よ）たを何（なに）と聞（き）
た。様子（ようす）有（あ）つて其（その）方（かた）に隙（ひま）やるでなし。暫（しば）しの内（うち）親（おや）里（さと）へ帰（かへ）つて居（い）よ。舅（うぢ）了（り）
竹（たけ）は。元（もと）九（く）太（た）夫（ふ）が扶（たす）持（も）人（ひと）。《地色中》心（こゝろ）とけねば子（こ）細（こ）はいはぬ。病（び）気（き）
の体（てい）にもてなし。《ウ》起（お）き臥（ふ）し自由（じゆう）にすな。《ウ》櫛（くし）も取（と）れなど言（い）付（つ）けや
つたを《色》なぜ忘（わす）れた。《詞》さんばら髪（かみ）て居（い）る者（もの）を。嫁（よめ）にとろとは
言（い）ぬはやい。《地ハル》何（なに）の儕（し）れがよし松（まつ）が《色》かはいかる。《詞》昼（ひる）
は一（いち）日（ひ）あほうめが。だましすかせと夜（よ）に成（な）ると。鼻（はな）様（さま）／＼と尋（たず）ねる。

かゝは追ッ付ケ。もふ爰へと。《地色ハル》だましてねさせどようねいら
ず。呵(しかつ)てねさそと擲付ケ。《ウ》こはい顔すりや声上ケず。《詞》
しく／＼泣いておるを見ては。身ふしが碎(くだ)けてこたへらるゝ物
じやない。《地色ハル》是を思へば親の恩。子を《ウ》持てしるといふ。
《ウ》不孝(かう)の罰と我身をば。《上》悔(くやん)で《中フシ》
夜と俱泣明カす。《詞》夕部も三度抱上ケて。もふ連れていこ。抱いてい
こと。門ト口出たれ共。一夜で堪納(たんのう)するでもなし。五十日隙(ひま)どろやら。
百日隔(ひだり)ておこふやら。知(し)ぬ事に馴染(なじま)しては。跡の難(なん)義と
五町三町。《地ハル》ゆぶりあるいて擲付ケ。《ウ》ねさしてはそつとこ
かし。《ウ》我肌付(はだ)ければ現(うつつ)にも。《ウ》乳をさがしてしがみ付キ。《ウ》
わづかな間の別れでさへ。《ウ》恋こがるゝ物一(しやう)を。《ウ》
引(ひ)わけふとは《色》思はね共。《詞》是非(ぜい)に及ばず暇(いひま)の状。了竹へ渡
せしを。内証(ないしやう)にて受(う)取ては。親の赦(ゆる)さぬ不義(ふぎ)の科(とが)。心よから
ず持て帰(かへ)れ。是迄(こゝ)の縁(えん)。約束(やくそく)束事(そくじ)。死(し)だと思へば事(こと)済(す)むと。《地色ハル》
切(き)離(はな)れよき男気(おとこげ)は。《上》常(つね)をしる程(ほど)《中フシ》猶(なほ)悲(かな)しく。《詞》此家(こゝ)に
居るとお前(まへ)が立(た)タず。内(うち)へいぬると嫁(よめ)にやならず。《地上》悲(かな)しい者は
わたし一人(ひとり)。《詞》是(こゝ)が別(わか)れにならふも知(し)ぬ。《地ハル》よし松(まつ)をお
こしてちよつと逢(あ)して下(くだ)さんせ。《詞》イヤそれならぬ。今逢(いまあ)て今別(いまわか)る
ゝ其身(そのみ)身。跡(あと)の思(おも)ひが猶(なほ)不(ふ)便(べん)な。《地色ウ》わけて今宵(こんや)は《ハル》お客(おきゃく)も
有(あ)り。《ウ》くど／＼いはずと早く《色》おいきやれ。《上》夫(つま)でもちよ
つとよし松(まつ)に。《詞》ハテ扱(あ)れ未(ま)練(れん)な。跡(あと)の難(なん)義(ぎ)を思はずやと。《地色ウ》
むりに引(ひ)ッ立(た)去(さ)り状(じやう)も。《ウ》俱(とも)に渡(わた)して門(かど)先(まへ)へ《ハル》心(こゝろ)強(つよ)くも《色》
突出(とつしゅ)し。《詞》子(こ)がかはゆくば了(り)了(り)竹(たけ)へ。侘言(わびこと)立(た)てて春(はる)迄(まで)も。かくまひ貫(ぬ)は
はゞ思案(しあん)もあらん。《地ウ》それ叶(かな)はずば《ハル》是(こゝ)は限(かぎ)りと門(かど)の戸(かど)フ
シしめて《フシ》内(うち)に入(い)る。《地上》ノウ夫(おと)夫(つま)が叶(かな)ふ程(ほど)なれば。《ウ》此(こ)思
ひはゞざんせぬ。《ウ》つれないぞや《中》我(わ)夫(つま)。《詞》科(とが)もない身(み)を
去(さ)るのみか。我子(わがこ)に迄逢(こゝ)さぬは。あんまりむごい胴欲(どうよく)な。《地色ハル》

- 1 -

顔見る迄(まで)はなんぼでも。《ウ》いなぬ／＼と門(かど)打(う)たゝき。《詞》情(なさけ)じや。
慈悲(じい)じや。爰(こゝ)明(あ)けて。《地上》寐顔(みかほ)成(な)り共(とも)見(み)せてたべ。《ウ》コレ手を合
せ拜(まが)ます。《ウ》むごいわいの《キンフシ》とどふどふし《中ハル》前
後(のち)。不覚(ふかく)に《ハル》泣(な)けるが。《地色中》ハア、恨(うら)むまい《色》嘆(なげ)く
まい。《詞》なま中に顔(かほ)見たら。かゝ様(さま)かと取付(と)いて。離(はな)しもせまいし
離(はな)れも成(な)るまい。《地色中》今宵(こんや)いぬれば《ハル》今宵(こんや)の嫁(よめ)入(い)る。《ウ》あ
す迄(まで)待(まち)れぬわしが命(いのち)。《ウ》さらばでござる《中》さらばやと。《ウ》
いふては戸口(かど)へ耳(みみ)を寄(よ)せ。《上》若(わか)しや我子(わがこ)が声(こゑ)するか。《ウ》顔(かほ)でも見
せてくれるかと。《ウ》窺(うかが)ひ聞(き)ケど《中》音(ね)もせず。ハア、《ハル》ぜ
ひもなや是(こゝ)と《ウ》思(おも)ひ切(き)りてかけ出す《中》向(む)ふへ。《ウ》目計(めけ)り出
した大男(おおおとこ)《ハル》道(みち)をふさいで《中》引(ひ)ッとらへ。《ウ》是(こゝ)はといふ間
も情(なさけ)なや《ハル》すらりと抜(ぬ)いて嶋田(しまた)わけ。《ウ》根(ね)よりふつと切取(きり)ッ
て《ウ》懷(なつか)し引(ひ)ッさらへ。《ウ》いづく共(とも)なく逃(に)げ行(い)し《ハツミフシ》
無(む)法(ぼう)無(む)息(いき)ぞ是非(ぜい)もなき。《地上》ノウ憎(にく)や腹(はら)立(た)や。《ウ》何者(なにもの)かむごた
らしう髪切(かみ)切(き)って。《ウ》書(か)いた物(もの)迄取(と)っていんだ。櫛(くし)笄(かうがい)の盗(ぬす)人(ひと)なら。《ウ》
いつそ殺(ころ)して／＼と《中》泣(な)さけぶ。《ウ》声(こゑ)に驚(おど)き義平(ぎへい)は思(おも)はず《ハ
ル》かけ出しが。《ウ》ハア爰(こゝ)が男(おとこ)の魂(たま)の《中》乱(みだ)れ口(くち)よと喰(く)しぼり。
《ウ》ためらふ中(な)ちに《中》奥(おく)よりも。《詞》御亭主(ごていず)／＼。《地色ウ》義
平殿(ぎへいでん)と《ハル》立(た)出(で)る《中》由(よし)良(よし)助(すけ)。《詞》段々(だんだん)御深切(ごしんせつ)の御馳走(ごちそう)走(は)る。お
礼(れい)は鎌倉(かまくら)より申越(まを)さん。猶(なほ)跡(あと)荷物(にもの)の義(ぎ)。早(はや)飛脚(ひやく)を以(も)つてお頼(たの)申(まを)す。夜(よ)の明(あ)け
ぬ中(な)ち早(はや)お暇(いひま)。いか様(さま)。今(いま)暫(しばらく)し共(とも)申(まを)されぬ刻限(ときかぎ)。道中(みちのち)御堅勝(ごけんしょう)で。御吉(ごきち)左(さ)右(みぎ)
を相待(あひまち)ます。着(ちか)致(いた)さば早(はや)速(すみ)書翰(しよかん)を以(も)つておしらせ申(まを)す。返(かへ)す／＼
も此度(こゝろ)のお世話(せわ)。詞(ことば)でお礼(れい)は言(い)ふ。尽(つく)されませぬ。ソレ矢間(やま)大驚(おほおど)御亭主(ごていず)へ
置(お)キ土産(みやげ)。《地ハル》はつと文吾(ぶんご)十太郎(じゅうたろう)。《ウ》扇(あふ)を時の白(しろ)台(だい)と乗(の)せて出
たる一(ひとつ)包(つみ)。《詞》是(こゝ)は貴公(きこう)へ是(こゝ)は又(また)。御内宝(ごうちほう)おその殿(との)。《地ハル》左
少(さ)ながらと指(さ)出す。《地ハル》義平(ぎへい)はむつと《色》顔色(かほいろ)かはり。《詞》
詞(ことば)でいはれぬ礼(れい)と有(あ)れば。イヤコレ礼物(れいぶつ)受(う)つと存(ぞん)し。命(いのち)がけのお世話(せわ)は

申さぬ。町人と見侮り。小判の耳で面はるのか。イヤ我々は娑婆の暇。貴殿は残る此世の宿縁。御台かほよ御前の義も御頼申さん為。《地ハル》寸志計りと《中》言残し。《ハルフシ》表テへ出れば《色》猶むつと。《詞》性根魂一しやうねだま》を見ちがへたか。踏付けた仕方あたいま／＼し。《地ハル》穢はしと《ウ》包し進物《中》蹴飛ばせば。《ウ》包ほどけて内よりばらり《ハル》女房かけ寄。《詞》コレ是はわしが櫛 笄。切れた髪。ヤア／＼此一包は去リ状。ホイ扱は取前切たのは。ホウ此由良ノ助が大驚文吾を裏道より廻らせ。根よりふつと切ラした心は。いかな親でも尼法師を。嫁らそふ共いふまいし。嫁に取ル者は猶有ルまい。其髪の延る間も凡百日。我々本望遂るも百日は過ぎ。討課せた後めで度祝言。其時には櫛 笄。其切髪を添に入。《地ハル》笄鬢の《ウ》三国一先ッ夫は《中》尼の乳母。《詞》一季（き）半季の奉公人。其肝煎は大驚文吾同矢間十太郎。《地色ハル》此両人が連中へ《ウ》大事は洩ぬといふ《中》請ケ判。《ウ》由良ノ助は冥途から仲人致さん《色》義平殿。《詞》ハア、重々のお志。お礼申せ女房。《地色ハル》わたしが為には命の親。《詞》イヤお礼に及ばず。返シ礼と申スも九牛が一毛。義平殿にも町人ならずば。俱に出達ッとの有望幸イかな。兼て夜討チと存れば。敵中へ入込ム時。貴殿の家名の天河屋を直ッに夜討の合詞。天とかけなば河とこたへ《地ハル》四十人余の者共が。《ウ》天よ。河よと《色》申なら。《詞》貴公も夜討にお出も同前。義平の義の字は義臣の義の字。平はたいらか輒く本望。《地色中ハル》早お暇と。《合ウ》立出る。《ウ》末世に天を山といふ。《ウ》由良ノ助が孫呉の術。《上ウ》忠臣蔵共いひはやす。《ウ》娑婆の言葉の《中》定めなき《色》わかれ《上》別れて。三重《上》いでゆく*

第十一段 勢揃より引上の段

∴ 第十一 * L11 《地ハル》柔能剛をせいし弱能強をせいするとは。《ウ》張 良に石公が伝へし《中》秘法なり。塩治判官高定の家臣。《ウ》ハル》大星由良ノ助是を《中》守つて。既に《ウ》一味の勇士四十余騎獵船《ハル》に取り乗つて。苦《ウ》ふか／＼と稲村が崎の油断を頼にて。《フシ》岸の岩根に漕寄せて。《コハリ》先ッ一ッ番に打上るは。《ウ》大星由良ノ助《色》義金。《ウ》二番目は原郷右衛門。第三番目は大星力キ弥。《ナラスキン》跡に續て《ハル》竹森喜多八片山源太。《中ウ》先キ手跡舟段々に烈を乱さず。《コハリ》立出る。《ウ》奥山孫七《ウ》次田五郎。《ハル》着たる羽織の《色》合ッ印。《ウ》いろはにはほへと《フシ》と立ならぶ。《地中》勝ッ田早見遠の森。音に聞へし《ハル》片山源五。《ウ》大驚源吾かけやの大槌《色》引ッさげ／＼。《詞ノリ》吉田岡崎ちりぬるをわか手は小寺立川甚兵衛。不破前原深川弥次郎。《地ウキン》得たる半ッ弓《ハル》手挟で。上るは《ウ》中《川瀬忠大夫》フシハル》空に輝く。《色》大星瀬平。《ウ》よたれそ。《ウ》つねならむ《ウ》うゐの。《ウ》奥村岡野《ハル》小寺が嫡子。《ウ》中村矢嶋牧平賀《トル》やまけふこえて。《ウ》朝霧の《フシハル》立並びたる芦野や菅野。《詞ノリ》千葉に村松村橋伝治。塩田赤根は《色》長刀構へ。《江戸ハルウ》中にも磯川十文字。《下キン》遠松杉野《色》三村の次郎。《中キン》木村は用意の継梯子。《ハルウ》千崎弥五郎《ナラス中》堀井の弥惣。《ハルキンウ》同弥九郎遊所の酒に多ひもせぬ。《コハリウ》由良ノ助が智略にて八尺計りの《ウ》大竹に。弦をかけてぞ持たりける。《ウ》後陳は《ウ》矢間十太郎。《ハル》遥跡より《ナラス》身を卑下し。《ウ》出るは《色》寺岡平右衛門。仮名実名袖印《フシ》其数四十六人なり。《地ウ》鎖袴に黒羽織忠義の胸当て。打揃ふ。《ハル》げに忠臣のかな手本《ウ》義心の手本《色》義平が家名。《詞》天と河

* 「柔能剛をせいし弱能強をせいする」は、中国の兵法書『三略』が典故。

との合詞忘るな兼ての言合せ。矢間千崎小寺の面々。駈力弥を始とし
表門より入／＼。郷右衛門と某は裏門より込入て。《地ウ》相図
の笛を吹ッならば時分はよしと《ハル》乗込よ。取べき《ウ》首は只
一つと。《ウ》由良助に下知せられ怒の眼一時に。館を遙に《ウ》睨
付ケ裏と表テへ。三重《上》へ別れ行。《フシ》かくとはしらず。《地ハ
ル》高武蔵ノ守師直は。由良ノ助が放埒に心もゆるむ《中》油断酒。《ウ》芸子
遊女に舞イ諷はせ。《ウ》葉師寺を上客にて身の程しらぬ《ハル》大駱。
《ウ》果はざこ寐の不行義に前後もしらぬ寐入ばな。非常を守る《ウ》
番人の《フシ》。柝のみぞ残りけり。《地ウ》表裏一度に手筈を極め。
矢間千崎《ウ》不敵の二人。《ハル》表門に忍び寄り内の様子を《中》
窺へば。《ウ》夜廻りと思しき柝遠音をさせば能折と。《ウ》例の嗜む
継梯子。高塀に打かけ／＼《ハル》雲井込もと《ウ》さゝがにの《中》
登り課せた塀の屋根。《ハル》早柝の近カ付音ひらりとおりるを見付ケし
《色》番人。スハ《ウ》何者とかけ寄を《ハル》取ッて引ッふせ高手小手。
《中ウ》よい案内と息をとめ縄先腰に《ハル》引ッかけて。《ウ》柝奪
ひかつちかち。《ウ》役所／＼を打廻り窺ひ《中》廻るぞ《ウフシ》不
敵なる。《地ハル》早裏門に《中》呼子の笛。時分はよしと兩人は。
《ウ》柝合せて天河と。《ハル》貫の木はづして大門をくはらりとひら
けば《色》力弥を始め。《ウ》杉野木村三村の一堂《ハル》我しも／＼
と込入ッて。《ウ》見れば一面雨戸のかため父が教し雪折は。爰ぞと
下知して丸竹に。弦をかけたを雨戸の鴨居。《ウ》敷居にはさんで《色》
一時に。《ウ》ひいふう三つの拍子にて《ウ》かけたる弦をてうど切レ
ば。鴨居はあがり敷居はさがり雨戸はづれて《ウ》ばた／＼。《ウ》
そりや乗込メと天河の《フシ》声ひゞかして乱入ル。《地ハル》スハ夜
討チぞと松明挑灯裏門よりも込入て。《ウ》一方は郷右衛門一方は《色》
由良ノ助。《ウ》床几にかゝつて下知をなす。《ハル》小勢なれ共寄セ手
は今宵必死の勇者。《ウ》秘術を尽せば《色》由良ノ助。《詞》余の者に

目なかけそ只師直を討チ取レと。《地ハル》郷右衛門諸共に八方に下知す
れば。《ウ》はやりをの若者共も立テ／＼三重《上》へ切結ぶ。《地ハ
ル》北隣は仁木播磨守南隣は石堂右馬の丞。《中ウ》両隣より何事か
と《ハル》家の棟に武者を上ケ《フシ》挑灯星のごとくにて。《詞》ヤ
ア／＼御屋敷騷動の声太刀音矢叫び事さはがしく。狼籍者か盗賊か。
《地ハル》但非常の沙汰なるか。《ウ》承り届けよと。《ウ》主人申付ケ
られしと《フシ》高らかに呼はつたり。《地ハル》由良ノ助《色》取あ
へず。《詞》是は塩冶判官が家来の者共。主君の怨を報はん為。四十
余人の者共千変万化の戦ひ。かく申スは大星由良ノ助原郷右衛門。尊氏
御兄弟へお恨なし。元来両隣仁木石堂殿へ何の遺恨も候はねば。卒尔致
さん様もなし。火の用心は堅く申付ケたれば。是以ッて御用心に及はぬ
事。只穩便に捨置カレよ。夫ノ逆も隣家の事聞捨ならず加勢あらば。力な
く一ト矢仕らんと高声に答たり。《地ハル》両家の人々聞届ケ《色》御
神妙／＼。《ウ》我人主人持ッたる身は《ウ》尤斯こそ《ハル》有べけ
れ。《ウ》御用あらば承はらん挑灯引ケと一時に。《フシ》静返つて扣
へける。《地ハル》一時計りの戦ひに寄せ手は僅二三人。《ウ》薄手を負
たる計にて敵の手負は数しれず。され共《ウ》大将師直とおぼしき者も
なき所に。《ウ》足輕寺岡平右衛門。《ウ》館の内を《色》飛廻り。《詞》
部屋／＼勿論上は天井下は簀子。井の内込鎖を入れてさがせ共師直が行
衛知レす。寐間とおほしき所を見れば。夜着蒲団の温り。此寒夜にさ
めざるは逃ッて間なしと覚へたり。《地ハル》表テの方が気づかはしとか
け行を。《色》ヤレ平右衛門待テ／＼と。矢間十太郎重行。《ハル》師直
をに引ッ立テ《色》コレ／＼何れも。《詞》柴部屋に隠れしを見付ケ出し
て生捕しと。《地ハルウ》聞より大勢花に露いき／＼勇で《色》由良
ノ助。《詞》ヤレでかされた手柄／＼。去ながらうかつに殺すな。仮に
も天下の執事職。殺すにも礼義有リと。《地ハル》請取ッて《色》上座に
すへ。《詞》我々倍臣の身として。御館へふん込狼籍仕るも主君の怨

右之本煩句音節墨譜等令加筆候師若針弟子如縷因吾儕所伝沂先師之源幸甚竹本義太夫伝教予以著述原本校合一過可為正本者也 浪華山本九菓亭版同玉水源次郎版同紙屋与右衛門版京寺町通松原上町今井七郎兵衛版江戸日本橋四日市松本平助版大阪北浜西横堀船町加島屋清助版

付記 このデータは、以下のデータベースを活用させていただき、更に読みやすく再編し直したものである。まだ、訂正補正すべき箇所も多く残しているが、徐々に精度を高めていくことで日本語史と日本語文化を考察していくことに寄与できる資料に仕上げていきたい。(萩原義雄識)

■本機械可読データは、宇部短期大学国語国文学専攻の文学演習、及び情報計数学科特別演習の教育の一環として、竹田出雲、並木千柳、三好松洛作、『仮名手本忠臣蔵』の影印本（桜楓社発行 七行九十九丁の再版本）を底本にし、その他の諸本を参照しながら翻刻、入力をしたものを江木鶴子、前田桂子が監修責任者として公開するものである。

■作成にあたっては万全を期したが、浄琉璃符号などには一部解読不可能なものが存在した。その点を御了解いただいた上でご使用願いたい。

■原作者の著作権は消失していると考えられている。尚、機械可読データの翻刻、入力についての著作権は江木、前田にある。

■このテキストの加工、再配付については当方は一切干渉しない。但し、営利目的の使用は禁ずる。

■翻刻：宇部短期大学国語国文学専攻学生

新井智美、内田千穂、大野浩子、児玉かおり、斎藤亮子、末広寿子、西本智美

■入力：宇部短期大学情報計数学科学生

市川恵、市原和美、植村香織、嶋谷美久、末安幸司、高田敬子、高野桂

子

■監修：前田桂子、江木鶴子

江木鶴子 Mail: egi@cs.uibe-c.ac.jp

前田桂子 Mail: maeda@pub.uibe-c.ac.jp

凡例

入力の際のルールは以下の通りである。

1 可能な限り忠実に底本の通りに入力する。誤写と思われるものもそのまま訂正を加えない。

2 底本にある振りかなは「レ」で括る。

3 但し、振りかな付の漢字の始めには、レを入力する。

4 小書きの片仮名の送りかなは「レ」で囲んで入力する。

5 本文中の片仮名は、全角文字でそのまま入力する。

6 浄琉璃記号は判別可能な限り「レ」と「レ」で囲んで、そのままを入力する。但し、墨点は省略した。例)《ハル中》

7 漢字は常用漢字で入力し、常用漢字にない字体については可能な限り本字で入力する。また、JISにない漢字はABC等を入力する。

X	「占」	「 <small>レ</small> 」	「 <small>レ</small> 」
B	「 <small>レ</small> 」	「取」	「取」
C	「身」	「分」	「 <small>レ</small> 」
D	「 <small>レ</small> 」	「鶴」	「 <small>レ</small> 」
E	「女」	「白」	「 <small>レ</small> 」
F	「革」	「可」	「 <small>レ</small> 」
G	「 <small>レ</small> 」	「巴」	「髻」
H	「身」	「空」	「 <small>レ</small> 」
K	「易」	「鳥」	「 <small>レ</small> 」

